





書叢薇薈

編 五 第

ルカスマスリク

作スンケイチ

譯大庭 口 矢

4. 4. 21

内交

15
Y



152216

~~5.8.4~~

緒言

チャアレズ・テイケンズは一八一二年に生まれて一八七〇年に死んだ。彼は通俗なる英吉利人を代表したやうな人物で、常に公衆と相接し、いかに公衆を代表し、いかに公衆のために語るべきかを知つて居た。彼は通信員として生涯を始め、次いで記者となり素人俳優アマトウとなり、作家となつた。作家としては先づ彼は倫敦生活のスケッチをカリカチュアとして描いた。『Sketches by Boz』がそれである。何等のプランを用ひずに喜劇的人物を取入れた『The Pickwick Papers』が次に出版された。後は彼はグロテスクな人物を取扱ふことに努めた。即ち『Oliver Twist』中のフェギンとザイクス、『Old Curiosity Shop』中のクイルプ等がそれである。其他の作には『Tale of Two Cities』と『David Copperfield』『Nicholas Nickleby』等がある。

彼の作品はまた明確な道德的目的を有するものが多い。彼は公私の陋習弊害を矯正しようとした。『Oliver Twist』は工場を攻撃したものであり『Nicholas

“Nickleby”は學校の殘酷を指彈したものである。彼は哄笑と恐怖と流涕を意のままに引き出すことができた。然しこれに伴ふ缺點として、人物がそのまゝの像畫に見えるよりは寧ろ戯畫に見える。けれども輕妙自在な筆致は讀む者の心を魅するに充分である。

私の譯出した“Christmas Carol”は一八四三年十月に稿を起して十一月に稿を脱したもので、案の起つや否や輿に任せて筆を馳り、或は泣き或は笑ひ狂人の如くになつて脱稿したものである。代表的の大作ではないが、愛讀者の多い點では優に第一位を占めて居る。我國でも久しい前から今日まで、讀者の數は愈増して來たのである。譯出するに當つて、其輕快洒脫なる筆致に私自身の筆が力及ばないのを非常に遺憾とした。原文には忠實に努めたつもりである。少年讀者諸君の參考せられんことを希望する。

一九一五年三月八日

教員室の一隅にて

達

クリスマスカロル

次	目
一	マアレエの亡霊……………一
二	幽霊の第一……………三三
三	幽霊の第二……………六三
四	最後の幽霊……………一〇一
五	その終結……………一三一

一 マアレエの亡霊

マアレエは死んだ——物語はこゝに始まる。彼が死さぬ事實には、何等疑を挿む餘地がない。彼が埋葬の登録は、僧侶により、書記により、葬儀係により、また喪主によつてそれ／＼調印された。スクルーシが署名したのである。而してスクルーシの名は相場界に勢力があつたので、彼が手を出せば何事にも効目があつたのだ。

マアレエ老人は戸釘のやうに死んでしまつた。

待てよ！僕は戸釘が殊更に死の性を具へてゐるさういふ事を、自分一個の考察から、承知して居るさういふではない。僕自身では、世に賣られて居る鐵器の中で、棺桶の釘が第一等の死物であるを認めたいのである。然しこの譬喩には古人の智慧が入つて居るのだ。それで僕の穢れた手がそれを壊すことは禁物だ、そんなことでもあれば國家がおしまひになる。それ故、僕は御免を蒙つて、力強く、マアレエは戸釘のやうに死んだのだと繰返さう。

スクルーシは彼が死んだのだと知つて居つたか？勿論彼は知つて居た。知らなくて如何しやう？スクルーシは彼は何年かもわからぬ程長い歲月仲間同志であつたのだ。スクルーシは彼の唯一の遺言管理人また處理者であり、彼の唯一の相續者受遺者であり、彼の無二の友人であり、且又唯一の喪主

であつた。而もスクルーツはこの悲しい出来事に左程劇しく心を痛めないばかりでなく、葬式の當日
なほ商買上の敏腕家であつたので、確かな利得で葬式を弔祭した。

マアレエの葬式のこゝを言つておいて僕は物語の發端へ立戻る。マアレエの死んださいふこゝには
疑ふ餘地がないのである。この一事は明白に承知して貰はねばならぬ、さうでないも何の不思議な事
もこれから僕の話す物語から出て來なくなる。たゞへばハムレットの父がかの戯曲の始まる前に死ん
で居るこゝを充分に承知して居ないならば、父君が春風の吹く中を夜なく、自分の城壘に逍遙するこ
こも更に興が乗らない。或る他の中年紳士が日歿後、單に息子の臆病を驚かしてやらうさいふ考から
微風吹く場處——例へばセントポール墓地さいつたやうな——へそゝかしく出て來る位の事である。

スクルーツはマアレエ老人の名を塗り消しはしなかつた。數年の後も「スクルーツ及びマアレエ」の
名は倉庫の扉の上に掛つて居た。會社はスクルーツ、マアレエ商會といふ名で知られて居た。始めての
取引のものはスクルーツと言つたりマアレエを呼んだりした、然し彼はいづれにも返事をした。それは
どつちにして彼には同じ事であつたのである。

おゝ！然し彼は強慾無慈悲の男であつた。スクルーツ！緊める、振じる、掴む、引掻く、慾張の罪
作り爺であつた！いかに鋼鐵で叩いても景氣のいゝ火の出たこゝがない燧石のやうに硬くて尖つて居
た。引籠つて、一人で納まり返つて孤立して居る様子はまるで牡蠣のやうであつた。心の中のかゝる冷た

さは老いた容貌を凍らせ、尖つた鼻端を振り、頬を皺苦茶にし。歩容をしやちこ張らせた。その眼を
血走らせ、その唇を着磁めさせた。そしてぎし／＼と軋る聲でがみ／＼と文句を言はせた。深い霜が
頭を言はず、肩を言はず、頑固な顎におちた。彼はその身邊に常に自分の低温度を漂はした。三伏の
際にすら店を氷で冷やした。そしてクリスマスにも一度たりさもそれを登らせなかつた。

外界から來る暑ささか寒ささかかはスクルーツに殆ど何の影響もない。いかなる暑氣でも彼を暖めるに
足らず、いかなる寒氣でも彼を冷やすこゝは出來なかつた。いかなる風も彼より傷ましく吹くこゝはな
く、いかなる降雪も彼以上に不屈不撓ではなく、いかなる土砂降も尙且彼程にはあつかましく執拗く
はない、險惡な天候はいづこに於ても彼をへこますべきかを知らない、強猛な雨、雪、霞、霽は、たゞ
一點に於てのみ彼を凌駕するこゝを誇るこゝができた。それは彼等は「降つて來る」(物を施す)こゝ
ができるのに、スクルーツにはそれが決してできないこゝだ。

往來などで誰一人として彼を呼び止めるものはない、「スクルーツさん、御機嫌よう？何時お遊びに
おらつじやいますね？」などと、うれしさうに言葉をかける者は一人もない。乞食すら物をくれなど
彼に纏るこゝもなく、子供等が今何時か訊れる事もなく、いかなる男もいかなる女も、何處其處へ行
く道はなど、スクルーツに質れたこゝは彼の生涯の一度もない。盲人の飼犬すら彼を知つて居る
らしかつた。そして、彼がやつて來るのを見るこゝ、主人を支關口や路次へ引張り込む、そして、「首

首

目の旦那さん、鬼のやうな眼よりは如何様な眼でもまだ結構ですよ！」と言はねばかりに尾を振るのだ。

けれども、こんなことにスクルーシがどうして頓着しやう？それは却つて大に好むところなのだ。人々の群がる世間の道路を押し分け突退け、人間の同情などいふものはみんな遠くへ追ひ離しておくといふのが、スクルーシにまつては如才ない人達の謂はゆる「堅果」(うれしく面白い物)なのだ。

今ははや古いことだ——年中の吉日中の吉日、クリスマスの前夜——スクルーシは忙しく事務所で執務して居た。その夜は寒い、風の荒む、肌を噛まれるやうな天候であつた。それに加へて霧も深かつた。路次の人々がふうふうと喘ぎながら、手を胸に打ち合せ、温めやうと足を舗石道に踏付けて行くのが聞えた。市中の大時計が今三時を打つたばかりなのに、もうまるで暗かつた——今日は一日中明るいことがなかつた——そして近所の店々の窓からは蠟燭の光が燦めいて、どんよりと蒼色の空気に血紅の斑點のやうに見えた。霧は戸の隙や鍵の穴さあらゆる場處から流れ込んだ。外面の霧はいかにも濃いので、露路は市中第一の細路であるに拘らず、向側の家が影か幻のやうであつた。黒々した雲が舞ひ下つて来て、あらゆる物を隠蔽するのを見るに、自然がすぐ傍に住んで、大仕掛で醸酒して居るのぢやないかと思ふだらう。

スクルーシの事務所の戸は開放してある。これは向の薄暗い、槽のやうな狭い室で書記が手紙を書いて居るのを見張らうといふのだ。スクルーシも甚だけちな爐を用ひて居た、ましてや書記の爐はまるで一個の石炭と見える程にもけちなものであつた。然し彼は炭を加ぐことはできない、といふのはスクルーシが石炭箱を手元におくのだから。十能を持つて書記が来やうものなら、彼は必ず、其男を解雇しなければならぬと豫言に及んだ。それ故書記は自分の白い襟巻を巻き付け、蠟燭で暖を取らうとした。その努力に於ては、想像力のあまり強くない彼は失敗つてしまつた。

「クリスマスお芽出たう、伯父さん！御機嫌様！」元氣の聲が叫んだ。それはスクルーシの甥の聲であつた。あまりに唐突にやつて来たので、斯く呼びかけられてやつと始めてスクルーシは氣がついたのである。

「バア！」スクルーシは言つた。「糞を喰へ！」霧の中霜の中を疾廻つて来て體がぼつぼつと熱つたので、このスクルーシの甥御は、いそぐと喜びに輝いて居た。その顔は赤々として麗しかつた。眼はきらりと閃めいて、息はまた白くけふつた。

「クリスマス糞でも喰へですつて、伯父さん！」スクルーシの甥は言つた。「そんなことはしないでせうよ、れえ？」

「あるさもー」スクルーシは言つた。「お芽出度いクリスマスだつて！おまへなんか芽出度がる權利が何處にある？面白がる理由が何處にある？文無ぢやないか。」

「いざつたれ、甥は元氣よく答へた。『そんなら伯父さんなんか愁しがる権利が何處にある？ 盗面する理由が何處にある？ 金持ちやないか。』」

スクルーツは、臨機應變の答が一寸なかつたので、また「バー！」とやつた。そして疊みかけて「糞でも喰へ！」とやらかした。

「さうつむじを曲げちやいけませんよ、伯父さん！」甥は言つた。

「曲げずに居られるもんか、伯父は答へた。『こんな阿呆共の世の中に住んで居るんだもの、クリスマスお芽出度うだつて！クリスマスお芽出度もないもんだ、あほらしい！クリスマスお芽出度の時節つてのは、おまへなんかには金は取られる、金はなしさいふ時に過ぎんちやないか、一年お齡が殖えてござつて一時も金はお殖えにならぬさいふ時ちやないか、帳簿を計算して見りや、まる十二ヶ月の賣上高がすつかり帳消されてるさいふ時ちやないか？世の中が俺の勝手になるなら、伯父は怒氣満々『クリスマスおめでたう、なんてほざいて歩く馬鹿者共をプディングミ一しよに雑煮にして、ひゝらぎを胸へ突き入れて埋めてやるのだからなあ。やつたともさ！』」

「伯父さんたら！」甥は抗辯した。

「子僧！」伯父は權柄づくに、「おまへはおまへで勝手にクリスマスをしる、俺は俺で好きにお祝するから放つさけ。」

「お祝する！」甥は口眞似した。『こころでお祝ひなさらんちやないか。』

「ちや、俺だけ一人祝を抜きにさせておけ、スクルーツは言つた。『おまへさんにや大へん御利益があるだらうよ！これまでも御利益澤山だつたのだらうよ！』」

「世には金の利得がなくても、利益になるものが澤山ありますぜ」甥は言つた。「中にもクリスマスは殊にそれです。ですからクリスマスが廻つて来る度に、まことにいゝ時だといつても思ひましたれ、その名前、その起原に相當する尊敬から離れてもお芽目出いですれ、苟くもそんなものを離して考へられるならのこそだが、親切に、人を恕し、人を助けるさいふ愉快な時です、一年三百六十五日の中で男も女も一樣に自由に胸襟を開き、眼下の人々が皆浮世の道連、死出の旅連で、他の旅路行く人はまるでないさ考へるやうに見えるのはこの時節だけしかないのですよ。だから、伯父さん、たまひお金錢の破片も懐へ入らなくても、僕にまつては利益になつたのです、利益になるのです、ですから僕は、お芽出度いさかういふのです！」

槽の中の書記先生思はずも吾を忘れて喝采した。これは飛んだこころをしたま即座に氣が付いたので彼は火を突ついた、おかげでわづかに燃え残つた火の輝を永久に消してしまつた。

「も一べんほざいて見る、スクルーツは吐鳴つた『すりやお拂箱にして遣はすから、それでおまへのクリスマスを祝うがい、や！先生、なか／＼の辯士でゐらつしやるれ、おい、彼は甥の方へ向き直

つて言ひ足した。「國會議員におなりなさらぬは不思議でござるわい。」

「まあさうお怒りなさらんで、伯父さん。おいでなさい！明日私んここで御一緒に御馳走をやりませう。」

スクルーシは先づ貴様のくたばるごころを見に行かうといつた。げにも、彼は言つた。彼はありつたけの文句を井べた、そして先づ「貴様の困極のごころを拜見じやう」といつた。

「何故です？」甥は言つた。「何故そんなことを？」

「何故おまへは結婚なぞしたんだ？」スクルーシは言つた。

「惚れたからですよ。」

「惚れたからだつて！」スクルーシは唸つた、まるでこの事のみがこの世の中でクリスマスおめでたうより可笑しいものだと言はんばかりに。「おさらば！」

「いや、伯父さん、僕が妻を持たない中だつて、あなたはいらつしやらなかつた。どうして今それをおいでにならない理由にするんです？」

「おさらばだよ！」スクルーシは言つた。

「僕は伯父さんから何を求めても居ません、何も下さいさは申しませんが、どうして僕達は仲善くできないのでせう？」

「おさらばださいふに！」スクルーシは言つた。

「さう伯父さんががみく／＼なさるのを、僕は心から残念に思ひますよ。僕が自ら仲間入をしたやうな喧嘩はまだあなたとやつた例がありません。とにかく僕はクリスマスの回禮に参つたのですから、最後までクリスマスの上機嫌をつまませうよ。そこでクリスマスおめでたう、伯父さん！」

「おさらばよ！」スクルーシは言つた。

「それから新年おめでたう！」

「おさらばだつてのになあ！」スクルーシは言つた。

それでも甥は怒つた口振もせず部屋を出て行つた。彼は外側の戸口で足を止め、書記に時候の挨拶をした、彼は寒かつたけれども心はスクルーシより暖かであつた、それが證據に彼は丁寧言葉をかへした。

「あれにも一人たわけが居るぞ、」それを聞きつけたスクルーシはぶつ／＼獨言した。「書記奴、一週七八圓で、婢、子供があるくせに、クリスマスおめでたうさやかに居るぞ。いつそ癡狂院にでも引籠らうか。」

この癡狂先生は、甥を送り出して、新たに二人の紳士を案内した。二人は風采の揚つた、見ても氣持のいゝ紳士で、今や帽を脱いでスクルーシの事務所内に立つて居る。彼等は書物と書類を手にして

スクルーシに黙禮した。

「スクルーシ、マアレエ商會ですれこちらは、『名簿を見ながら一人の紳士が言つた。』貴君はスクルーシさんですか、それともマアレエさんで？」

「マアレエが死んでから七年になります、スクルーシは答へた。『あれは七年前の、今晚死にましたので。』」

「ではあの方の寛裕な御精神は、後へお残りになつたお方によつて充分代表されて居るものと信じ、疑ひません、紳士は證明書を示して言つた。

それはまことに代表されて居た、ご申すもスクルーシとマアレエは似たり寄つたりの人間であつたので、『寛裕な精神』といふ不吉な言葉を聽いて忽ち蟹め面をして、頭を振つて、證明書を突戻した。

「一年中でのこのお祭の時節にですれ。スクルーシさん、紳士はペンを取上げて言つた、『常よりも一層その、貧民や孤兒に何か一寸救恤を施してやりたいと思ひますのですよ、あの連中は目下大いに苦んで居るのですから。衣食に差支へるものだけでも數千。慰安を得ない者に至つては數十萬ですから。』」

「牢屋はありませんかね？」スクルーシは訊れた。

「牢屋は澤山あります、再びペンを置いて紳士は答へた。

「それから共同養育院は？」スクルーシは訊いた。『まだやつて居ますかな？』

「やつて居りますよ。けれども」紳士は答へた、『あんなものは無くなつてしまへばいゝのですが。』

「では懲役や貧民法などは今日なほ勵行されてますかい？」

「いづれも盛んに行はれてますよ、はあ。」

「おゝ！貴下の最初のお言葉で、これら有用なる運轉を何物か止めてしまつたぢないかと思ひましたれ」スクルーシは言つた。『それを聞いて大いに悦しいです。』

「ごころが、これらの機關は多數の人々に、心身の充分な慰藉を與ふるに足らんといふ考を持ちまして」紳士は答へた。『吾々數人の者がかく寄附金を募り、貧民に飲食物を頒ち、寒を凌ぐ方法を與へてやりたいといふのです。で、特にこの時節を選びましたのは、クリスマス節といふものが、他のいづれの時節より、貧窮が痛感せられ、富裕が喜ばしい時であるからです。就きましては貴下に於ては幾何程の御寄附を願はれませうか？』

「それは御無用！」スクルーシは答へた。

「匿名になさらうといふので？」

「仲間入したくないと申すのですよ、スクルーシは言つた。『わしの望むごころをお尋ねになるならねえ、わしはさう答へたまでちやて。わしはクリスマスだからさいつて別に浮かれも騒ぎもいたさぬ

のだから、怠け者共を浮かれ鼻がせするわけには参らぬのでね。わしは前に申し上げた設備を維持するために税を拂つて居るので——それだけで充分の金高だ、そこで貧困な奴共は其處へ行くがいでさあ。」

「行けない人が澤山あります、そんな處へ行くより死んだ方がいゝといふ者も澤山あります。」

「死んだ方がまださといふなら、」スクルーシは言つた、「死んだ方がいゝやれ、有餘る人口を減らすがいゝ。それに——お氣の毒だが——こんなことはわしの知つたことぢやないて。」

「然し御存知でもよさうなものですな」紳士は言ふ。

「いやそりやわしの仕事ぢやないでな、」スクルーシは答へて、「人さといふものは自分の職業が解ればそれで充分、他人の仕事にまで干渉するには及ばん。わしや自分の仕事で一切暇なしぢやよ。さようなら、方々！」

論點を追究しても無効だ、明瞭に解つたので、二人の紳士は出て行つてしまつた。スクルーシはわれながら見上げたものだ、鼻うごめかして仕事にかゝつた、そしていつにないおどけた氣分になつて居た。

かゝる程に霧が闇さはいよく深く濃くなつた。人々は燃えさかる松明を手にして駈け廻り、進んで馬車馬の前に立つてそれを案内するのであつた。教會堂の古塔は、いつもならそのゴシック式の窓

から苦蟲顔の老鐘がスクルーシを横目に見て居るのだが、今は全く影を潜め、分時を刻み告げる音も雲の中で、後まで頼み戦く様は、まるでかなたの高みなる凍つた頭で、齒がちくちく衝突ふやうだ。寒さは劇烈になつた。大通では、露路の角などに、瓦斯管を修理して居る職工等が居て、火鉢の中に熾んに火を起して居る、その周圍に襪襦を着けた大人や子供が集まつて居る、焔の前に手を焙つたり眼をしばつかせたりしていかにも愉快でたまらぬらしい。水道栓は孤獨の境に置いてきぼりにされて、溢れた水は直様凍り、厭人的な氷になつた。それに反して店々の輝かしさは、通る人の蒼い顔を、てら／＼と赤く見せた。店々にはひ／＼と葉や果が、窓のラムプの熱でばち／＼と裂けた。鳥屋も八百屋は陽氣な滑稽な商買になつた。すばらしい美觀で、取引さか賣買さかいふまだるつこい道がかゝる美觀さ何の關係があらうと怪まるゝばかりである。市長閣下に至つては、その大邸宅の岩にあつて五十人の料理番膳夫に下命して、市長の家政として耻かしからぬクリスマス祝賀を致すやう申し渡した。而して前週の月曜に酒を噉つて往來で喧嘩騒ぎをやらかしたゝめ市長から二圓五十錢の科料に處せられた小仕立屋すら、その裏店で明日の御茶うけの用意に忙がはしく、そのひねつこけた女房も赤坊は牛肉を買ひに駈け出した。

霧は而もいよく深く、寒さはますます烈しい！錐で揉むやうに、刃で切るやうに、牙で噛むやうな寒さ。若しセント、ダンスタン（鍛冶の護神）が、例のお馴染の武器を用ひる代りに、かゝる天候

の一觸を以て、悪魔の鼻を抓つたら、悪魔はげに劇しく泣き號んだことだらう。一人の鼻低い若い物乞が、骨が犬に噛まれるやうに飢ゑた寒さに噛まれ廻られながら、スクルーシの鍵穴に屈みかゝつてクリスマス・マスカロールの謡つて主人を歡ばせようとした。然るに次のやうな歌ひ出し――

「おめでたうよ、旦那様、

旦那に御難のかゝらぬやうに！」

さいふ聲を聴くま、スクルーシは力任せに簿記棒をひつ攫んだので、歌手はびつくりして飛んで逃げた、ために鍵穴から霧が舞ひ込む、もつと冷たい霜が吹き込むのだつた。

さうく事務所を鎖すべき時間が来た。厭々ながらスクルーシは椅子を離れ、槽の中に待ち構へた書記に無言のまゝ時間の来たことを知らせた。するま書記は即刻蠟燭を吹消して、帽子を被つた。

「明日は一日暇が欲しいと言ふんだらうな、おそらく？」スクルーシは言つた。

「御都合がよろしくば、へえ。」

「都合はよくないで、」スクルーシは言つた、「それに正當なことでもないで。もし俺がそのために一圓も差引いてやらうもんなら、おまへの方では酷いことされたと思ふだらうな、それや受合の事だ」書記はかすかににやりこした。

「それが而も、」スクルーシは言つた、「仕事をちつともせんのに一日の給料を拂つて、俺が酷いこと

されたことはおまへの方ちや思ふまいからな。」

書記はこれも一年にたゞの一日だからと言つた。

「なさない申譯だて、それが毎年十二月の廿五日に懷中を痛める元なのだ！」スクルーシは大きな外套の釦子を顧みて掛つて言つた、「しかし、おまへにしちや終日の暇が要るんだらう。明後日の朝はそれだけ早く此處へ来るのだぞ。」

書記は承知したま約束をした。そこでスクルーシはぐちぐち唸りながら出て行つた。瞬く間に事務所は閉められ、書記はその白の襟巻を腰の下までぶらつかせ（外套は生憎お持合せがないので御自慢できなかつた）、コーンヒルの坂を辿り下り、クリスマス前夜の祝ひ心から、子供等の列後に加つて二十度も滑つて見せ、やがて一目散にわが家を眼差してママデン、タウンへ走つた、目隠鬼ごっこやらうさいふのだ。

スクルーシはいつもの鬱々たる飲食店で鬱々たる晚餐を認め、あらゆる新聞を讀破して、なほ其夜の残餘を銀行の帳簿検閲に身を裏し、やがて家へ寢に歸つた。彼は嘗て死んだ同僚の持家だつた家に住んで居た。その家はいやに陰氣臭い部屋々々で、さある庭の上手に建つた低い建物の一部分である。場處柄としてあまり用事もなさうな様子、ひよつとすることこの長屋は若い時分に隠坊をして出口を忘れたまゝになつて居るのぢやないかと思ふだらう。今ははや随分の年寄で、随分さ氣味も悪い

さいふのもスクルーシの外はたゞ一人の住む人なく、他の部屋々々はすべて事務所に貸してあつた。庭はいかにも暗く、何處にどの石があるまで知つて居るスクルーシすらも、手まさぐりをしたい位であつた。霧や霜が家の暗い古支關のあたりを塞ぎつめて居るので、天候の精が敷居の上に物愁しい思案をして居りはせぬか怪しまれるのであつた。

さて、支關に戸槌のあることはちつとも不思議ぢやないのは事實だ、が彼の家のそれは滅茶に大きかつただけのこさだ。スクルーシが、今の場處に住んで來た間は、朝な夕なそれを見馴れて居たのも事實だ。それにスクルーシは倫敦市中の何人——思切つた言葉を使ふこ——社団法人、行政官、公民をも勘定に入れて、市中の何人にも劣らず迷信空想さいふこころのない男である。それからまたスクルーシはその日の午後七年前に死んだ同僚と最近の一言を發してからさいふものマアレエのこさは一切忘れて少しも思ひ出しはしなかつたこさを記憶して頂きたい。こころがどうしたこさか、スクルーシが戸の錠に鍵を挿し込むこ、戸槌に、變化の媒介となるやうなものに——戸槌にあらざるマアレエの顔を見たさいふのこ、さ、この説明のできる人があればやつて見給へ。

マアレエの顔。それは庭前の他の物體のやうに暗い影ではなくて、暗い臺所の腐つた海蝦のやうに陰氣な光を放つて居る。怒つたのでもなく毒付いてるのでもなく、たゞ例のマアレエそのまゝにスクルーシを見て居る。氣味悪い額に氣味悪い眼鏡が反りかへつて。髪の毛はあやしげに搔亂れて、呼氣か

熱氣を受けたやう、眼は大きく睜つて居ながら、而もまるで動かない、その不動の眼の玉に加ふるにどんよりした顔の色が、顔を氣味悪く見せる、然しその氣味悪さは顔に別して關係がないやうで顔自らどう處分能るのでもないらしく、顔自身の表情の一部分をなすとも思はれない。

スクルーシが、この怪覽をきつこばかり睜めたこころが、それはまた元の戸槌こなつてしまつた。彼がびくさもしなかつたこさか、幼少より恐怖を知らなかつたけに彼の血は恐ろしい感激に動かされなかつたこさか言ふのは、眞しからぬこさであらう。が然し彼は一旦放した鍵に再び手をかけて、しつかりさそれを廻し、家の中へ進み入つて、蠟燭を灯した。

彼は戸を閉める前に、流石に一寸躊躇して、手を引いた、そして彼は先づ戸の背を氣をつけて覗いた、宛もマアレエの辨髪がそつこ支關に姿を見せて驚かしはせぬか半ば期待するものゝやうであつた。然し戸のうしろには何もなかつた、たゞ戸槌を留めておく螺釘と牝螺旋があるばかり、そこで彼は「ブツ、ばからしい！」と言つて、どしんこ戸を閉めた。

その音は雷のやうに家中に響き亘つた。あらゆる二階の室々、下なる酒屋の穴倉のあらゆる櫓が、それ／＼獨特の反響を立てるやうに思はれた。スクルーシは然し反響に驚かされるやうな男ぢやない。彼は戸を鎖して、廣間を横切り、二階へ登つた、而ものそり／＼と、歩きながら蠟燭の心を取つて。六頭立の馬車が上等の古い階段を上るこさか、議會の下等な若い法令をくゞるこさか、世間ではぼんや

り言つて居るが、この櫓子段に至つては、棺車を横倒しにして、横木を壁にもたせ、戸を欄干に向か
せて、その棺車を二階へ上げるこゝが出来るこゝだ、而も樂々こやれるこゝだ。その幅が充
分なばかりでなく、なほ餘分の隙がある、スクルーシが機關車付の棺車の中を彼の前に登つて行
つたのを見たと思つたのは多分これがためだらう。往來の六個の瓦斯燈でさへ支關口を充分照す力の
ないのに、スクルーシの燭一つではいかに暗いか察し得られるであらう。

スクルーシはそんなこゝにはお構ひなしにやつて行つた。闇は安價だ、従つてスクルーシは闇が好
きだ。然し、自分の部屋の重い戸を閉める前に、彼は室中を歩き廻つて、異状がないかどうかを檢べ
て見た。彼は顔を思ひ出して、かうしなくては氣が濟まない程であつたのだ。

居間、寢室、物置。何の異状もない。卓子の下にも誰も居ない、長椅子の下にも誰も居ない、爐に
はちよんびりの火、匙も皿も用意ができ、粥の小鍋が五徳にかけてある(スクルーシは風邪加減なので
ある)。寢臺の下に誰も居ない、押入にも誰も居ない、壁に怪しげな態して吊下つて居る彼の寢衣の下
にも誰も居ない。物置も例の如し。古い鐵遮器、古靴、二個の魚籠、三脚の手水臺、それから一本の
火箸があるばかり。

是で全く安心さばかり、スクルーシは戸を鎖して、錠を下した、平生にはせぬこゝなのに二重の錠
を下した。かくの如く不意打に備が成るこゝ、襟巻をこつた、寢衣を着てスリツパを穿き、頭巾を被つ

た、そして粥を食はうと爐の前に腰を下した。

それは極めて弱い火であつた。かゝる嚴寒の夜には何の役にも立たなかつた。彼は餘儀なくすつと火
に接近つて、其上に腹這になつた。するさ初めてかゝる一握の薪からも温かいといふ最小限の感覺を
引き出すこゝができた。この爐は大分古物で、その昔和蘭の商人が造つたもの、周圍には珍らしい瓦
が鋪詰めてあり、それには聖書を解説する圖案が刻んである。ケーンスマアベルス、フアラオの娘、
シエバの女皇、毛の床のやうな雲に乗つて天降る天使の群、アブラハム、ベルシヤザール、パタ皿み
たやうな船で海へ乗り出す使徒達、其他數百の人物が彼の思案を抽出さむばかりに並んで居る、ここ
ろが、七年前に死んだマアレエの顔は、老豫言者の杖の如く表はれ來つて忽ち他の姿をすつかり呑ん
でしまふのだ。すべくした瓦の各が最初何も描いてなくて、彼の思案の順序よい斷片からその面に
繪を描く力があつたなら、一枚々々の瓦には皆マアレエ爺の頭が寫されてしまふだらう。

「ベテン！」スクルーシは叫んだ、そして室をあちらこちらを歩いた。

五六度周つてから、彼はまた腰を下した。椅子に頭を凭せかけるこゝ、彼はふさ室に吊してある呼鈴
に眼を止めた、近來不用のベルで、何の爲か今は忘られて居るが、この建物の最上層の一室に連絡と
て居る。こゝろがこの呼鈴が、ぶらり／＼揺れ動き始めた。これを見たスクルーシは、大いに驚いたば
かりか、怪しい、説明の附かない恐怖に襲はれた。初めは殆ど音を立てぬまでにゆる／＼揺れた、

が間もなくやかましく鳴り出した。と同時に家中のベルさいふベルが一齊に鳴り始めた。

これが半分か一分も續いたらうか、がそれは一時間のやうに思はれた。鈴の音は、やがて鳴始めた時と同じやうに、一時にびたりと止んだ。が引續いてからんくさい音か、深い下の方で起つた。誰か、酒屋の穴倉で樽の上を、重い鎖でも引磨るやうだ。スクルーツは其時、化物屋敷で亡霊が鎖を引磨つたやうに書いてあるさいふ話を聞いたことを思ひ出した。

穴倉の戸はどしんさいふ音を立て、開いた、するさ彼は下の床の上にもつと遙かに大きい音を聞いた、するさ階子段を登る音、次に戸口に進み寄る音を聞いた。

「やつぱりベテンだー」スクルーツは言つた。「こんなこと眞にしてたまるものか。」

さはいふもの、彼の顔色はさつと變つた、其時、時を移さず、重い戸を通つて物音はやつて来た。やがて部屋へぬつと入つて彼の眼の前に立ち現はれた。入つて来たと思ふと同時に消えかゝつた燭の焰がぼつと燃え立つて、宛も「俺はおまへを知つて居るーマアレエの亡霊だー」と言はんばかりに見えたが、またつと消えかゝつた。

同じ顔、まるで同じ顔。辮髪にしたマアレエ、例の通りの胴着、細洋袴、長靴、長靴の總は辮髪のやうに逆立ち、上衣の裾も、頭上の髪毛も同様逆立つて居る。彼が引磨つて居る鎖は腰のあたり縛り着けられて居る。大分長い鎖で、彼に擲まつて尻尾のやうになつて居る、而してそれは（スク

ルーツは近くしか見たのだが）錢箱、鍵、錠前、元帳、證券、鋼鐵細工の重い財布から成るものだが彼の體は透明、それ故スクルーツが、彼を凝視めて胸着を見透かすさ、上衣の背にある二つの釦子を見るこゝろができた。

スクルーツはマアレエが腸無し（無慈悲）ださよく聞いたが、今こなつて初めて其を信じるに至つた。いや、今こても信じ切つたのではない。彼は亡霊を透しては見透しては見、而も眼の前を亡霊が去らぬのであつたけれども、亡霊の死の如く冷たい眼にぞつとする氣味悪さを感じないではなかつたけれども、また前にはその肩掛に氣が付かなかつたが、今その襟巻が折たまゝ頭と頤とに巻付けられてその縞目までも見えるのだつたけれども、彼はなほ半信半疑で、自分の感覺と争つた。

「おいどうしたつてんだいー」スクルーツは例の如く皮肉に冷淡に言つた。「俺に何用があるんだ？」

「うんさあるー」——マアレエの聲、それには疑ひはない。

「お前は誰だ？」

「誰だつたかき聽け。」

「ちや誰だつた？」スクルーツは聲を張上げて言つた。「幽霊のくせに」七面倒だ。彼は

「些細までも」と言はうとしたが上のやうに變へて見た、一層妥當だと思つたので。

「生きてた時にはおまへの同僚のシヤコフ、マアレエだ。」

「おまへ——おまへは椅子にかけられるかい？」出来さうもないさいふやうに彼を見ながら訊れた。「できるよ。」

「ちや、掛ける。」

スクルーシがかゝる質問を發したわけは、かくも透明な幽霊が椅子にかけるといふやうな事ができるかどうかを疑ひ、若しもできないといふ場合には、必ずや説明にまごつくだらう 思つたからだ。ところが亡霊は生前やつた通りに、爐の向側に腰を据ゑた。

「おまへは俺を信じまいな、」亡霊は言つた。

「信じないれ、」スクルーシは言つた。

「おまへは俺の居ることを、おまへの感覚で知るより外に、何の證據があるのだい？」

「知らんれ。」

「何故おまへさんは自分の感覚を疑ふんだい？」

「それはな、」スクルーシは言つた。「ちよこした物が感覚に影響するからだ、胃の附が少しばか具合が悪くても、五感を迷はすこともある。おまへは消化れない牛肉か、芥の一塊か、乾酪の小片か、半煮の馬鈴薯の断片かも知れんて。何れにしても、おまへは墓の匂よりも肉汁の匂がするよ？」

スクルーシは戯言を言ふやうなことは滅多にない男で、其時さしても決しておどけた氣分を心に抱

いて居たのではなかつた。實を言ふと、痛快なこどもも言つて、自分の注意を他に向け、その恐怖の念を抑へやうとしたのである、といふも。亡霊の聲が骨の髄までも擾き亂したので。

だいの一秒でも、黙つてかの据つた光る眼の玉を見ながら座つて居ることは、彼を實際惱まし苦しめるに違ひない、さスクルーシは思つた。それにまた幽霊には、その身に獨特の地獄の風を持つてゐる見え、何ともわからぬ怖しいものが潜んで居る。スクルーシは自らそれを感じる事はできなかつたが明をにそれは事實であつた。といふのは、亡霊がまるで動かすに居たにも拘らず、その髪、その裾その總は、竈から来る熱風を受けるかのやうに尙も吹き立てられて居る。

「おまへにこの小楊子が見えるかね？」スクルーシは前に申したやうな理由から、直ちに幽霊攻撃に戻つて、かう言つた、よし一秒間であらうとも、その石のやうな亡霊の視線を彼自身から他方へ轉じさせやうと思つて。

「見えるさ」幽霊は答へた。

「小揚子を見て居ないぢやないか。」スクルーシは言つた。

「けれども見えるよ、」亡霊は言ふ、「見てなくなつて。」

「ふん！」スクルーシは答へた。「俺はこれを嚇んでしまふばかりだ。してこれから生涯、自ら捕へた妖魔共に苦しめられたつて平氣だ。メテン、ほんまに、メテン奴！」

するに幽霊は怖い叫聲を揚げ、その鎖を揺振つて陰気な物凄いな音を立てたので、スクルーシはぎつしり椅子に噛り付いて、氣絶して倒れるのを防いだ。けれども、驚愕は更に更に激しくなつた。さいふのは幽霊が、室内で暖か過ぎる言はんばかりに、頭に巻いた鉢巻をはずす、下顎がぐりさばかりに胸に落ちたのだ!

スクルーシは跪いて、顔の真前に手を合せた。

「おなさけ!」彼は言つた。「おつそろしい幽霊、おまへは何故俺を困らせるのだ?」

「金に眼のない俗人奴!」亡霊は答へた。「俺を信じるか信じないか?」

「信じるよ、スクルーシは言つた。信じないわけにはいかん。さはいふものゝどうして幽霊がこの世を横行したり、俺のここへ来たりするんだ?」

「その理由は、亡霊は答へて、「一體人間の魂つてもものは、浮世の人々の間に立ち混つて、遠く歩く歩き廻るさいふのが、誰にしても必要なことなのだ。ところが、若し生きてる中に、其魂があまり出歩かないとする、死んでから罰さして出掛けて歩かされるんだ。俺も世界をさすらふ運命を背負つたのだ——あゝ、情ないことだ——そして今となつては享けることのできないことを見物しなくちやならぬ運命なのだ。浮世でなら享けられたらうに、幸福にもなれたのだつたらうになあ!」

また亡霊は叫聲をあげた、そしてその鎖を揺振り、その影のやうな手を握り緊めた。

「おまへは鎖をかけられて居るな、スクルーシは顫ひながら言つた。「どうした理由なんだい?」

「俺は生前自分で作つた鎖を着けてるのだ」亡霊は答へた。「俺は一輪一輪尺一尺をそれを作り上げた。俺は自分の自由意志からそれを身に巻き、自分の自由意志からそれを身に着けたのだ。その型がおまへに目新しいんぢやあるまいな!」

スクルーシはいよゝわなくと慄へ出した。

「それもおまへさんは」幽霊はなほ言葉を續けて、「おまへ自身が着けて居るさぐる巻の重さ長ささを知りたいさいふんか?それは七年前のクリスマス前夜に已に俺のと同じ重さ長さのものだ。それ以来おまへは殖やして来たのだ。重たい鎖だよ!」

スクルーシは、五六十尋もある鐵鎖で巻かれて居るのぢやないか床の上を見廻はした、が何も見えなかつた。

「ジャコブ!」彼は物憐れな風して言つた。「お馴染のジャコブ、マアレエ、もつと話してくれ、安心するやうなことを言つてくれジャコブ!」

「そんなことは俺の柄ぢやないで、幽霊は答へた。「安心なんてもんは、何處か他所から来るものだエ、ネザア、スクルーシ、そして他の種類の代理人から他の種類の人間に渡されるものだよ。それに話さうと思つてることをみんな話することは俺には出来ない相談だ。俺の言つてもよいのはも少しだ

「けだよ。俺は何處にも恐むことができん、何處にも停ることができん、何處にもぶらくして居ることできないのだ。俺の魂は自分の事務所以外には歩いた例がないんだて——い、かい、——生前にや金銭取引所以外に俺の魂は出歩いたことがないんだ、そこでこれから先には物憂い長旅がつらくこななんだぜ。」

スグルーシは、平生の癖で、思案に暮れる時は何時でも、洋袴の衣囊に両手を突込むのだ。幽霊の言ふところの意味を考へながら、彼は例の通り手を挿込んだが、眼も上げなければ、膝も動かさない。「おまへさんは甚だ以て徐々にお歩きでしたらうな、」ジャコブ、スグルーシは事務的な句調で言つたが、謙遜と敬服の調子があつた。

「遅かつたかな！」幽霊は繰返した。

「七年前に死んで、」スグルーシは考へ込んだ。「そしてしよつちゆう歩き通じたさいふんかね？」

「しよつちゆう、」幽霊は言つた。「休息もなく、平和もない。後悔の不斷の懊惱ばかり」

「迅速く旅するさいふのかい？」

「風の翼に乗つて、」幽霊は答へた。

「するさ七年前にはえらい道程を歩いたらうれえ、」スグルーシは言つた。

幽霊は、これを聴くさ、また叫聲を立て、死の如き夜の沈黙を破つて怖ろしい程鎖を揺り動かした。

た、その音さいつたら夜番の巡査が安眠妨害として告發してもいゝ程であつた。

「あゝ！ 俘奴、縛られて、また二重の鎖に繋がれた俘奴、」亡霊は叫んだ、「不朽の人物が致して止まぬ絶えざる努力奮闘の幾百歳を知らないさは、それさいふも、その努力の結果が眼に見えるまで發展しない前に、この地球は永久に移らなければならぬのだ！ 基督教的な精神が、それが何であらうさ、それ自身の小範圍に於て親切に働いて、なほその有用の廣大な手段にまつては、人間の命があまりにも短かいものださいふを知らないさは！ またいかに悔いても、嘆いても生涯の非行を償ふことができぬさいふも知らないさは！ 而もかく申す俺がその一人だつたのだ！ あゝ、俺もやつぱりその一人だつたのだ！」

「然しおまへいつもいゝ商人だつたよ、ジャコブ、」スグルーシは口籠りながら言つた、今彼はこの言葉をひそかに自分に當嵌めんとしたのである。

「商だつて！」幽霊はまたも手を揉み合せて叫んだ。「人情が俺の商賣だつた。公益が俺の商賣だつた、慈善、慈悲、堪忍、博愛、これらがみんな俺の商賣だつた。俺の商法上の取引なんてものは俺の職務の大海中の水一滴に過ぎなかつた！」

亡霊は腕の伸びる限りに鎖を差上げて、それがまるで、今更悔いて甲斐ない苦惱の原因であつたと言はぬばかりにしたが、今度はそれを小つびどく地上へ投げ下した。

「轉々として移り行く歳の中で、このクリスマスの時節は、亡霊は言った、「俺は最も苦しむんだ。何故俺は同胞の群の中を、眼を俯向けて歩いて、昔賢人を導いて一貧家に至らしめたかの星に眼を見上げなかつたらう？その光がこの俺を導いて行く貧家はなかつたのか？」

かゝる調子で幽霊が饒舌り立てるのを聴き、スクルーツは狼狽一方ならず、がたくと顫ひ始めた。「やい聴け！」幽霊は叫んだ。「俺はもう長く停まるわけにいかんのだぞ。」

「聴きますとも、」スクルーツは言った。「然しさうがみくでなしにお願いするよ！べらくべらつとやりまくらないでれ、ジャコブア後生だから！」

「抑も俺がどうしてかくおまへに見えるやうな姿になつて現はれたかといふことは、述べる限りぢやない。これまでとても俺は長い事姿を見せずにおまへの側に座つて居たのだぞ。」

これはあんまり結構な話ぢやなかつた。スクルーツはふるつこなつて額の汗を掻き拭うた。

「かく座つて居たといふことも俺の受けた天罰の軽い部ぢやないのだ、」幽霊は言葉をつづけた。「俺が今夜こゝへやつて来たのは外でもない、おまへはまだ俺のやうな運命に陥らずに濟む機会も希望もあるといふことを注告しに来たのだ。俺の力で得られる機会も希望だ、エブネザア。」

「いつも御親切様で、」スクルーツは言った。「ありがたう！」

「おまへはれ、」亡霊はまた口を開いた。「三人の幽霊につかれるだらうよ。」

スクルーツの顔色は幽霊のそれにも劣らず蒼褪めてしまつた。

「それがおまへの言つた機会も希望なんか、ジャコブア？」彼は口籠りながら訊れた。

「さうだ。」

「俺は——俺はそんなこと御免だがれえ、」スクルーツは言った。

「幽霊が訪れて来なくちや、」亡霊は言つた。「おまへは俺の踏で来た路を避けるわけにいかんのだ。明日の鐘が一時を告げたら第一のがやつて来ると思へ。」

「みんな一時に來てもらつて、おしまひにするこゝはできまいかれえ、ジャコブア？」スクルーツはほのめかした。

「次の夜の同時刻に第二の幽霊が来ると思へ、第三の幽霊はその次の夜十二時の最後の鐘が、鳴り止むと同時に來るぞ。よつく俺の顔を見ておけ、おまへ自身のために、われく兩人の間に交された言葉をよく覚えておけ！」

これらの言葉を言ひ終るこゝ、亡霊は机の上から襟巻を取上げて、前のやうに頭に巻き着けた。スクルーツは兩顎が巻布で締められた時に齒が小氣味のいゝ音を立てたのでそれを知つたのだ。彼が思ひ切つて眼を揚げるこゝ、この不可思議な訪客はその鎖を腕のまはりに巻きつけたなり、すつくさばかり前に立向つて居るのであつた。

幽霊は後すざりを始めた。そして一步毎に、窓はひそりで少しづつ上り、遂に、幽霊が其處まで上り切る。窓はすつかり開いて居た。幽霊はスクルーシに近寄せささし招いた。彼は言はるゝまゝにした。互の隔離二歩さなるを、マアレエの亡霊は手を差上げて、それ以上近寄るなを注意した。スクルーシは立ち止つた。

幽霊の命令に服従したさいふよりは、驚愕と恐怖に襲はれたのだ、さいふのは、幽霊が手を舉げる。同時に、空中にがやくゝさいる物音がすると思つたのである。悲嘆と悔恨の、さんちんかんの物音、何とも言へず悲しい口惜しい哀泣。幽霊は、しばし耳傾けて居たが、物悲しい挽歌に合唱し、やがて荒涼暗憺たる夜へ流れ出て行つた。

スクルーシは窓まで後を追うた。不可思議に打たれて向不見になつて、彼は首を突き出して眺めた。空中には幽霊がうちやくゝ現はれた。そゝかしく其方へ飛び此方へ走り、歩きながら悲しさうに泣いて。どれもこれもマアレエの亡霊のやうに鎖を着けて居る。ある者は數人(犯罪政府閣員かも知れない)一しよに繋がれて居る。自由なものなど一人もない。その中の多數は生前スクルーシと知己の間柄であつた。中にも白の胴着を着けて踵に巨大なる鐵の金庫を着けた老亡霊と彼は別懇の仲であつた。彼は下なる戸口の階段に嬰兒を抱いて居る哀れな女を助けやうとして能はず、見るもあはれに泣き號んで居るのだつた。これら幽霊全體の悲惨さいふのは、明かに浮世の事件で、その益になるやう

に、力を假さうと求めながら、永久にその力を失つて居るこゝであつた。

これらの幽霊が霧の中に消えたのやら、霧が彼等を裏んだのやら、彼にはわからなかつた。が彼等の姿も魂の聲も一時に消え失せた。そして夜は家路を辿つた時と同じやうな景色を呈した。

スクルーシは窓を閉めて、幽霊の入つた戸を檢べて見た。それは自分の手で錠を下した通りに二重に鎖まつて居る。そして門も何ともならず居る。彼は「ペテンめ！」と言はうとしたが、ペテンまで言つて止してしまつた。それから、負はされた感情の重みからか、其日の疲勞からか、あの世の景を見たいめか、亡霊の物愛い對話のためか、それとも夜が更けたせい、非常に睡氣を催したので、彼は直ちに衣服も換へずに寢に就き、忽ち熟睡つてしまつた。

二 幽靈の第一

スクリーンがふと眼を覺ますと、あたりは眞暗で、床から覗いて見ても、透明な窓と室の不透明な壁を見分けることができない程であつた。彼は鮫のやうな眼を以てしきりに闇を探らうと努めた。その時近傍の教會堂の鐘が十五分を四つ鳴した。そこで彼は何時か時間を數へやうと耳を澄ました。大いに驚いたことには、重たい鐘は六つから七つへ、七つから八つへと鳴り進んで、遂々きつちり十二時まで鳴つた。そして止んだ。十二時！ 彼が寢に就いたのは二時だつた。時計が狂つてゐるのだ、氷垂が器械の中へ出來たのに違ひない。十二時つてここが！

彼はこの不届千萬な大時計の過を訂してやらうと、自分の時計置きに手を觸れた。そこ、その迅速い小鼓動も十二時を打つて止まつた。

「なーに、そんなことがあるもんか、」スクリーンは言つた、「一日眠り通して次の夜が更けるまで眠るさいふことがあるもんか。さいつても太陽に何か故障が起つて、今が夜の十二時ださいふこともあるまいて！」

考へて見るに奇怪なことなので、彼はあたふた寢床から爬ひ出し、手さぐりで窓まで行つた。窓は一面の霜なので、寢衣の袖でそれを磨り落すまでは何も見えなかつた。落して見ても見えるのはほん

の僅かであつた。たゞわかるのは、霧なほ深く寒さは鋭く、あちこち動き廻つて大騒ぎに騒ぎ立てる人々の音もないさうなだけであつた。夜がかくも輝かしい晝をやつつけて、世界を占領してしまはなかつたなら、さぞ往來の物音が喧ましいことであつたらうに。これは大安心の種であつた、さういふのは、若し數ふべき日さういふものがなかつたならば、「この爲替手形一覽の後三日以内に、エブネザア、スクルーシ氏又は其代理人に拂渡さるべし、」などいふ證文は當にならぬ保證となつてしまふだらう。スクルーシは再び床に入つた。そしておつかへしひつかへし繰返して考へ考へ抜いて見たが、どうにも分別がまるで付ない、考へれば考へる程頭がめちやになり、考へまいとすればする程彼は考へた。マアレエの亡靈が彼を悩ますこと夥しい。充分考案した上で、あれはまるで夢だつたさ心の中心に決めて見るが、其度毎に強い彈機が脱れるやうに、彼の頭は最初の位置に戻り、「夢だつたかしらそれとも夢ではなかつたかしら？」さういふ同一問題をよく考へ直すやうに呈出して來るのである。スクルーシはかゝる状態で、更に四十五分間時計が進むまで横はつて居た。さその時唐突にも、一時の鐘が鳴れば幽靈が來るさういふ幽靈の注告して行つた言葉を思ひ出した。彼はその時間が過ぎるまで横になつたまゝ眼を覺まして居やうと決心した。彼は天へでも昇るよりはや眠ることができぬのだと考へて見るさおそらくこれが最も賢い決心なのであらう。

十五分間は實に長々しく、彼は一再ならず、無意識に假睡をして、時計を聽落したに違ひないと思つた程であつた。途々鐘の音は彼の聽耳立てた耳朶に明かになつた。

「ジャン、ドン！」

「十五分過ぎだ、スクルーシは數へながら言つた。

「ジャン、ドン！」

「あれが半さ、スクルーシは言つた。

「ジャン、ドン！」

「十五分前だ、スクルーシは言つた。

「ジャン、ドン！」

「さあ一時だぞ、スクルーシは急き立つて言つた、「たしかにさうだ！」

スクルーシは時間鐘が鳴ぬ中に饒舌つた。今その鐘は深く沈んだ物憂い陰氣に悲しい「一個」の響を鳴らした。光が忽ち室の中に輝いて、寢臺の幕が引退けられた。

彼の床の幕が引き寄せられたのだ、いゝか、而も誰かの手で。脚の方の幕でもない、背にした方の幕でもない、彼の顔を向けて居る方の幕なのだ。彼の床の幕が引き退けられた、そしてスクルーシは、半ば凭れかゝつたやうな姿の勢に跳れ起きるさ、幕を引張つたこの世ならぬ珍客の顔を突き合わせることになつた。それは宛も私が今諸君に接近し、精神に於ては諸君の臆近く私が立つてるやうな

ものであつた。

それは不思議な姿であつた——小兒のやうな、さいつても不可思議な一種の妖氣を通じて見る小兒さいふより老人らしい、その妖氣は幽霊を見界から退いたやうな姿にし、小兒程の體格好に縮めて見せるのだ。その髪毛は首のあたりから背までも垂れて居るが、年老いたらしく眞白だ、而も顔は一つの皺もなく、肌膚にはいかにも柔かさうな櫻色の艶がある。腕は極めて長く筋肉違ましく、手も同様に異常の握力を有つかのやう。脚や足は、ごく纖弱な出来であるが、手や腕と同様裸出になつて居る。身には純白の法衣を纏うて居る。そして腰のまはりにはびかくする帯をしめ、その輝が麗しい。手には鮮かに緑なるひらぎの一枝を持つて居る、そしてひらぎさいふ冬の徴に妙な矛盾であるが、その衣服は夏の花で飾り立てゝある。然し一番に不思議でたまらぬものは、頭のでつべんから進る煌々たる明光で、そのお蔭で以上の様子がすべて見えるのである。さころでそれは疑ひもなく光を使用する場合のここ、もつと暇の時には帽子代りに消火器を用ひるのだ、今はそれを腕にかゝへて居る。

然しながら、これすらも、スクルーツがいよくひたさ眼を据ゑて見ると、一番不思議な性質のものではなかつた。さいふのは、その帯が彼方がきらり、此方がきらりと閃き輝き、今明るかつたさころは忽ちにして暗くなるさいふ具合、従つて體軀自身も、その明瞭形體に動搖變動があつた。或は一本腕のものさなり、或は一本脚さなり、或は二本脚のものさなり、或は頭のない二脚さなり、或は體のない頭ばかりさなる、各部分が消え行くさ、それが溶け込む濃い闇の中に輪廓がすつかり見えなくなる、するさこんなえらい不可思議の最中に姿はまた元の通りになる。依然として分明に明白に。

「貴殿が、前以て私へお先觸れのあつた幽霊ですか？」スクルーツは訊ねた。

「その通り！」

聲はやさしくしづかである。妙に低い聲で、傍近くに居るのでなく、遠いところに居るのではないかと思はれる位だ。

「あなたは誰方、そして御身分は？」スクルーツは訊ねた。

「わしは過去のクリスマスの幽霊ぢや。」

「遠いむかしで？」

「いや。おまへのむかし。」

おそらくは、スクルーツ自身も、何故だか誰かに訊られたことで、誰にも説明がでなかつたらう。彼は幽霊が例の帽子を被つた様が不思議な程に見たかつたのである。そこで彼は被つて見せてくれと頼んだ。

「何を言ふ！」幽霊は叫んだ。「おまへはわしが呉れた光を、穢れた手で、かくも早く消さうとするのか？ おまへはその煩腦を以てこの帽子を作り、今まで長い歲月の間、無理遣りにこれを眼深に被らせておいた手合の一人となるだけでは足らんかいふのか！」

スクルーシは畏こまつて、悪意があつてしたのではないことを申述べ、これまでの生涯にも意地悪く幽霊に「帽被り」をさせた記憶はないと述べ立てた。そこで彼は思ひ切つて、何用あつて此處へはおいでか訊いて見た。

「おまへの平安を思つてのこそ！」と幽霊は答へた。

スクルーシはどうも恐れ入りましたと禮を述べた。が心では平安のためなら一夜をぐつすり休んだ方がまだと思はないでは居られなかつた。幽霊は彼の心の中を讀んだものらしく、直ちに言つた。「それから、おまへの改心を思つてのこそだ。氣を付けろ！」

亡霊はかく言ひながら、その強い手を伸ばして、靜かにスクルーシの腕を掴んだ。

「立て！そしてわしと一しよに歩け！」

天氣が悪い時刻が遅いから散歩の目的には適はないと訴へて見ても、それはスクルーシにとつては無駄骨に過ぎないだらう、寢床は温かだ。寒暖計は氷點以下遙かに下つて居るを告げてても無効だらう、上草履と寢衣が一枚、それに頭巾といふ薄着をして居るをいつても甲斐はあるまい、風邪を

引いて居るを申譯して見ても無駄であつたらう。幽霊の擱り方は女の手のやうにしづかであつたけれども、反抗することは思ひも寄らないことである、彼は立上つた、が、幽霊が窓の方へ歩み行くのを見るに、歎願するやうにその着物に縋り附いた。

「わたしはたゞの人間ですから、スクルーシは抗議を申込んだ、墜ちさうでいけませんでね。」

「そこへわしの手を觸らしておけ、幽霊は手をスクルーシの胸に當て、言つた、「これでおまへは、これよりもつと高まるこゝが出来るのだ！」

言葉終るや、ふたりは壁を抜け通つて、廣々とした田舎路に立つた。左右には田畑がある。都は全く消えてしまつた。その痕方も見えない。と同時に闇と霧とも掻消え、満目銀世界のからりと晴れた寒い冬の日となつた。

「おやおや！」スクルーシはあたりを見廻すに、兩手を握り合せて言つた、「わたしは此處で育つたのだ。わたしやこゝで子供の時代を暮したのだ！」

幽霊は彼をやさしく凝視めた。そのやさしい手觸は、軽くそしてほんの瞬間であつたけれども、なほ老人の感情に残るやうに思はれた。彼は空中に種々の色彩が漂ふのを感じた。その各々の色は長い長い間、忘られて居た種々雑多の考や望みや樂しみや愁しみと結び付くのだつた。

「おまへの唇は慄へてるな、亡霊は言つた。」それにおまへの頬の上にあるものは何ぢや？」

スクルーシは常になく聲をふるへつかへさせながら、これは吹出物だこ口籠つた。そして亡靈にその好むところへ何處へなり連れて行つてくれと言つた。

「おまへはこの路を覚えてゐるか？」幽霊は訊れた。

「憶えて！」スクルーシは熱心に叫んだ、「眼を隠しても歩けませぬ。」

「それ程なのにこの幾十年を忘れて居るさいふのはおかしいではないか！」幽霊は言つた。「さあ先へ行かう。」

ふたりは路をやつて行く、スクルーシはあらゆる門、あらゆる柱、あらゆる樹を思ひ出して居た。さうく遙か彼方に小さい町が見えた。その橋、その教會堂、その紆り流れる川。數頭の彪毛の小馬が子供を乗せてやつて来る、その子供等は農夫達の逐うて居る馬車や荷車に乗つて居る他の子供等を呼んで居る。子供達はみんな大元氣で互に呼び交はして居たが、廣い野原はやがて愉快な樂の音に充ちわたり、新鮮な空氣はそれを聽いて笑ひさいめくのであつた。

「こりや皆往時ありしまゝの面影に過ぎんのぢや、」幽霊は言つた。「先方ぢやわれくのことはまるで氣がつかぬのぢや。」

嬉々たる子供等がやつて来た。近寄るのを見るに、スクルーシはどれもこれも誠らぬ顔はなく、名前をも言ふことができた。何故にスクルーシは子供達を見て有頂天になつたか？彼等が通つた時何

故に彼の冷酷な眼は輝き、その情は躍つたのであるか？子供等が四つ角や横丁で別れて各自の家に歸る時、お互にクリスマスお芽出たうと言ひ合ふのを聽いて、何故に彼は歡びに充たされたか？めでたいクリスマスがスクルーシにさつて何だ？おめでたいクリスマスなんか七里けつばい！一體そんなものが彼に何の利益になつたか？

「學校はまだすつかり虚にはなつてをらん、」幽霊は言つた、「朋輩から仲間外にされて居る獨りぼつちの子供が一人まだ其處に残つて居るのぢや。」

スクルーシはそれを知つて居る言つた。そして彼はすゝり泣いた。

ふたりは大通を離れて、見覚えある小徑へ入つた。するまもなく鈍色の赤煉瓦の邸に近づいた。風信機の附いた圓頂閣が屋根の上にあつて、その中に鐘が下つて居る。大きな家であるが、零落の片割である、廣い部屋などは殆ど使はれず、壁は濕つて苔が蒸し、窓は破れ門は朽ちて居る。廐の中をば雞がこゝこ鳴きながら濶歩する、馬車小舎や其他の小舎は草が蓬々茂つて居る。内部に至つては、これまたその往昔の面影をさめめず、寂莫たる大廣間に入つて、數多の開放された室々を見徹す、それらは裝飾も貧弱に、寒くだゝつびるいばかりである。空中には土臭い匂が漂ひ、そこらあたりには薄ら寒い空乏が感ぜられる、同時にそれから聯關して、蠟燭の光を頼りに夜更しをするこみや食物が存分でないことを思はしめる。

幽霊ミスクルーシは、大廣間を横切つて、家の背後なる戸口へ行つた。戸は前に開いて、長いがらんとした陰氣な室を見せた。飾のない樅の腰掛や机の列でいよくがらんとして見える。これらの机の一つに獨りぼつちの子供が弱い火を傍にして讀書して居た。スクルーシは腰掛の一つに掛けて、忘れて居た往昔の己が姿を見て泣くのであつた。

家の中の潜み隠れた物音も、天井裏の二十日鼠の鳴く聲や喧嘩する音も、陰鬱な裏庭の半ば溶けた箕の水の雫も、うら枯れた白楊の葉のない枝の風に嘆く音も、空虚の藏の戸の用もない揺れ動きも、火のばちりこ跳れる音も、一としてスクルーシの胸にやさしい力を及ぼさないものはない、彼の涙に自由な道をつけないものはない。

やがて幽霊は彼の腕に觸つた。そして讀書に耽つて居る往時の彼の姿を指した。突然外國風の衣服をつけた男が、見るからに眞に逼つて明白に、窓の外に立ち現はれた。帯には斧をさし薪を積んだ騾馬の手綱を把つて居る。

「おや、アリ・ババだ！」ミスクルーシは有頂天になつて叫んだ。「なつかしい人のいゝアリ・ババ爺さんだ！さうだ、さうだ俺は知つて居る！あるクリスマスの時節だつた、あすこに居る獨りぼつちの子供が、たつたひさりで此處に置き去りにされた時、あの男は、初めて、あの様にしてやつて來んだ。かわいさうな子供さ！それからヴレンタイン、」スクルーシは言つた、「それからあのあらくれの弟オルス

ン、あれあすこを通る！それからあれの名は何といつたつて、ゲマスカスの門のところで、眠つたまゝ、洋袴に押込まれた男は、おまへさんには見えませんか！それからサルタンの別當で、妖魔のために、眞逆様に投げられた男、あすこに逆立しておやがるよ！當前さ。わたしやあれを見るさうれしいね。あいつが王女と結婚するんだなんて、何たる阿呆らしい事だ！」

スクルーシが彼が性質のあらん限の熱誠を、かゝる事柄に費やし、笑もつかず泣くもつかぬいごも素敵な聲を出して居るのを聴き、上氣で興奮して居る彼の顔を見たならば、都の商買仲間には實にもどんなに驚くことであらう。

「あれに鸚鵡が居るな、」スクルーシは叫んだ。「緑の體に黄いろの尾、頭のとつべんからは菜のやうなものが生えて、奴あすこに居るぞ！あはれロビン、クルーソオ、彼が鳥を帆走まはして歸宅するぞ、奴はかう呼ぶのだ。あはれロビン、クルーソオ、おまへは何處に、ロビン、クルーソオ？」クルーソオは夢を見て居ると思つたがさうではなかつた。鸚鵡だつたよ、ねえ。あすこにはフライデイが、生命からがら小さい入江に飛んで行く！おーい！ほう！おーい！」

するこ、彼の平常の性質に甚だ縁遠い心持へ急速に轉移して、彼は往時の己が身が可哀相になり、「あはれな子供！」と再び叫んだ。

「出來るこそなら、」スクルーシは衣囊に片手を突込み、袖で涙を拭つてからあたりを見廻して、訥

りながら言つた。「けれどももう遅過ぎる。」

「どうしたさいふのちや？」幽霊は訊れた。

「何でもありません。」スクルーツは言つた。「何でもありませんよ。昨夜わしの門口で基督降誕祭歡歌を謡つてた子供があまりましてね。わたしや今考へて見りや何か呉れてやればよかつたんですよ。それだけのことで。」

幽霊は思ありげににりこして手を振つた、手を振りながら言つた。「こんどはも一つ別なクリスマスを見やうわい！」

スクルーツの往時の姿はこの言葉終るや否や一層大きくなり部屋は更に暗く更に穢くなつた。嵌板は凸凹になり、窓はがたつき、漆灰の破片が天井から落ち、その下の裏板がすらく見えるさいふ右様、然しいかにしてかゝる變動が起つたか、それは諸君にわからないやうに、またスクルーツにも不明であつた。彼はたゞ光景がまことに眞に逼つて居ることを知るのみである。すべては嘗て起つた通りなことを知るのみである、他の子供達はうれしい休暇に家へ歸つて行つた時、彼一人あまに居残つたことこのあつたのを知るのみである。

彼は今度は讀書しては居ない、がつかりしたやうに、室内を行きつ戻りつして居るのであつた。スクルーツは幽霊を見た、そして愁しさうに頸を振り、氣遣はしげに戸の方を見た。

戸は開いた、そして少年よりすつと幼ない一少女が駆け込んで、少年の頸に腕を巻き、「兄さん、兄さん！」と呼びかけて幾度も接吻した。

「あたしね、兄さんをお家へお連れしやうと思つてお迎ひに來たのよ、兄さん！」乙女は小さな手を打ち、屈んで笑ひこけながら言つた。「お迎ひによ、お迎ひ、お迎ひ！」

「お迎ひだつて、おまへ？」少年は應へた。

「さうよ！」少女は歡び溢れるばかりに。「さうくお迎ひに！いつまでもいつまでもお家に。お父さんは前よりすつと優しくなつたの。お家は天国みたいよ！あのいゝ晩に、やすまうさしてるさ、父さんは大さうやさしくあたしに言葉をおかけなさるの、だからあたし思ひ切つて兄さんをお連れしていかつても一べん訊いて見たのよ、さうするさ父さんはいゝさもつておつしやつてね、馬車にあたりを載せてお迎ひに寄越しなすつたのよ。そして兄さんは大人になるのよ！」少女は眼をぱつちり開いて言つた。「そしてこんな處へ二度さいらつしやらないのよ、けれど第一にあたし達はクリスマス中を一しよに暮して、世界中の一等面白いことをするのですわ。」

「おまへはまるで成人だねえ！」少年は叫んだ。

乙女は手を叩き合せて笑つた。そして少年の頭に觸らうとしたが、脊が低くて届かないので、また吹出し、今度は爪先で背伸して抱き付いた。それから、乙女は子供らしい熱心を以て、彼を戸口の方

へ引張つて行つた。少年は元より行くのを厭ふ筈はないので、乙女に隨いて行つた。

「おい、スクルーシ君の行李を持つて来い！」と叫ぶ怖しい聲が廣間にして、やがて廣間に校長の姿が現はれた。彼は氣味わるい謙讓な様子をしてスクルーシをじろく見、彼の手を把つて握手の禮をしたにはスクルーシの心は物凄く思に充たされた。次に先生は彼とその妹を導いて、まるで古井戸のやうにぞくぞくする冷たい世にも稀な客間へ連れて行つた。壁には地圖が掛けられ窓には地球儀天體儀がおかれ、それらが寒さでれちやついて居る。此處で先生は、ふしぎに薄く葡萄酒の壇を、ふしぎに重い菓子のかたまりを持ち出し、それらの御馳走を盛り分けて子供達に勧めた。同時にひねこけた婢に命じて馭者にも「何か」の一杯を飲ませるやうにした。馭者はお禮を申述べたが、前に御馳走になつたものと同じなら、頂かなくても結構だと謝絶つた。此時までにスクルーシの靴は馬車のでつべんに縛り附けられたので、少年少女はげに勇み立つて先生に暇を告げた。それから馬車に乗つて庭路を愉快に馳せ下つた。迅速な車輪は白い霜や雪を黒い常磐木の葉から繁吹のやうに飛ばせるのであつた。

「いつも纖弱な質の女で、そよ風にも萎えさうだつた、幽霊は言つた、然し心は寛裕して居たよ。」
 「その通りで、スクルーシは叫んだ。」おつしやる通りです。それを言ひ消さうとは致しません。幽霊さん。さんでもない！」

「あれは一人前の女になつてから死んだのだね、幽霊は言つた、子供があつたやうに思ふが。」
 「はい一人だけ、スクルーシは答へた。」

「なる程、幽霊は言つた。」おまへの甥御だ！スクルーシは心中穏かならざるを得ないらしかつた、そこで簡単に答へた、「はい。」

スクルーシと幽霊とが學校を後にしたのは、ほんの今のこゝであつたが、もう彼等はさある町の忙しい大通へ来てしまつた。そこには影法師の人々が右往左往に行違ひ、影のやうな荷馬車や馬車が押合ひへし合つた。而も眞の市街の活動雜踏を見るやうであつた。各商店の裝飾によつて、こゝもまたクリスマス節であることは明かであつた、然し今度は夜で、街々は燈の光に輝きわたつたのであつた。

幽霊はさある土蔵店の前に足を停めて、スクルーシに知つて居るか訊ねた。

「知て居るところぢやない！」スクルーシは言つた。「わたしや茲に奉公して居たぢやありませんか！」
 ふたりは中へ入つて行つた。すてきに高い机——もう二寸も其人の背が高いと天井を頭で衝上げたに違ひない——の後に座つて居るエールス假髮の「老人を見かけるさ、スクルーシは飛び立つ程歡び勇んで叫んだ！」

「やあ、これはフェジ井ツグの御隠居だ！めでたいなあ、フェジ井ツグの御隠居が又生き返つた！」

フエシ井ツグ老人はペンを置いて、柱時計を見上げた。時計は今七時を指して居る。彼は手をこしく擦り合せ、寛い胴着の加減を直し、足の先から慈愛の機關なる頭の先までゆすぶつて體中で哄笑した、そして氣持のいゝ、すべつこい、豊かな、巾のある、元氣な聲で吐鳴つた。

「よう、ほう、こらーエブネザア！ デイツク！」

スクルーツのむかしの姿が、今度は若者ご成つて、そゝくさやつて来た、その後から仲間の小僧。

「デイツク、井ルキンスだ、たしかにさうです！」スクルーツは幽靈に言つた。「これは、これは。あすこに居るぞ。彼奴はよくわしに懐いてたづけ、デイツクは。かわいさうに！ おや、おや！」

「よう、ほう、小僧達！」フエシ井ツグは言つた。「今夜はもう仕事はよした。クリスマスの前夜だれ、デイツク。クリスマスだよ。エブネザア？ 店の鏡戸を閉めてしまはう、」フエシ井ツグ老人は、手をげちご打ち合せて叫んだ。「ジャツク、ロビンソンご呼ぶ間もおかずに（迅速に）。」

この二人の小僧共がどのやうにして主人の命令けたこまに着手したか、話しても信じるものがないだらう！ 彼等は戸板を持つて往來へ駈け出した——一、二、三——それを窓へ當てがつた——四、五、六——門を嵌め掛釘で止めた——七、八、九——そして十二まで數へ切れん中に、二人は競馬の馬のやうに喘ぎながら戻つて来た。

「ひや、ほう！」フエシ井ツグ老人は叫んだ。高い机からふしぎな程迅速く跳り降りながら、「片附けた

り、小僧達！ こゝを廣く明けるんだよ！ ひり、ほう、デイツク！ ちやらつぶ、エブネザア！」

片附る！ フエシ井ツグ老人が監督して居て、小僧等が片附けまいと思ふものなどは一切ない、片附られないやうなものは一切ない。瞬間に片附は濟んでしまつた。あらゆる道具類は以後一切この世に用はないかのやうに縛りつけられ、床は掃かれ洗はれ、ラムプはきちんご飾付けられ、薪は爐に積上げられた。するど土藏店は忽ちにして居心地のいゝ、ほかくきれくさつぱりした、冬の夜には至極詭向きの舞踏室となつた。

先づ入つて来たのは樂譜帳を携へた提琴手、高い机の上つて、それを奏樂臺に置き、五十の腹が痛んでぐうぐう鳴るやうに樂器の調子を合せた。次にフエシ井ツグのおかみさん、大きな肥つた體中で笑つて居るやうな女。それから三人のお嬢さん。つやくしてかわいゝ。次いで六人の色男、皆お嬢さん達に胸を焦がし腸を斷つ思ひに惱む若者共、その後からこの家の仕事に雇はれて居る若い男や若い女。女中はさういふ自分の從兄だご稱する麵麴屋の男を連れ込んだ。料理番のおさんは兄さんの御親友ださういふ牛乳配達夫ご同行に及んだ。そこへまた往來から一人の子供が入つて来た。何んでも主人から充分食を當がはれぬのではないかと思はれる様子の子だ、隣に居る娘の蔭に身を隠さうとして居た、その娘はまた、おかみさんに耳を引張られたここのあるさういふ評判であつた。一人また一人ご、みんなはそろく入つて来た。あるものは羞耻で、あるものは面の皮が厚く、あるも

のはしこやかに、あるものは無作法に、あるものが押せばあるものが引張る、みんなはぞろぞろと入つて来た。いづれにもせよ兎に角も、彼等はみな舞ひ始めた。二十組も一どきに、手に手を取つて半ば廻ればまた他の路を舞ひ戻る、中央がこちらへ来るかと思へばまたあちらへ行く、ぐるぐるまたぐるぐるお安くない同志の取合せの變化ある一段一段、前の先頭組がいつも間違つた處でぐるり向きを變へるこ、次の先頭組が着いたばかりに出掛けてしまふ、一途にはみんない先頭組になつてしまつて後から續く殿組が一つもない！かゝる結果になるのを見るこ、フェシ井ツグ老人は舞踏終りの拍手をなし「大出来！」と吐鳴つた。するこ提琴手は特に備付けの黒ビールの缸にはてつた顔を突込んだ。けれども、休息を蔑んで再び登場しまだ踊る者がまるでないのに、直ちに再びさうさう始めた、まるで今まで弾いて居た樂手は精が切れて戸板に載せて家へ送り返され、自分が今新たに來つて前の樂手を追ひ除けるかそれとも自ら身を減すかさばかり決心の臍を固めたやうに見えた。

更に數番の舞踏があつた。それから賭事があり、また更に舞踏の數番、次に菓子が出た。ニーガス酒が出た。次いで冷食焼肉の大きなのが出る、また冷食煮着が出る、それから肉饅類も出る、澤山のビールも出た。けれども當夜の大きいなる主意眼目は焼肉煮着が終つてからのこ、かの提琴手(術を心得たけだもの)で、御注意召され！他人に言はれぬ前に一層よく自分の職を御存じさいふ手合の一人(一)が「サア・ロオシア・ド・コヴァレエ」の曲を弾じ始めた時であつた、するこフェシ井ツグのお

爺さんは御夫人と共に立ち出で、踊り始めた。而も先頭組なので、夫妻にまつては申々に困難な役目だ。二十三組の相手の組がまる、その人達さいふのが何れも輕んずべからざる豪の者、いよつちふ踊り抜いて、たゞ歩かうなど考へても見ないさいふ手合であつた。

けれども、よし組が二倍——あゝ！四倍——あつたらうこ、フェシ井ツグ老人は後を取るこはなかつたらう、おかみさんこてもさうだ。彼女に至つては、相手さいふ字のあらゆる寓意に於て、好相手たるを失はない。以上の言葉でおかみさんを讃め足らぬとすれば、より上等の讚辭を教へ給へ、私はそれを使用したさう。フェシ井ツグの腿からは、まことの光が發るかと思へた。ふたりは舞踏のいかなる部分に於ても、月のやうに輝いた。次の瞬間、兩人が如何なるかは、いかなる時に於ても、豫言するこはできなかつたらう。而してフェシ井ツグ老人と夫人とが、あらゆる舞踏の藝盡し、前進後進、兩手の組合せ、叩頭敬禮、コルク螺旋行進、針の眼抜、等を残らず踊り盡して元の場處へ戻つた時、フェシ井ツグ老人は「横切」た——實に敏捷に横切つたので、脚で瞬きをしたかと思はれたくらぬ、而もふらこも蹣跚すに直立したのである。

時計が十一時を告げるこ、この家庭舞踏會が解散した。フェシ井ツグ夫妻は戸口の左右に位置を占め、相前後して出て行く男女の客こ一々握手の禮をなし、クリスマスの祝賀を述べるのであつた。やがて一同が退散して、小僧二人のみこなるこ、夫妻は彼等にも同様の握手祝辭を與へた、かくして歡

聲も全く消え、小僧達は寢床へ遣られた、寢床は裏店の勘定臺の下にあつた。

この有様の續く間、スクルーシはまるで膽を潰してときまぎして居る人のやうに振舞つた。身も心も其情景に加つて、往時の自分さ一しよになつた。彼はあらゆるものを確めた、あらゆるものを記憶した、何も彼も面白かつた、そして不思議な浮々とした胸騒を覺えた。昔の自身ミテイツクとの生々した顔が去つて見えなくなつたので、始めてやつと幽霊のこゝを想出し、幽霊が眞面に自分の顔を凝視めて居たこゝに氣が付いた、其間頭上の光も明々燃え立つて居たこゝを知つた。

「つまらん事ぢや、幽霊は言つた、こんな愚かな輩を精一杯有難がらせてさ。」

「つまらんですつてー！」

幽霊は、眞心のありつたけをぶちまけてフェツヅグを讚めちぎる二人の小僧共に耳を假せミスクルーシに注意した、そして彼がさうするのを見ると言つた――

「まあさうぢやないか？ 下らない金を二三十も費つたばかりだ、ひよつこしたら三四十も費つたか、それがこんなに賞めそやす程の價值があるんかい？」

「さうぢやありません、スクルーシは幽霊の言葉にかつこなり、いつしか今の己を忘れて往時のわれに立歸つたやうな口振。」さうぢやありません、幽霊さん。御隠居は私達を幸福にも不幸にもできるんです、私達の務を軽くも重くもできるのです、愉快にも不快にもできるのです。この力が單に

言葉や顔色は在るのだとおつしやい、勘定にもならぬ程に僅かなつまらぬもののおつしやい、それだからどうだと言ふのです？ あの方が與へなざる幸福は、一身代の價がある程にも大きいのです。」

彼は幽霊の眼の色に氣が付いて、はたご口を閉ぢた。

「如何したさいふのだ？」 幽霊は訊れた。

「別して何さいふのことも、スクルーシは言つた。

「何かあるだらうさ、思ふがな？」 幽霊は言ひ張つた。

「いゝえ、スクルーシは、」なかに。今ちよつと家の書記に一言二言言ひたいこゝがあるのです。たゞそれだけのこゝです。」

かく彼が希望を述べる間に、彼の往時の姿がラムプの心を引込ませた。するさスクルーシと幽霊はまた相井んで戸外に立つて居た。

「わしの時間は残少になつた、幽霊は言つた。『急げ！』

この言葉はスクルーシに向けて、言つたのでもなく、また彼に見える何者に向けたのでもなかつたがその言葉は即刻の結果を産み出した。またもスクルーシは己が姿を見出した。彼は今や齡もやゝ長けて、中年の働き盛りである。顔には近頃のやうに険しい堅苦しい皺もない、が苦勞と食慾の影が現はれ始めて、眼には熱心な慾深げな落着のない運動がつらいて、慾情が根を張つて、やがて繁り育つ

樹がそこに影を落さうとして居るやうに見える。

彼は一人ではない、裏服を着けた美しい若い娘を併んで掛けて居る、娘の眼には涙が浮んで、それが「過去のクリスマスの幽霊」から輝き出る光を受けてきら／＼閃いた。

「それは何でもありますまいよ、乙女はしづかに言った。『おまへさんにさつては何でもありませんまいつて。あたしの代りにかわいものが出来たのですもの、そしてこれから先未長く、まるであたしがしてあげたいやうに、その代りものがおまへさんを樂しませ慰めてくれるなら、あたしは何も愁しみ悔むには當りませんのです。』」

「おまへの代になつた可愛者つて何だい？」

「金びかの可愛者よ。」

「これが世間の公平な仕打さいふもんか！」彼は言つた。「世渡りに貧乏ほど辛いもんはありやせん、それでありながら金儲ほど世間に酷く悪く言はれるものはありやしないのだ！」

「おまへさんは世間を氣にし過ぎますよ」乙女はしづやかに、「おまへさんのあらゆる外の希望は、世間の穢ない小言を受ける場合のないやうさいふ希望の中へ沈んでしまふんです。おまへさんの高尚な抱負は一つ一つ喪なつてしまつて、さう／＼慾情の主なる利慾があなたを獨占してしまつたやうに見受けますよ。さうぢやありませんの？」

「だからどうだと言ふんだ？」彼は答へ返した。

「よし俺が前より伶俐になつたさした所で、それが何だい？俺はおまへに對して心變りはしないぜ。」娘は頭を振つた。

「變つたつて言ふんか？」

「あたし達の夫婦約束はもう古いことです。それは二人共貧乏で、それに貧乏で満足して居た時分のことです、そして時節が来れば、我慢強い共縁で生計を樂にするこゝろが出来ると思つた時分でした。おまへさんは變りましたさも、約束をした頃はまるで別人でしたよ。」

「子供だつたのだ、彼はぢれつたさうに言つた。」

「おまへさん御身分の心でも、昔は今のやうな人間ぢやなかつたさおわかりでせう、乙女は答へた。

「あたしは昔のまゝですよ。心が一つだつた時こそ幸福だらうと思はれたこゝろは、今かうして心が離れ／＼になつて見るさ辛さ切なさで一ぱいになります。あたしがこれまでもどんなにか度々どんなにかひどくそのこゝろを思案したか、それは申しますまいよ。たゞあたしが思案して来ただけで充分です、約束は取消しができますよ。」

「俺が取消してくれと言つたさいふのか？」

「口ではね。そりやありません。ありませんともね。」

「そんなら、何で？」

「性質が違ひますから、精神が違ひますから、生活す周囲が違ひますから、生活の大きな目的として希望が違ひますの。あたしの愛情がおまさんのお眼に何かの価値のあるやうにしたものは、何も彼もだめなのです。あたし達の間にこの約束がなかつたら、乙女はやさしく而もきつと男を見詰めながら言つた。」「さ、おまへさんは今あたしを探し出して結婚なさらうさはおつしやりますか？あ、どうしてそんなことが！」

彼はさすがにこの想像の正當にまねつた様子であつた。然し彼は苦し紛れに、「おまへは俺がさうすまいさいふのだけ。」

「あたしが別様に考へられるものなら、そりや喜んでさうするのですけれど、娘は答へた。」「御存知なのは神様ばかり！あたしがこのやうな眞實を聞いた時、それはどんなにか強い不敵なものでせうよ。けれどもおまへさんが、今日も明日も昨日もその通りあからさまであらうしやるのだから、そりやあたしだつておまへさんが持参金なしの女房をお貰ひになるのだからと思はれますものか——思ひ切り女さ惚れ合つて居なすつても、何事によらず利慾を標準になさるおまへさんのことですよ、よし。その女を女房にして、ほんの暫く唯一の大事な主義に偽はつて見たところで、すぐ後で後悔したり残念がつたりなさることをあたしが知らないと思つて？そりやあたし知つてます、だから約束を取消しま

すよ。別人でゐらした昔のおまへさんがいさしいのだから、不足に思ふことなんかありません。」「男は何か言はうとした、が乙女は頭を外向けたまゝ再び口を開いた。

「おまへさんも別れるのはいくら辛いかも知れませんが——これまでの仲を思へばその位のことばあらうと思ひますよ。それもほんの、ほんの一寸の間、おまへさんは喜んでそのことをすつぱり忘れてしまふでせう、利得にもならない夢として、まあ覚えていゝ鹽梅だらうで。お選びになつた生活でどうかおしやはせ多いやうに！」

乙女は男を去つた、彼等は別れたのだ。

「幽霊さん、」スクルーシは言つた。「もう見せてくれますな！家へ連れ戻つて下さい。どうしてあなたはわたしを苦しめるのが面白いのです？」

「もう一つ影法師がある。」

「まつびらー！」「スクルーシは叫んだ。」「もう御免だ！見たくないんだ。もうく見せないで下さい！」然し無慈悲な幽霊は兩手で羽交を締め、無理やりに次いで現はれた光景を見させた。

彼等は更に別な場景別な場處に来て居る、非常に大きいさいふのでもなく立派さいふのでもないが和氣霽々たる一室である。冬暖爐の近くに一人の美しい妙齡な娘が座つて居る、前景に現はれた乙女と酷似して居るために彼は最初先の少女だらうと思つた、が彼は遂々彼女を見つけた、今ははやうつ

くしい主婦さなつて己が娘と對座して居る。この部屋中の騒がしさはまことにひつくりかへるやうで
 上氣せ切つたスクールシには數へることもできない程數多の子供達が居る。而も、かの詩(ウオーズ
 ウオーズ)に讚美された獸群は似も付かず、四十人の子供が一人のやうに振舞ふのでなくて、一人が
 四十人のやうに騒ぐのだ。その結果は信ずることもできぬ程の騒々しさである。然し誰一人として苦
 にするものはない。それどころか、母と娘とはさも面白さうに笑ひ興じ、心行くばかりそれを樂しん
 で居る、間もなく娘は遊戯に加つたが、忽ち散々に小山賊共に掠奪された。と言ふ私もこの山賊の一
 人になつたら寶も命も浚け出してしまふだらうに！こはいふものゝ私はそんな亂暴はさてもできな
 つたらう、さて、さて、私も！私は全世界の富を貰つてもあのきれいに編んだ髪を壊したり引崩したり
 するやうなことはしなかつたであらう。それに、あのすてきな小さい靴を引抜くなんてことは、南無
 三！死んでもいたしはせぬ。あつかましい幼ない餓鬼共がするやうに娘の腰を戯談にも抱くといふこ
 とは、私にはさても出来なかつたでせう、罰が當つて腕が腰の周圍に曲つたなり、二度と眞直になら
 なくなるぢやないか危まれた。而も私は白狀する、私とても娘の唇に觸れて見たいのは山々だ、う
 まく話しかけて唇を開かせて見たいのは山々だ、伏目がちの娘の眼の睫毛を見てやりたい、決して赤
 い面をさせないでさうして見たいと思はぬことはない、その一寸が千金なほ換へ難い形見なるあの
 髪を波を緩めて見たいと思はぬではない、手短かに言つて見れば、私は、白狀するが、子供のやうな輕

々しい無遠慮を持ち、而もその價值を知る大人でありたいのであつたに違ひないのである。
 がこの時支關に戸を槌く音が聞えた。するゝ忽ち一同はどつこ戸口へ押寄せ、娘も笑つた顔を掠
 め剥がれた着物をぶら下げて、上氣せ湧きかへる群の中央に捲かれながらその方へ運ばれる、宛度
 その時父親が、クリスマスの玩具やら贈物やらを背負つた男を引連れて入つて來た。するゝ叫喚闘争、
 突撃が、防ぐに由ない門番(入口に立つ父)に向つて行はれた！椅子を梯子にし、父親に攀ち上るや
 ら、ホケットに手を突込むやら、蔦色紙の包物を引掠り、襟飾にぎつこしがみつくと、頸にからまる、
 背中を叩く、愛しさ余つて脚を蹴るさういふ騒ぎ！包が開けられた時それを受取る不思議な歡喜の叫喚
 さいつたら！するゝ赤坊が人形の焼鍋を口へ入れるところださういふ怖ろしい注進、それでは多分木の
 皿に膠着にされた玩具の七面鳥を嚙んだのだらう！そころがこれは虚報さわかつて大安心！歡喜、感
 謝有頂天！これらは皆筆紙も盡し難い程に均しいのだ。まあかう言へば足りる、次第に子供等もその感
 情も居間から出かけて、一時に一つの梯子段を経て二階に登り、床に就いてそして鎮まつてしまつた。
 かうなるスクールシは一層注意を集中して眺める、こ、この時家の主人は娘をいささうに凭掛
 らせ、娘と母と共に自家の爐邊に掛けて居る、而してスクールシは、この娘に劣らず優美な見込
 の麗しい女が、自分を父さんと呼んで、自分の生涯のやつれた冬に春もなつてくれるのであつたか
 も知れないと思ふと、眼も涙にかすむやうに思はれるのであつた。

「おまへ、」夫はにこ／＼して妻の方を顧ながら言った、「わたしは今日の午後昔馴染の友達に遇つたよ、」

「どなたです？」

「當てゝごらん！」

「當りさうにないわ？あつ、知らなくつてさ！」夫が笑ふにつれて笑ひながら、息もつかずに、「スクルーツさん。」

「そのスクルーツのこささ、あの人の事務所の前を通つてね、その窓が閉まつてないし、おまけに内に蠟燭があつたから、どうにも覗かすには通れなかつたよ。今同僚が死にさうになつて居るさうだてあの人は獨りで掛けてたがね。世界に全くのひさりぼつちだれ、まつたく。」

「幽霊さん！」スクルーツは聲もきれ／＼に言つた、「此處から他所へ連れて行つて下さいよ。」

「言つておいた通りこれらがむかし有つた事のそのまゝの影なのぢや、」幽霊は言つた、「それらがありのまゝのものなださて、わしを非難してはいかぬ！」

「他處へ連れて行つて！」スクルーツは叫んだ。「さても堪りません！」

彼は幽霊を見上げた、幽霊の己れを見詰めて居るその顔には、ふしぎにも幽霊が見せた總ての顔の部分々々が現はれて居たので、たまらず幽霊に食つてかゝつた。

「退け！連れ歸れ！もうこれ以上くつ憑いてくれるな！」

この争闘—争闘さいふもなかしいけれど、何しろ幽霊の方は自ら別にこれさいふ抵抗もしないので、敵スクルーツの努力に惱されもしないのだ——の間に、スクルーツは幽霊の光が高く煌々／＼輝いて居るのを見た、そしておぼろながらにこの光あるがために亡霊の力の己に壓伏するものさ思ひ、消火器の帽子を擱んで、だじぬけの早業を以て幽霊の頭に壓付けた。

幽霊は忽ちこの下に沈んで、消火器はその全身をすつかり蔽うてしまつた。然し、スクルーツが全身の力を籠めてそれを壓し付けるにも拘らず、彼は光を匿してしまふことができない、光は衰へるこささない洪水さなつて地上に流れ出るのである。

彼はへま／＼に疲れ果てたこさに氣が付いた。そして何さ致し難い程の睡氣に襲はれたこさを知つた。おまけに自分の寢室に居るこさに氣が付いた。彼はお別れとして更に帽子をきつと緊め付け、そこで手を緩めた、そして寢床へ跟めき行く間もなくぐつすりさ睡込んでしまつた。

三 幽霊の第二

並外れて猛烈な鼾聲の最中に眼を覺まして、己が考を纏めて見やうと寢床の上に坐つて見たがスクルーシは今度は時計が將に一時を打たうとして居ることを告げられる必要がなかつた。彼は丁度よい機に正氣に歸つたと思つた、シヤコブ、マアレエの周旋で己れが許に派遣される第二の使者なる幽霊と談合に及ぶといふ特別の目的があるのだから。然し、今度の幽霊は何れの帷を引き開けて入つて來るか知らざ考へ始めるに、彼はいやにぞくぞく寒さを覺えたので、彼は手自ら帷を残りす引き開け、また褥に轉じて、寢床の周圍をきよろく看護するのだつた。彼は幽霊が姿を見せるが早い、直様挑戦しやうと思ふので、不意打を喰つてどきまざしたくないのである。

敏捷で拔目がないのを誇り、常に時勢に後れないのを誇るやうな奔放不羈な紳士達は、投戦遊戯から殺人に到るまで何でもござれだなどと言ひ立て、冒險能力の廣さを表白なさる、成程以上の兩極端の間には、可なり種々雑多の問題事件があることは疑ひない。スクルーシもまたかくの如く大膽不敵だなど吹聴するのではない、私はスクルーシが可成に廣い妖怪の出現に充分覺悟が座り、赤坊より水牛までのものなら何物も彼を大いに驚かすに足らぬだらうといふことを、諸君に信じてくれと要求したくはないのである。

さて、スクルーシも大概の「もの」に對しては用意して居たもの、**「無」**に對しては決して用意が出来ては居なかつた、従つて、鐘が一時を報じてなほ何の化物も出て来なかつた時、彼は劇しい發作でふるふる慄え出した。五分、十分、十五分経つた、なほ何物も現はれない。この間すつと彼は寢床の上に横つて居た。床は紅の光の焔の眞の中心になつて居るが、その光は時計が一時さいふ時間を報じた時に迸り出たのである。それがたい單に光のみであるから、十二の幽靈よりも一層凄かつた、何せ彼はその光が何の爲に差すのか、何を目指して輝くのかまるで解らないのである、そしてさもするに彼は、宛も其時に自らはそれを知らぬといふ慰めもなしに、自分が自發燃焼といふ興味ある状態にあるのではないかと思つた。然しながら、遂に彼は考へ始めた——諸君や私は最初からさう考へて居たのだらうが、さ申すも一體如何しなければならぬものかを知り、また疑ひもなくその處置を執る者は、難關に當つて居ない人なのである——遂に、今申す通り、この奇怪な光の源泉と秘密は多分隣の室にあるのだらうと考へ始めた。更によく光を犯るさ、其處から、どうも輝き出すらしい、この考へが全く彼の頭を占領して彼はそつと起き上り、戸の方へ上草履がけに摺足で近寄つた。

スクルーシの手が鍵に觸れるや否や、不可思議な聲が彼の名を呼び、入れさ命令した。彼は言はるゝまゝに入つた。

それは彼自身の部屋であつた。それには些の疑もない。然しそれが驚くべき變態をやらしたのだ。壁や天井はいかにも生々した青葉がかつて、まるで森のやうに見える、その何處から何處からも赤く熟れた果實がてらく光つて居る。ひゞらぎ、寄生木、常春藤などの縮れた葉は光を反射して、宛然數多の小形の鏡がそこらあたりに撒布してあるかのやう、それから實に熾んな火焔が煙突を聳々燃え昇つて、かの陰氣な化石のやうな暖爐が、スクルーシの時代は申すに及ばず、マアレエの時代にも、いや過去つた幾多の冬の間にも、全く例がない程である。床の上には、一種の高御座を拵へるやうに、七面鳥、鷺鳥、獲物、家禽、野猪、大きな腿肉、小豚、長い腸詰の環、肉饅頭、梅餅、牡蠣の樽、焼きたての栗、櫻色の林檎、汁多い橙、甘い梨子、巨きな十二スケーク、沸騰る混合酒の椀などが山のやうに積んである。それらの旨さうな湯氣で部屋中がばやつさなる。この座褥の上に悠然と構へて、にこゝものゝ大入道が座り込んで居るが、見るも立派なものである、山羊の角には似も付かね燃え盛る松明を持ち、スクルーシが戸のまゝから覗き込むところをばつと照らすやうに、それを高く高く差し上げた。

「お入りー」亡靈は叫んだ。「お入りーしてもつとよく俺を見覚えろ、これー！」

スクルーシはおどろしなから入つた、そしてこの幽靈の前に頭を垂れた。彼は今や常平生の頑固強情なスクルーシではなかつた、そして、幽靈の眼は牙々しておさなしげであつたけれども、

彼はその限を見るのがいやだった。

「俺は現在のクリスマスの幽霊ちや、亡霊は言ふ。俺を見たり！」

スクルーツは恭しく畏まつて命に従つた。幽霊はたゞ一枚の素樸な深緑の上衣、いや、白の毛皮の縁の付いた外套を着込んで居る。この着物はふはり寛く體軀に掛けてあるので、その広い胸は裸出になつて居る。宛もいかなる細工によつてにせよ、それを保護されたり隠されたりするのは阿呆らしいさいふやうだ。着物の廣い襷の下から見えるその足もまた裸出のまゝである、そして頭にはひゞらぎの環を載せて居るばかり何の被り物もない。環にはこゝかしこに氷柱が輝いて居る。その黒褐色の髪の毛は長くてふはく自由である。自由なのはそればかりではない、その爽快なる顔容、その爛々たる眼光、開いたその手、快いその聲、檢束ないその態度、快然たるその風手皆然りである。腰のあたりには古風な刀の鞘を佩びて居るが、刀身がないばかりでなく、その鞘も錆に蝕はれて居るのである。

「おまへはこれまでに俺のやうなものを見たことがあるまい！」幽霊は叫んだ。

「全くありません」スクルーツはそれに答へて言つた。

「ちや俺の家族の若い人達さ歩いたことはないかい、さいつても（俺はまださぶ若いんだから）この頃生れた兄貴達のこゝだかね？」幽霊は言葉を續けた。

「どうも歩いたさは思ひませぬね、」スクルーツは言つた。「どうにも歩いたこゝがないやうですがね。

時に御兄弟がたんさおありですか、幽霊さん？」

「千八百餘（西歴紀元年數）人、」亡霊は答へた。

「おつそろしい家族だ、食はせるのに大變だらうに、」スクルーツは咳いた。

現在クリスマス幽霊は立上つた。

「幽霊さん、」スクルーツは素直に言つた、「何處へなりお好きな場所へ連れて行つて下さい。昨夜は無理やりにして厭々出掛けましたが、今も働いてるやうな教訓を得ましたよ。今夜も、何ぞ教へるこゝごがありますなら、それでわしの爲になるやうにして下さい。」

「俺の衣服に觸れ！」

スクルーツは言はれた通りにして、しかま着物を掴んだ。

ひゞらぎ、宿生木、赤い樹實、常春藤、七面鳥、鷺鳥、獲物、家禽、猪肉、牛肉、豚肉、鴈、詰、牡蠣、肉饅頭、餅、菓物、酒、これらが残らず忽ちにして消え失せてしまつた。同時に部屋も火も、赤光も、夜の時刻も消え失せて、兩人はクリスマスの朝に都の巷に立つて居た。其處では（時候が大さう寒かつたから）人々は家々の前の舗石道や、家々の屋根から雪を掻き拂ひ掻き落して、がさ／＼さいふ爽かな氣持のよい音楽をやつて居る、その雪が屋根から下の道路に轉ひ落ちて

人工的の小吹雪さばかり飛散するのを見るさ、子供達は狂はむばかりに喜んだ。

屋根の上の滑らかなる白皚々たる一面の雪と相對映し、又地上のやゝ汚れたる雪と相對映して、家々の玄關は随分黒く見え、窓に至つては更に黒く見えた。地上の新しい積雪は、荷車や荷馬車の重い車輪で犁かれて深い畦をなして居る。殊に大道の分支する處ではその畦が幾千度さなく行違ひ馳せ違つて居る。而してどろどろした黄色な泥と凍つた水とで、何處がどうやら解らぬ錯雑した溝となつて居る。空はどんよりと暗く、短い街道は、半ば融け、半ば氷つた薄黒い霧のために全く塞がれ、その重い方の微分子は煤の驟雨となつて降り下り、たまへば大英國のあらゆる煙突が、申合せて火を發し、思ふ存分に燃え立つたのであるまひいかと思はれる程である。時候にも都にも、何の歡ばしいものがなかつた、而も麗かな夏の空氣もめざましい夏の太陽もなほ發散しやうとして及び難い一種の歡ばしい氣分が漂うて居るのであつた。

まを申すは、家の屋根の上に雪を掻き棄てゝ居る人々が、陽氣で元氣だからで、互に軒上の女牆から呼びかはし、折々いたづらの雪球を投げ合ふのである——言葉の洒落よりは氣立のいゝ飛道具だ——球が甘く當りもしやうものなら大笑ひ、外れたところでやはり大笑ひ。鳥屋の店はまた半分開いたばかり、水菓子屋の店頭は晴やかに輝いて居る。そこには大きくて圓く、布袋の腹のやうな栗の籠が滑稽なお爺さんの胴着のやうな恰好して、戸口にだらけ横はり、中風症のやうな脹れかたで往來ま

で轉がるのもあつた。それから赤い褐色の顔をして、廣い帯を纏うた西班牙葱が、西班牙托鉢僧のやうに肥り切つててかゝり光りながら、折柄通る娘達にでれつたさ加減で棚から眼をばちつかせ、ぶら下つた寄生木には鹿爪らしく睨みつけて居る。それから梨や林檎は見事な三角塔に高く積み上げられてある、さ思ふさ葡萄の總が、店の主人の思遣りで、通行人の口が無價で涎を流すやうに目に立つ場處の鉤にぶら下つて居る、そこにはまた様實が山に積んである。苔が生えて蔭色で、その芳香に、往時森の中を跋涉して、萎へた葉に心地よく蹠を埋めたことを想ひ起す、また丸々として色黒のノルフオーク産の林檎がある、橙やシモンの黄色を引立たせ、いかにも汁氣たつぷりさいつたやうな引緊つた姿をして、紙袋に納めて持ち歸り、食後に味ひ給へさ切に懇願哀求して居るやうに見える。鉢分けに選り抜かれたこれらの果物の間におかれる金魚銀魚すらも、薄のろで神經遲鈍の輩でありながら、何かあるなま覺つた様子である。かくて魚に至るまで、遅々として張合のない興奮の仕方、小さい小さい世界をばくく遊び廻つて居る。

雑貨商の店！お、荒物屋の店！殆ど閉め切つてあつて、多分二枚かそれとも一枚の鎧戸が下りて居るだけであるが、その隙間から覗いて見るさ！先づ衝が帳場臺の上に下りて陽氣な音を立てる、繩と繩卷とは絶えず景氣よく分れる、鐘は上から下へさながら投げられて手品の藝當のやう茶と珈琲との混つた香氣は鼻にさつてまことに有難く乾葡萄は澤山にあつて而も珍品、巴旦杏はす

てきに眞白に、肉桂の枝はいかにも長く眞直に、他の香料も甚だ結構、砂糖漬の菓物は固められ溶けた砂糖で飾り立てられて、最も冷淡な門外漢もこれを見ては氣が遠くなり、しまひにはむきになるだらう。たゞにそれらのみに止らず、無花果は露を帯びて肉厚く、佛蘭西梅はすてきに化粧した箱の中から控目ながらに酸くつんとして顔を赦らめ、あらゆるものは皆食ふによろしく、またクリスマスのおめかしで美しい。ところが客達はいづれもその日の見込存分な娯樂にかまけてめちやに急ぎめちやに張込むので、戸口では行常り衝當り、編細工の籠を矢鱈無性に潰し壊し、買物を勘定臺に置き忘れ、わざと走つてそれを取りに来るさいふ鹽梅に、この上もない上機嫌で同様な失策を百も千もやらかす。一方では荒物屋の主人も小僧達も、淡白で元氣で、前垂をこめたる磨き上げた心臟形のピンは正直な胸の中から心臟をそのまゝ外へ引出して、一般の觀覽に供して居るかのやう、そしてクリスマス、鴉共にお好み次第に啄み給へと言つて居るかのやう。

けれども尖塔は間もなく善男善女を悉く教會堂と禮拜堂に呼び集める、人々は晴着を着飾つてこの上もない愉快な顔で、群をなして街を通り、其處へさやつて来る。するさ同時に裏通路、名もなき横丁から、數百と數も知れない人々が、食料を携へて麵麩屋を指して、沸くやうに出て来る。これらの貧乏な飲騒ぎ連中の光景は、大いに幽霊の心を悦ばせた。見え、彼はスクルーシを傍にしてさある麵麩屋の戸口に立ち、人々が御馳走を持つて通る時その器物を取つて松

明からそれに香料をふりかけた。而してこの松明は甚だ以て例稀なる品で、ふち／＼戸口を出て来る御馳走を持つた人々の二三が口論をした時に、幽霊がその松明から二三滴ふりかける、忽ち元の上機嫌なるのであつた。そしてクリスマス當日に喧嘩はみつともないなど、彼等は言ふのであつた。それに違ひなし！神も愛でませ、それに違ひはござらぬ！

やがて鐘も止み、麵麩屋の店も閉められてしまつた、けれども麵麩屋の竈の上には雪溶けの濡れた斑點に、すべてこれらの御馳走、調理の次第がまことやかに映り出る、まるで石が料理をして居るかのやうに、石から煙が出る。

「あなたが松明からおかけなさるものの中には特別の香料があるんですか？」スクルーシは訊ねた。「あるさ。俺特有の。」

「今日の御馳走にはどれにもそれがかゝるんですか？」スクルーシは訊ねた。

「心づく／＼で與へられたものにはどれにもかゝる。貧しいのに一番澤山やるのだ。」

「何故まあ貧しいのに一番多くやるんです？」スクルーシは言つた。

「一番に香料を必要とするからのことだ。」

「幽霊さん、スクルーシは一寸の間考へた上で言つた、「この種々な世の中の人間のうちで、あなたがこんな人達の無邪氣に楽しみ遊ぶ機會を妨げるつてのは、どうも不思議でたまりませんな。」

「俺が！」幽霊は叫んだ。

「あなたは七日目毎（日曜）に御馳走をやる手段でものを奪つちまひなさる、苟くも御馳走をやるなんてのは、彼等にはこの日ぐらぬしか言へんこつちやて、」スクルーシは言つた。「それを奪ひなさるぢやありませんか？」

「俺が！」幽霊は叫んだ。

「あなたは七日目にこんな場處を戸閉めさせてしまふんでさ、」スクルーシは言つた。「それがつまり御馳走の手段を奪つちまふことなるんですよ。」

「戸閉めさせる！」幽霊は叫んだ。

「間違つてたら御免しな。右左あなたの名前で、いや少なくてあなたのお家の名前でそいつは行はれるんですから、」スクルーシは言つた。

「このおまへ達の人間世界さいふ處には、」幽霊は答へた。「厚かましくも吾々を知つてるさ申立て、吾々の名前を着て、慾情、暴慢、非道、憎悪、猜忌、頑迷、それから我利などの行をやる者があるのぢや。ところがその者共は吾々にはあかの他人、吾々の眷族さばまるで一面識だにないので、その者共が生れてたのか生れてないのかも知らぬのぢや。それを記憶してくれ、そして彼等の行業なら彼等を責めるが、吾々でなしに。」

スクルーシは仰せの通り致さうと約束した。そして兩人は前同様に見られずに、町の郊外へさ出掛けた。さてこの幽霊には一種格別の特質がある、（それはスクルーシが麵麩屋で見たのだが）、その體軀が宏大なものにも拘らず、彼はいかなる場處にも容易く身を處し、低い屋根の下でも、高い廣間で出来るさ同様に、なよやかに神性を具へたものゝやうに立つことが出来た。

而しておそらく幽霊は此の彼が力を誇示かすが愉快なのであらうか、それこそその性質が親切で寛大で懇ろであらゆる貧乏人に同情があるのであらうか、幽霊はスクルーシをその書記の家へ眞直に連れ向つた。其處へ彼は行つた。着物に纏つて居るスクルーシを連れて行つた。するさ、玄関の關の上で幽霊はにやりとした、そしてその松明の霧散によつてポツプ・クラチットの住居を蔽ひ聖めやうと足を止めた。考へても見給へ！ポツプは一週間に十五「ポツプ」(十五志)しか取つては居ない、彼は土曜々々に自分の名の寫しを十五だけポケットへ納めるだけなのだ、而も「現在クリスマスの幽霊」は彼が四間の小家を蔽ひ清めたのだ！

するさクラチット書記の細君クラチット夫人が現れた。裏返しをした寛衣をみすばらしく着流して居るが、リポンを數多く着けて綺羅を飾つて居る。リポンなるものは安價なもので六片もあれば可成に立派に見えるものだ。而して彼女は同様にリポンでめかした六番目の娘ベリンダ・クラチットに手傳はれて卓布をひろげて居る、さ一方には息子のピーター・クラチットが馬鈴薯の鍋の中へブオ

一クを突き挿して居る、そしてばかに大きい襦袢の襟（ホツプの私有財産で、その日を記念してその子息にして後嗣なる者に下したるもの）の角を咬へて、いかにも立派に着飾つて居るのを見て自ら楽しみ、流行の公園地で亞麻のシャツを見せたいものだと希つた。而して今や二人の小クラチット男の子女の子が駈け込んで来た。麵麩屋の外側で鷺鳥の匂を嗅いだかそれは自家のだから心得たのだと叫び立てる。紫蘇と葱がさぞ旨いことだらうといたづらに思ひ耽つてはくくもの、ふたりはテンプルまわりを踊り廻る、兄のピーターも有頂天になるほど勇み立つた。が而も彼は（カラアで息が詰りさうなのにも拘らず別に氣取るさいふのでもなく）火を吹き立てる、待遠い馬鈴薯も遂に煮え立つて、がらく音を立て、鍋の蓋を衝上げ、出して皮を剥いてくれと言はねばかりである。

「おまへたちの大事な父さんは一體どうなすつたらう、れえ？」クラチット夫人は言つた。「それから兄さんのタイニー・タイムは？それにマルタも去年のクリスマスには三十分も前に歸つたがねー」

「マルタは歸つてよ、母さん！」娘はかう言ひながら姿を見せた。

「マルタが歸つたよ、母さん！」二人の弟妹は叫んだ。「やーい！こんなに大きな鷺鳥が居るよ、マルター！」

「まあれえ、よく歸つて来たれえ、おまえ、何て遅いんだい！」十二度も接吻しながらクラチット夫人は言つて、世話好の熱心さで肩掛や帽子を去つてやる。

「昨夜形付けてしまふ仕事があつたのよ、」娘は答へた、「そして今朝は暇にしなけりやならなかつたのだから、母さん！」

「なあに！もう歸つたんだからそんなことどうでもいゝやれ、」夫人は言つた。「爐のまこへお掛けよ、れえ、そして温まりなよ、御苦勞だつたれえ！」

「いけない、いけない！父さんが来るからよ、」しよつちふ飛び廻りながら二人の子供等は叫んだ。「隠れておいでよ、姉さん、よう隠れて！」

そこでマルタは身を隠した。する可可愛父さんのホツプが、總を除いて少なくとも三尺もありさうな襟巻を前にだらり下げて、つこ入つて来た。その磨切れた着物は縵布を當てたり刷毛をかけたして時節柄見よいやうにしてある。ちよびのタイムはその肩に載つてある。ちよびのタイムはかわいさうだ。彼は拐杖を持って、脚は鐵の框で支えてあるのだ！

「おや、マルタは何處だい？」ホツプ、クラチットはきよるつきながら叫んだ。

「歸りませんか？」ミクラチット夫人は言つた。

「歸らない！」ホツプは元氣が急にがたりと挫けて言つた。さいふのも彼は教會堂から家まですつとタイムの純種の馬となつた上に、駈歩で歸つて来たのだ。「クリスマスの日には歸らないつて！」

マルタはたさひ戯談にもせよ、父親のがっかりしたのを見るのが厭だつたので、早速押入の戸のうしろから出て、父親の兩腕の中へ飛び込んだ。と同時に一方では二人の子供がちよびのタイムにがむじやりに纏ひ付いて、流し元へ連れて行つた。銅鍋の中でちよびが歌を謡つて居る餅の音を聞かさうといふのだ。

「それはさうさちびのタイムちゃんはどうしてました？」細君は良人の馬鹿正直をなぶつておいて訊れた、するさポツアは娘を思ふ存分抱き締めた。

「おさなしいのなんのつて、」ポツアは言つた、「いつもよりなほおさなしかつた。さにかくれ、あんまりひさりで座つてばかり居るから、少し考へ込む癖がついたね、實以て聴くも不思議なことを言ふよ、今も歸り途で、他の人達があたいの教會にお勤めするのを見るさいなさいふんだ。何故さいふさいあたいは跛者だから、あたいをを見て、跛者の乞食を歩ませ、盲目の眼を開かせなざる神様を思ひ出すことは、クリスマスの日だからみんなにさつても愉快だらうつてかうなんだ。」

ポツアの聲はかく語る時慄へた。そしてちびのタイムもだんく丈夫に元氣になつて來たさいいつた時にいよく慄えるのであつた。

タイムの威勢のいよ小さな拐杖の音が床に響いて、ちびのタイムはその上の一言の語らひもする暇のない中に歸つて來た。弟妹に護り助けられて爐の傍の椅子に腰を下した。かゝる間に、ポツアはカ

フス——氣の毒だが、これよりみつこもなくしやうつたつてできないほどの——を巻き上げて、シンシレモンを罎に入れて熱い混合酒を作り、それをぐるぐる搔廻して、沸騰らすために鐵網の上に載せた。ピーター坊さよく飛び廻る二人の子供は鵝鳥の料理を取に行く、間もなくえらい景氣で持ち込んで來た。

次いで大騒ぎが起つた、まるで鵝鳥があらゆる鳥中の最も珍なるものと思はれるくらゐだ。黒い白鳥なんぞそれに比べると何でもないさいふほどの羽毛の生えた物象とも思はれるだらう、いや實際、この家ではまあそれに似たものに思はれるのだ。クラチット夫人はちよびといつてる程熱くだし汁を沸かす（前以小鍋に用意されてあつたものだ）、ピーターは驚くべき程に精を出して馬鈴薯を潰す、ベリンダは林檎ソースに甘味を添へる、ポツアはちびのタイムを卓子の一隅へ連れて行つて側に掛けさす、二人の子供達は一人々々の椅子を並べる、自分達のなも忘れはしない、そしてその位地を護りながら、匙を口に詰め込む、これは配つて貰ふ番が來ない中に鵝鳥と吐鳴つてはならぬこの用心である。遂に皿は並べられて祈禱は述べられた。するさ細君はしづかに肉切庖丁をすつかりしらべて鵝鳥の胸へ突入れやうとする、その間は息つく者もない沈黙、然し突差してしまふさ、そして待ちに待つた眞物が迸り出るさ、歡びの眩きが食卓の周圍に起つた。ちびのタイムすら、二人の弟妹に元氣付けられて小刀の柄でこつん卓子を叩き、かすかにやあさ叫んだ！

昔からこんな驚鳥はまたさなかつた！ポツプはこれほどの驚鳥が今日までは料理されたことはない。信じざる言つた。その軟き風味のよさ、大きき安さ、これらが一同讚嘆の的であつた。これに林檎ソースと馬鈴薯のマツシユを添えて食ふのだから、全家族に充分な食料だ。げにもクラチツト夫人が大恐悦で（皿の上なる骨の一小片を見て）總掛りでもさうく食ひ盡せなかつたと言つた！而も誰も彼も腹一杯やつた、殊に小ちやい小供達は、紫蘇と葱を咽喉まで詰り込んだ！けれど今、皿がベリンダの手で井へ換へられると、夫人はひそり室を出た——出来はどうかさきやくく氣を採んで他に目撃させまいとした——餅餅を取出して持ち込まうといふのである。

よく煮え切らなかつたらどうしやう！返すまじに壊れたらどうしやう！驚鳥で景氣を付けてた間に誰かが裏庭の土塀を越えて盗んでしまつたらどうしやう——かう考へて来る二人の子供等は蒼くなつた！あらゆる種類の煩悶が生れて来た。

ほーら！大へんな湯氣だ！餅餅が銅鍋から取出された。洗濯日のやうな香！これは上の布だ。飲食店と菓子屋とが隣合つて、その隣に洗濯屋といふやうな香！これがプディングだ！瞬く間に夫人は入つて来た——顔を救くして得意さうににこ／＼しながら——手に餅餅を持つて居る、斑點のある大砲の彈丸のやうに、固いわ堅いわ、火を著けた四勺足らずのプランデーの中にほつほつしながら、その頂點にクリスマスのひ／＼が飾られてある。

お、見事なプディング！ポツプ・クラチツトは言つた、而も落着き拂つて言つた。これは兩人の結婚以來夫人が果した最大成功だ。細君はまた、重荷が心を降りた今となつては打明けるが實は粉の質がどうか心配して居たと言ふ。誰も彼もこのプディングに就いては、何さか言はぬ者はなかつた、がこれはかゝる大家族にまつてはあまりに小さいプディングだなどといふものは一人もなかつた。またさういふことを言ふのは眞に邪道であるに相違ない。クラチツト一家の者は何人にもまれかゝる事をおくびに出さへ報顔の至りだと思つて居るのである。

途々御馳走も全部済んで、卓布は取り除かれ、暖爐は掃除をして火が起された。罎の中の混合酒も味はれ、完全な賞美され、林檎と橙とが食卓の上におかれて、栗を盛り上げた火斗が火の上にかげられた。そこでクラチツト家一同は主人ポツプの所謂「團圓」(圓)と呼ぶ實は半圓をなして爐を圍んだ。そしてポツプ・クラチツトの脇のところに、破璃器のありつたけが飾り立てられた。二つの大コップと柄のないカスマルドのコップ。

さはいふものゝ、これらの器物は、罎から熱い飲物を受けるに金杯と變るまゝころはない、而してポツプは喜色を満面に湛えて注いでやる、その間に火にかけてある栗はげち／＼こはれながらやかましく破れる。そこでポツプは祝詞を述べた——

「みんなクリスマスおめでたう。神様お恵みを垂れさせ給へ！」

家内中のものがそれに應じて祝詞を述べた。

「皆の者一人のこらずに、神のみ恵みあらせ給へー」ちびのタイムが最後に言つに。

タイムは父の側にびたさくつついて、自分の小さい椅子に掛けて居る。ポツプは羨びたその小さい手を握り締めて、いかにも可愛くて、側を離したくないさうに、離されはしないかき遣ふやうに見えた。

「幽霊さん、スクルーッはこれまでにまるで感じたことのない興味を以て言つた」ちびのタイムが壽命は持つかどうか話して下さい。」

「貧しい爐邊に空いた椅子があるやうぢや、幽霊は答へた」それに持主のない拐杖が、大事に保存されてあるやうだ。これらの影が未來の神に變へられることなくあのまゝになつて居るさ、子供は死ぬぢやらう。」

「いけません、いけません。」スクルーッは言つた「それはいけません。親切な幽霊さんあの子が助かるさおつしやつて下さいよ。」

「もしこれらの影が未來の神に變へられずしてあのまゝになるならば、俺の種族の何人ぞ雖も、幽霊は答へた「またさあの子を此處に見はすまい。だからさうそれが何だ？死にさうださうなら死ぬがいさ、そして過剰の人口を減した方がいさ。」

スクルーッは自分の言葉が幽霊によつて引用されたのを聽いて頭を垂れ、後悔と苦痛に襲はれた。

「人間、幽霊は言つた」もしおまへが金石ぢやなくて、情ある人間ならば、あのやうな意地悪いたわごさを控えるがいさ、過剰さは何物で、また何處にかゝるものがあるのか、それがわからない中はな。おまへはどのやうな人間が生きるがいさ、どのやうな人間が死ぬがいさ、さ決めやうさいふのか？若しかするさ、神様のお眼では、おまへ如きはこの貧乏人の子供のやうな幾百萬の人間よりも更に價値のない生き甲斐のないものかも知れんぢや。あゝ何たる事だ！木の葉の蟲が、その卑賤の境遇に同類の間に混りながら、生命過剰など、抜かし居るを耳にしやうさば！」

スクルーッは幽霊の攻撃辯難にしてやられて、わななく顔へながら、眼を地面に落した。がぶさ自分の名を呼ぶ聲にあわたしく眼を上げた。

「スクルーッ君！」ポツプは言つた。「この饗宴を張らせてくれたスクルーッ君、君のために祝盃を擧げやう！」

「御馳走をやらせてくれた人ですつて、まあ！」夫人は紅くなつて言つた。「あの人が此處へ来てくれるさ。御馳走さして胸にありつたけを言つてやりたい、お腹を空かしてくればいさ。」

「おい、」ポツプは言つた。「子供達が居るのだよ！クリスマス祭日だよ。」

「クリスマスの祭日でせうよ、たしかに。」細君は言つた。「人もあらうにあんな厭らしい、刺のある、頑固な惨たらしいスクールシさんの健康を祝つてお酒を飲むといふのかね。おまへさんはあの人かどんな人間か御存知でせう、ロバートーあんなより善く知つてる人は誰もありやしない情ない人だ！」

「これさ」ポップはやさしく答へて、「クリスマスの祭日だつてござよ。」

「あたしはあなたのためさ今日のお祝ひのために祝盃をあげますよ。」細君は言つた。「あの人のためではありません。あの方の長生なさるやうに！クリスマスおめでたう、新年おめでたう！あの人はいそれはく愉快で仕合せでせうよ、さうに違ひありませんさ！」

子供達は母に倣つて祝盃を擧げた。御馳走の進行中熱心を缺いたのはこれが初めてだ。ちびのタイムが最後に祝盃を擧げた。が毛程も思つては居ない。スクールシはこの家族の鬼である。彼の名を言つたばかりで、一座に暗い陰影がかつた、そしてまる五分間ばかりは晴れやらなかつた。

その陰影が去つてしまふさ、毒蟲のやうなスクールシが形付いたさいふ安心からばかりで、前の十倍も陽氣になつた。ポップ・クラチットは先づ口を開いて、ピータアのために一つ職を見付ける見込があるが、もしそれが旨く行つたら、一週間に五志六片(二圓七十五錢)は持つて歸れると言つた。二人の子供等はピータアが商人になるんかと言つてわい々笑ふ、ピータアの方はまたカラアの間から仔細ありげに火を見つめる、そんな眼玉の飛び出す程の大金を受取つたら、いかなるまことに投資をしたものか考へ込んで居るやうだ。女小間物店にあはれたな年期奉公をして居るマルタは、そこで話を受けて、自分はどんな仕事をしなければならんのださか、のべつに何時間位働くのださか、明日の朝はどんなに朝寢して骨を休めるつもりださか語つた。明日は彼女が家庭で過すべき休日なのである。それからまた此間ある伯爵夫人とある貴族を見たさか、その貴族が「ピータアぐらゐの脊」ださか話した。これを聴くさピータアはカラアを無性に引張り上げて、諸君がその席に居ても彼の頭は見えないと思はれるのだつた。かゝる間に栗と蠶さはぐるぐる廻つた。そして間もなくちびのタイムが歌を唄つた、雪の中を旅して路を失つた小兒のこゝろを歌つたもの、タイムは哀れな可愛い聲なので、實になかく旨くそれを唄つた。

歌を謡つたさいふこゝろに何も高尚な所があるさいふのではない。彼等は眉目秀麗さいふ家族ではない、被服も立派さいふのではない、靴はさても雨降りを受合ふわけに行かぬ。着物は乏しい。ピータアに至つては質屋の内部を知つて居ないさも限らない、いやいかにも知つて居るらしい。然し彼等は幸福で愉快で、互に歡び、時勢に満足して居る、而して彼等の姿が薄らいで、而も別れ際なる幽霊の松明のきらくする水霧を受けて一層仕合さうに見えた時、スクールシは彼等の上に眼を据ゑた。殊にちびのタイムのこゝろは、最後までもその眼を放さなかつた。

この時あたりは次第に暗くなりまきつて、雪はかなり激しく降り出した。スクールシと幽霊さが

街々を縫うて進む時、厨だの、客間だの、あらゆる種類の部屋々々のごろ／＼燃え立つ火の明るさは
 びつくりするばかりであつた。こゝでは、焔のゆらく／＼揺れて輝く光がほつきおおい
 御馳走の準備を見せ、熱い皿は火の前に幾度か翳され、濃紅色の窓帷は寒さと暗さを遮るために
 引かれるばかりになつて居る様子。かしこには、家内の子供等が残らず雪の中へ駆け出して行く、結
 婚した姉さん達、それから兄さんや従兄弟や、叔父さん叔母さん達を迎へて、われこそ第一番目に挨拶
 を言はうとして居る。こゝにはまた、客人達の集まつて居るのが窓の垂帷に影法師となつて見
 え、かしこには一團の美しい乙女達が、皆頭巾をして毛皮の長靴を穿ち、べちやく／＼どきに饒舌
 りながら、隣近所の家へさつささ出掛けて行く、其家へ彼等は喜々として顔輝かせつゝ入つて行
 く――それを見た獨身者こそ災難だ――わろがしこい魔女共、それをよく心得て居るのだ！

こゝろで、もし諸君が、知合の集りに行く途中の人々があまりに多いこゝろから見當をつけるな
 らば、諸君は客が先方の家に着いた時に歡び迎へる者がないだらうと思ふかも知れぬ。こゝろが
 さうではない、いづれの家も來客を待ち受けて、煙突の半ばまでも火を堆んで居るのである。めで
 たいこゝだ！幽霊はどんなに悦び勇んだらう！胸を一ぱいに裸出して、廣い掌を擴げ、寛まかな
 手もて、その達くかぎりのあらゆるものに生々として罪のない歡喜を播きながら飛び行くのだつた！暗
 い街々に點々さ灯を入れて、彼等の前を走る點燈夫すらも、幽霊が通りすぎる時から／＼さ笑つた。

點燈夫がクリスマスを友とするのみで他に仲間のないこゝはわかり切つて居るのだが。

する中に、幽霊からは何の注意もなく、兩人は荒涼寂漠の沼澤に立つて居る。そこには、粗雑
 な石の巨大な塊がごろ／＼轉がつて、巨人の墳墓ではないかと思はせる。水は欲するまゝに縦横に
 流れる、いや今それを凍らして塵にして居る霜がなかつたなら、恐らく流れ擴がつたであつたらう。
 昔、針刺鷹瓜及び蓬々さ茂つた雑草以外に何も生えては居ない。西の空低く、夕陽は火のやうに赤
 い一條の光を残して居る、その光は陰險な眼のやうに、や／＼しばしば荒蕪たる原野を輝かし
 たが、それも低く、更に低く、なほ更に低く眉を蹙め、遂に眞暗闇の夜の濃い幽冥の中に没してし
 まつた。

「こゝは何處ですえ？」スケル―ジは訊れた。

「こゝは鑛夫共の住む所だ。地球の腹の中で仕事をして居る人々だ。」幽霊は答へた。「けれども彼
 等は俺を知つて居るのだ。見ろ！」

灯の光がさある小舎の窓から洩れた。兩人は速かにその方へ進んだ。泥ま石の壁を通り抜ける
 さ、兩人は燃え熾る火の周圍に集つた榮しい團居を見出した。老いた老いた爺さん婆さん、その子
 供達、子供達の子供達、またその子供達、一同は祭日の晴着を着飾つて陽氣である。老爺はクリスマ
 スの歌を謡つて居る。その聲は不毛の原野をわたる風の音に遮られてめつたに聞き取れない。歌は

爺さんが子供であつた時代の非常に古いものである。時々一同は合唱して聲を合せる。皆が聲を張上げる。爺さんも限つて元氣に聲高になる、而も皆が止める。限つて爺さんの元氣が沈んでしまふのであつた。

幽霊は此處に長く躊躇はない、スクルーシに着物へ掴まれ命じて、濕地を横切つた。行く先いつこ？よもや海の上ではあるまい！海の上である。スクルーシの驚愕したここには、見返る。陸地はわづかに見え残り、おそろしい岩地の山脈が背後に聳えた。前は逆巻く水の怒號に耳も聳せむばかり、水は轉び吐鳴り、自ら穿つた物凄しい巖穴の間に荒れ狂ひ、猛烈にも地球を覆さうとするのだつた。

海岸を相去るこそ數里、荒れに荒れる一年中、怒濤が激しく衝く暗礁の物凄しい巖頭に建てられてひさりぼつれんと聳える燈臺があつた。その礎には海藻の大集積がまつはり、海鳥——海藻が水から生れるやうに風から生れたと思はれるやうな——はその周圍に浮きつ沈みつ、自ら掠め飛ぶ波のやうであつた。

然し、此處でさへ、燈臺の番をする二人の男は火を燃して居る。それが厚い石の壁の風窓を通じて凄い海に一條の輝を注いで居る。今しも二人は荒削の食卓に就いてその上に骨つばい手を握り合ひ、酒の大杯を舉げてクリスマスの祝賀を述べ合つた。そしてその一人、顔は老船の艦なる彫

刻の頭のやうに寒風冷雨に悉く傷けられ痕を残された年長の一人が、歌それ自身暴風かと思はれるやうな頑固な歌を誦ひ出した。

再び幽霊は暗膽として澎湃する荒海の上を、急ぎ進んだ——先へ、先へ——遂に幽霊自らスクルーシに言つた。言葉によればいづれの濱よりも遙かに離れてしまつたところで、二人は船に乗込んだ。ふたりは或は舵輪に仕事をす舵手の傍に立ち、或は艦の見張番のところにいき、當直士官の傍に行つた。彼等は種々の配置に就いて居る黒い幽霊然たる影法師だ。而も誰一人さしてクリスマスの歌調を口ずさまぬはなく、クリスマスのよるこびを抱かぬものはない。または過し日のクリスマスに就いて同僚にひそく告げ、早く家へ歸りたいものだ。希望を述べて居る。而も船中の誰も彼も、覺めて居やうが眠つて居やうが、善人であらうが悪人であらうが、今日は平常の日より一層親切な言葉を交へて居る、そして遙かに離れてもなほ思ひを繋ぐ人々、先方も彼を想うて嬉しがる人々のここに想を寄せて居るのである。

スクルーシは大いに驚愕仰天した。風の呻りに耳傾けて、深淵は死の如くも深い秘密をなす名も知らぬ海上を、孤寂の暗闇を貫いて辿り行くのはいかばかり嚴肅な事だらうなど、考へて居る。スクルーシは大いに驚嘆した。かくも感想に耽る最中に、心ゆくばかりの笑ひ聲を聞いたのである。ましてその聲が甥の聲ださわかつたので、スクルーシの仰天はいよいよはげしい、彼自

身は今輝かしいさつぱりした綺麗な室に居るので、幽霊は傍に微笑しながら立ち、氣に入つたさ
いふやうな愛想を見せて甥を眺めて居るのだ！

「は、はー」スクルーシの甥は笑つた。「は、は、はー」

若し諸君にして、そんな機会があり得べしと思はんが、スクルーシの甥よりも一層笑ひの天賦
を受けて居る者に邂逅ふならば、私がかう言ふだけである、私もその方とお知合になりたい。私に
その方を紹介して下さい、私は勤めて親知を深めませう。

一方疾病さか悲哀さか言ふものゝ中に感染があると同時に、他方に於ては、笑さか上機嫌さか
いふもの程傳染性的のものは世間に二つとない、さういふことは、これ物事の公平無私、公明正大な
る調和安排である。スクルーシの甥が脇腹をかゝへ、頭をゆすぶり、いかにも仰山に顔を蹙め歪
めて笑ひこけるさ、スクルーシの義理の姪も彼さ一しよになつて同じやうに笑ひこける。そしてそ
に集つた友達達中も、われ後れじと勇ましく笑ひ出した。

「は、はーは、は、は、はー」

「叔父はクリスマスなベテンだと言ふんだ、まつたくさー」スクルーシの甥は叫んだ。「それをまた信
じてるんだからええ！」

「見下げ果てた人ねえ、フレッド、」姪は腹立たしげに言つた。かゝる女共こそすてきた！何事も好

い加減にしてはおかない。いつも本氣になつて居る。

彼女は中々美しい、すてきに美しい、醜のできる、びつくりしたさういふやうな至極結構な顔立、
口は熟れたやうに小さくて接吻に誘向——いや接吻はされて居ること疑ひなし、顎のあたりには
あらゆる種類のかわいゝ小點があつて、笑ふ毎に互に溶け合ふ、眼はいさもにこやかに輝いてい
なる乙女の頭にも見られぬほど。一口に言つて見ると、彼女は諸君がじれつたいさ叫びさうなシレも
のなんだ、してまた申分ないさういひたいやうな。お、實に全く申分ないさ！

「叔父さんは滑稽な爺さんさ、」スクルーシの甥は言つた、「それは眞實のことだよ、そして愉快に
きるのにそれだけ愉快にしないんだね。けれども、叔父さんの罪は叔父さん自身で罰を受けるだけだ、
僕はかれこれ悪口をいふことはない。」

「叔父さんはたいさう金持でせう、あなた、」スクルーシの姪は口を挿んだ。「兎に角も、あなたはあ
しにさうおつしやいましたね。」

「金持だつてそれが何になるもんかね、おまへ？」スクルーシの甥は言つた。「あの人の富なんでも
はあの人には何の役にも立たないんだ。その金で何の善い事もしないんだからね。それで自分で樂し
むさういふでもなしね。叔父さんはこんなこと考へて満足するのでもなしさ——は、は、は、は、——つ
まりそれを僕達に恵むつてやうなことをね。」

「あたしあの人には腹が立つて我慢ができないのよ」スクルーシの姪は言った。姪の姉妹もその他の婦人達も一同それに同意を唱へた。

「お、僕は我慢ができる！」スクルーシの甥は言ふ。「僕はあの人を氣の毒に思ふ、怒らうと思つたつて僕には怒れないんだ。あの人の旋毛曲なむら氣に誰が苦しむだらう？ いつでもあの人身だ。ところで今度も僕達を嫌はうと思つて、来て御馳走をやつてくれない。その結果は何ぞ来た？ 尤も御馳走と言つたつてそれ程のことはないから何だが。」

「まつたくよ、たいさう結構な御馳走を取逃がしたと思ひますわ、」スクルーシの姪は横から話を奪つて言つた、誰も彼もそれに賛成した、彼等はさにかく適當な批判者として認められなければならぬ。一同は皆現に御馳走を濟ましたばかりなのだから、そして卓上には食後の菓子を併べて、ラムプの光を受けながら爐の周圍に集まつて居るのだから。

「いや！僕はさう聽いて非常にうれしい、」スクルーシの甥は言つた、「こゝな若い不慣れた連中にはあんまり信用もおけないから、君はどう思ふね、トツパア？」

トツパアはスクルーシの姪の妹の一人にお思召があつたことは明々白々である。何故かといふと、彼の答がかうなのだ。獨身者といふものはみじめな浪人で、かゝる問題に意見を喋々する資格がないのだ。するもスクルーシの姪の妹——レエスの襟飾をしたぼちやくした方ので、薔薇の花

を附けた方ではない——がさつこ顔を赧めた。

「さあお続けなさいよ、あなた、」スクルーシの姪は手を叩きながら言ふ。「この人はいつも話し始めたことを途中で止しちまふのですよ！おかしな人ですこねえ！」

スクルーシの甥は又もどつこばかり笑つた。するも笑の傳染を防ぐに由なく、尤も例の丸ばちやの妹は醋酸水を含んで防がうましたが、而も一同は一人の洩れなく笑ひ崩れた。

「僕はかう言はうとした、」のこさ、「スクルーシの甥は言つた、」叔父さんが僕達を嫌ひ悪んで、僕達と歡を共にしないその結果はさういふこと、つまり叔父さんが愉快な時間を取適すことになるのだ。尤もそれはあの人に何の害にもならないが。僕は信じるね、叔父さんがあの敵の生えた古事務所かあのむさくるしい部屋々々で、獨り思案で、つち上げやうたつて出來つこない愉快な方々を失くすさいふものだ。僕は叔父さんが好かうと厭がらうと、毎年誘つて同じ機會を作つて上げるつもりだ。氣の毒でならぬのだから。あの人は死ぬまでクリスマスを罵例するかも知れない。然しあの人にてクリスマスを好意の眼で見ないでは居られなくなるだらう——僕は叔父さんがどう思はうと物さもしないのだ——若し僕が上機嫌で、毎年毎年伯父さん、御機嫌よろしう、と言つて行つたらね。たゞあの人が、あの貧乏な書記先生に五十磅も残して行く氣になつてくれるなら、それがまんざら無駄にもなるまい、昨日だつて僕は叔父さんを動かしたと思ふのだ。」

今度は一坐の連中が笑ふ番になつた、彼がスクルーシを動かしたさいふのいかにもおかしいので、けれども、全然氣立のいゝ悪氣のない人々なので、笑ふ問題が何であらうと、それにはあまりお構ひなしに、さにかくも笑へばいゝと言ふ連中であるから、彼は益々坐興を助け、煙をよるこぼしげに廻した。

茶の濟んだ後音楽が始まつた。さ申すも彼等は音楽好の家族で、俗歌や尻取歌ぐらゐを諷ふにはよく勝手がわかつて居る、その點は保證してもいゝ、殊にトツパアは、名手然と低調で呻るが決して額に青筋を出さないし、顔も赤くはしないのだ。スクルーシの姪に至つては提琴を巧みに弄ぶ、様々な歌調の中に、手短かな小唄（ほんのつまらぬもの、諸君なら二分かゝれば口笛でやれる）をやつた。この唄はクリスマス過去の亡霊が思出を見せてくれた時に、スクルーシを連れて行つた少女が平常やつたものだ。この音楽の調子が響くと、幽霊の見せてくれたあらゆる物がまた想ひ出された。そして自分が數年前度々これを聴いて居たなら、己が幸福のために己自身の手で親切の種を植ゑ、シヤコブ・マアレエを埋めた寺男の鋤に依頼することなんかかつたらうと思つた。

然し彼等は全一夜を音楽に捧げはしない。しばらくすると賭事をやり始めた、時に子供になるのはいゝことだ、殊にクリスマスにあつては最も結構なことだ。この時には偉大なる創造者キリストが己に子供であるのだから。待てよ！先づ最初に盲目戯びがあつたのだつた。勿論あつたさ。それに私

は、その際トツパア君が實際盲目になつて居たかどうか大いに疑ふので、たこへば靴に眼があるさいつても信じないと同様である。私の意見はかうだ。これはトツパアミスクルーシの甥の間に々々約束のできた仕事で、「現在クリスマス」は萬々承知のここのに違ひない。トツパア君がレス飾をした例の丸ぼちやを追ひ廻す風さいつたら、人が知るまいと思つていかにも馬鹿にした仕方だ。爐具火器を叩き倒したり、椅子を轉がしたり、ピアノに衝當つてホーンを呻らせたり、窓帷の間に潜り込んだり、丸ぼちやの赴く處彼赴かざるなしなのである！彼は丸ぼちやの居る處を常に知つて居る。他の人は誰をも決して掴まない。若し諸君が故意に彼に衝當つて見ても（誰やらやつたやうに）、彼は諸君を掴まへやうと努めるやうな振を見せて、諸君の理解力を見くびつた仕打をして、忽ち丸ぼちやの方へ反れて行くだらう。娘の方ではするいゝと幾度も吐鳴つた、いやまつたこのころするいのであつた。然しながら、遂に彼は娘を掴まへた、しきり絹の着物をばさく鳴らし、びらくさ飛び動いたにも拘らず、彼は娘を逃路のない隅へ追ひ寄せた。其時の彼が行爲は實に憎むべく呪ふべきだ。彼は娘をわざと知らんふりをした。髪飾物に觸つて見てなほ足れりさせず、指に箝めた指環を押へて見、頸にかけた鎖を押へて見ていよく當人に相違ないことを確めたなんかは、あまりにひどい、あまりに怪しからん！今度は他の盲目が鬼になつてやつてる最中の二人は窓帷の蔭で甚だ以てひそくやつて居た、おそらく彼の鬼さしての行爲に就いて娘が

意見を述べて居たのだから。

スクルーシの姪は盲目鬼ごつくの群に入らず、大きな椅子と脚臺を占領して心地よげにして居た。そのほつかりの氣持い、一隅には幽霊ミスクルーシが彼女の傍に立つてるのだ。然し賭事になるま彼女に群に加はつてアルファベット二十六字を以てめざましく勝負をやつた。同様に「何故、何時、何處」の當ても遊戯に於ても、彼女は非常に立派にやつて、亭主はひそかに心を躍らしたがいもさだち妹達をすつかりやつつけてしまつた。尤も妹達だつて剛巧なもので、この事はトツペア君に訊けばわかる。そこには老若合せておよそ廿名の人居た。それが残らず遊戯に加はるのだ。スクルーシもつひ一じよになつてしまつた。皆のやつて居るこがあまりに面白いで、自分の聲の皆の耳に何の響も傳へないさいふこも忘れてしまつて、時々聲張上げて當事を叫んだ。それもよく旨く當てた。何しろワイトチャベル本場出來の最上等の、眼の折れるこさなしと保證の附いた針でも、スクルーシ程鋭敏ではないのだ、尤も彼がこの際これこれと思ひ付いたのは無作法(なまくら)だつた。

幽霊はスクルーシがかく上機嫌になつたのを見て大いに喜び、いかにも優しい顔で彼を見たので、彼は客の散するまでこゝに居らせてくれま子供のやうに頼んだ。がそれはできないさ幽霊は言つた。「また別な遊戯が始まつた、スクルーシは言つた。もう三十分、幽霊さん、たつた三十分だけ！」

それは「然り否」さいふ遊戯でスクルーシの甥が何か物を胸に思つて居るこ、他の人々がそれを當てるさいふのだ。甥は其場合に應じて間に然り否で答をするだけのこ。彼に向けて放つ間斷なき質問の矢で次のこがわかつた。彼の考へて居るのは、一疋の動物である、生きて居る動物である。何れかさいふに厭らしい動物で、野蠻な動物、時に呻つたり吼えたりする動物である。時には話すこもある、倫敦に住んで、街をほつつき廻る、が觀世物にされるのではない。それに誰に引張り廻されるさいふでもない、野獸園に住んで居るのでもなければ、市場で屠られもしない。馬でなし驢馬でなし、牝牛でなし、牝手でなし、虎でもなければ、犬でもない、豚でなし、猫でなし、さて熊でもない新たに質問が出る毎にこの甥はどつさ新たに吹き出すあまりにくすぐつたくてをかしくてたまらず、さうく彼はソーファから起ち上つて地んだを踏んだ。やがて丸ぼちやの妹が、これまた笑ひこけながら、叫んだ!

「わかりましたよ! 何だかわかりましたよ兄さん! 何だかわかつたわ!」

「さあ何だ?」クレッドは言ふ。

「あなたの伯父さんのスクルーシーウーウーウー」

それはたしかにそれに違ひなかつた。讚嘆の喝采は全體の意向として起つた。があるものは故障を唱へ出した。それは「熊ですか?」この質問には「然り、こ答が出なければならん筈ださいふのだ

見詰めながら訊れた、「どうもあなたの裾から妙なものが、あなたの身に着いてるのではない妙なものが突出て見えますね。そりや足ですかい瓜ですかい？」

「瓜も見えらだらう、それに附いてる肉から推すさな、」幽霊の憂を含む答はかうだ。「こゝを見なさい。」

着物の襷から幽霊は二人の子供を引出した。みじめな、みすばらしい、氣味の悪い、醜い、あはれな子供だ。彼等は、幽霊の足元に跪いて着物の表に縋り着いた。

「おい、こら、こゝを見る！見る、見る、下を見る！」幽霊は叫んだ。

それは男の子と女の子であつた。黄色で、ひねこけて、襤褸々々で、澁つ面で、狼のやう、そればかりか、ひどい下卑さ加減でべたべた地面にへたばつて居る。優雅なる青春がその顔面に漲り、鮮かな色艶かな顔色を染め出すべきところに、老人の手のやうな血の氣のない皺苦茶の手が其顔を捻つて振つて、細片に引き裂いたやうである。天使が祭り上げられてあるべきところに、悪魔が潜んで、脅かすやうに睨め廻して居る。いかなる變化もいかなる墮落も、いかなる階級のいかなる人間の敗壞も、不可思議なる造化のあらゆる神秘を以てして尙且この子供達の半分も恐ろしい淺間しい怪物を出来し得まい。

スクルーシは度膽を抜かれて飛び退つた。かゝる具合に切角見せつけられたので、彼は綺麗な子供

達だと言はうさはしたけれども、言葉はぐつと詰つてしまつた、まさかにそんな大袈裟な虚言に驚するわけにはいかぬので。

「幽霊さん、あなたのお子さん達ですか？」スクルーシはやつとこれだけ言ふことができた。

「人間の子供ぢや、」子供等を見下しながら幽霊は言つた。「そして自分の親達から離れて助を求め、俺に縋るのだ。この男の子は無知、女の子は貧窮だ。この二人によく氣を付ける、珠にこの男の子に用心しろ、それ類には亡滅なるものが書かれてある、消し去られない限りは。そんなものはない

と言ふなら言つて見ろ！」幽霊は都の方へ手を伸して叫んだ。「亡滅があるさおまへに言ふものならば罵つて見ろ！おまへの反逆の目的のためさあらばそれあることを認める、そしていよく悪くしろ！而して最後を待て！」

「二人は身の置所も衣食の道もないのですか？」

「監獄があるぢやないか？」幽霊はこれを最後にスクルーシの方を向いてスクルーシ自身の言葉を使つて言つた。「養育院があるぢやないか？」

鐘は十二時を打つた。

スクルーシは幽霊の姿を求めて見廻したが、見えなかつた。最後の鐘の音が震ひ止むと、彼はシヤロブ・マアレエの豫言を思ひ出した、そして眼を上げるさ、仰々しい幽霊一人、身を布に裹み、

頭に頭巾を被り、霧のやうに地を這つて彼の方へ来るのを見た。

四 最後の幽霊

幽霊は徐かに、殿かに、音もなく近付いた。近くまでやつて来る。スクルーシは地べたに跪いた。さいふのも、この幽霊が徘徊するあたりの空氣そのものが、憂鬱と神秘さを發散するやうに思はれたのである。

幽霊は眞黒な着物にくるまつて居る、その着物は差伸べた片手の外はその頭も顔も、その姿もすっかり蔽いかくして、何一つ見えては居ない。この片手がなかつたなら、その姿を夜から離して見ることも、つゞまれた暗から見分けることも、頗る困難であつたらう。

幽霊が側に寄り添うた時、スクルーシは丈の高い堂々威嚴のあることを感じた。そしてその不思議な現出が嚴めしい氣味悪さを抱かせるを感じた。彼はそれ以上何も知らなかつた。幽霊は口もきかなければ動きもしないのであつた。

「わしは未來のクリスマスの幽霊にお目にかゝる光榮に浴するわけでございますか？」スクルーシは言つた。

幽霊は答へなかつた、が其手で前方を指差した。

「あなたは未だ起らない、これから未來に起らうさいふ事の幻を見せて下さるさいふのですな、」スク

ルーシは更に言葉を次いだ。「さうですか、幽霊さん？」
着物の上部が襷のところでちよつとの間縮んだ。宛も幽霊が頭をかしげたやうに。それがスクルーシの受けた唯一の答である。

この時までには幽霊のお連れに大分馴れて居たにも拘らず、スクルーシはこの押黙つた幽霊が非常に怖ろしくて、その脚はふるふるに慄えた。そして幽霊に随いて行かうとしたがさて殆ど立てない始末である。幽霊はこの有様を見てしばし足を止め、力を回復するまで待つてやることにした。

然しスクルーシは待つて居られるさ尙更いよく耐らない。どす黒い着物の後には、自分をじつと見据えた氣味の悪い眼がある、と思ふと漠として得體のしれぬ恐怖が全身に浸み渡つた、と同時に、自分の眼玉をあらん限り精を出して見張つたが、幻のやうな手と黒い大きな推塊の他何も見ることはできかつた。

「未來の幽霊さん！」彼は叫んだ。「わしはこれまで見た何の幽霊よりもあなたが怖くてなりません。けれどもあなたの目的なるものは、何ぞわしの益になることをなさうさいふのでせうと、わしこそこれまでさまるで生れ變つた別人になつて暮して行かうさいふのでございませうから、わしはお伴いたす覺悟で居ります。有難いと思ふ心でお伴をいたします何さかおつじやつて下さいませんかね？」
幽霊は何とも答へなかつた。手は眞直に前方を指して居る。

「案内をなすつて下さい！」スクルーシは言つた。「案内を！夜が見るく更けて行きます、わしにさつちや大切な時間ですからねえ。さあ案内を幽霊さん！」

幽霊は彼の方へ来た時と同様に動き出した。スクルーシはその着物の影を踏んで随いて行く、どうやら影が自分を支へて運んで行くやうに思はれた。

兩人は倫敦の市中へ殆ど入つて行つたことも思はれずに入つてしまつた、さいふのは市街がふたりの身邊に湧き出て、其自身の働でふたりを裏んだやうに思はれたのである。さはいふものゝ兩人は已に市の中央に居るのだ。株式取引所のあたりで、周圍には商人の群、或は忙しく歩き廻り、或はポケットに金をちやらかせ或は群れ集つて談合し、時計を見たり、大きな金の印鑑を思案顔で弄つて居るやら、其他様々であるが、スクルーシは屢見馴れた光景である。

幽霊は商人のある一つの小さい群の傍に立止つた。その手がこれらの商人を指して居るのを見るにスクルーシはその人達の話に聴耳を立てた。

「いや、途徹もない大きな顎の肥つた大男が言ふ、「私はいづれにせえその事はあまり深く知らぬのだがね。彼奴が死んだつてこそだけ知つてるんで。」

「何時死にましたな？」他の男が訊く。

「昨夜ですよ、たしか。」

「はてな、一體どうしたんでらう？」も一人他のが、訊れる、ばかに大きな嗅煙草入から嗅煙草をうんと掴み出しながら、「あの男は死につこないと思つてましたにね。」

「どうも解らんですよ、」欠伸まじりに最初の男がいふ。

「金銭はどうしたんだね？」鼻の尖に七面鳥の雄鳥の願肉のやうにぶらくする瘡を下げた赤顔の男が訊く。

「何とも聴かんのだが、」大きな顎の男再び欠伸をして、「大概自分の商會へ遺したのだらう、さにかく私には遺してくれはせん。私の知つてるのはそれだけです。」

この諧謔を聞いて一座の面々はどつと笑つた。

「甚だ安直な葬式らしいね、」同一の話し手がいふ、「だつてね、誓つて申し上げてもいゝが、私は葬式に行くつて人を一人も知らないのです。私達が一隊を組織して、志願兵つてここにしたらどんなものですか。」

「晝飯の御馳走があつても私なざあどつとさせんや、」鼻の上の瘡先生が言ふ。「然し隊に加はるさおりや御馳走をやらなくちや承知しませんかね。」

またどつと笑ふ。

「さゝらで、私は皆さんの中で一番清廉したもんですよ、結局ね、」最初の話し手が言ふ、「何しろ私は

黒手袋を穿めたこともないし、晝飯つてやつもやつたことがないんだからね。然し誰か行くつてんなら参りませうよ。考へて見るつて、私は一番親密な友達でなかつたさもあるで思はれないんでね、出會つた度毎に足を止めて話をしたんだから。さよなら！」

話し手も聴き手も歩き去つて、他の群に入つてしまつた。スクルーツはその人々とは知合つて居たので、説明を聴きたいと思つて幽霊の方を見た。

幽霊はさなり街へ近づつて行つた。その指は立話をして居る二人の人の方へ向いて居た。スクルーツは、説明がこゝで聴かれると思つて耳を時てた。

彼はこの兩人をもよく識つて居る。共に實業家で、非常に金持の、重要な人々であつた。彼は常に彼等から愛顧を受けることを後生大事に努めて居た。勿論實業方面のこゝ、嚴密に商買上の點に於て

「御機嫌よう、」一人がいふ。
「御機嫌さま、」二人がかへす。
「時にれえ！」前のがいふ。「引掻き爺さんさうく、行き着いたやうだね、へえ？」
「そんな話かれ、」第二のが答へた。「寒いぢやありませんか？」
「クリスマス時節として順當だれ。あんた氷滑りはおやりぢやないですか？」

「いゝえ。いゝえ。考へるこそが他にありませぬ。さよなら。」

話はそれだけ。これが二人の會合であり會談であり、訣別であつた。

スクルーシは最初の程は幽霊が見るころかくも些末な會談を重く見るのがどうも腑に落ちなかつたが、その會話は何か秘れた意義が籠つて居るに違ひないと思つて、彼は隠れた意味は一體どんなものだらうか、考へ始めた。そはとうしたつて自分の古い同僚なるシヤコフの死さいふことは、何の關係もありさうにない、何故さいつたつて、あれは已に過去だし、この幽霊の領分は未來なのである、だからさいつて、自分に直接の關係ある人でこの話が當て箝りさうなのはどうにも思ひ當らない。然しながらその話が何人に當箝まらうと、それは自分の改善にある隠れた寓意のあることは信じて疑はれないのであるから、彼は聞かされた一言隻句も、見せられた一事一物もゆるがせにせずに保存しやうと決心した。そして若し自分の姿が表はれたら、殊更に注意して見やうと決心した。さいふのは未來の自身の行狀次第で、見失つてしまつた導線を見出され、これらの謎も容易く解けるだらうと思つたのだ。

彼は自分自身の姿を求めて其場處をきよろくして見廻した。が誰やら彼の人自分が自分の平常立ちつけた隅に立つて居る、そして時計が自分の其處に居るべき時刻を指して居るに拘らず、彼は玄關から入つて來る多勢の中に彼自身らしい姿を見ない。然しながらスクルーシはそれにあまり驚きはしない、

さいふのは、彼は心中に生活の更新を決めこんで居たので、この事に彼の新しい決心が實現されて居るのだと思ひ且希つた。

じつと靜かに黒々とし、手を差伸べたまゝ、幽霊はスクルーシの傍に立つて居た。彼が思案穿鑿から醒めて見るさ、こはいかに、手の方向こそが自分に對する位置によつて察するに、幽霊の眼に見えぬ眼が彼をきつさばかり睨んで居たのだ。全身はわななくと慄え寒さはいやに身に浸みるのであつた。

兩人はこの雜鬧する場處を去つて、市中でも寂びれた場所へ入つて行つた。そこはスクルーシがこれまで一度も覗いたことのないところだ、尤もその位置と評判の悪いことはわかつて居るが。往來はむさく狭く、店も家も破れかぶれ、人間は裸かで、よいどれで、だらしなく、みつともない、路次さくより路は、多くの下水溜のやうに、臭氣と塵芥と人間さをこたくした街道へ吐き出す、そして區内全體が罪惡と、不潔と、窮迫とでくすぼつて居る。

このけしからぬ魔窟のすつと深く入り込んだ中ほどに、葺卸の庇を被つた低いつぶしや店がある。そこには鐵物、襪襦、空壇類、骨、それから脂肪穢い屍體などが買ひ込まれる。床の上には、腐蝕つた鍵、釘、鎖、蝶番、鏢、衡器、分銅、それにあらゆる種類のすたれた鐵器が積み重ねられて居る。吟味するも厭はしいやうな秘密が、きたならしい襪襦や、腐り切つた脂肪の塊や、骸骨の墳墓の山なす中に養はれ匿されて居るのだ。自ら商ふかゝる品物の中に、古煉瓦製の木炭使用の暖爐を傍にして

およそ七十歳と見える白髪頭の無頼漢が控へて居る。綱を渡した其上に種々雑多の襪襦布を下げて臭紛々窓帷を引いたつもり、それで戸外の寒風からその身を圍ひ、落着き拂つた退隱の氣持よろしく烟草を吸つて居る。

スクルーツと幽霊が、この男の前に立ち現はれると同時に、重さうな荷物を持つて店の中へさすべりこんだ。また其女が店へやつこ入つたといふばかりに、同じやうに荷物を背負つたも一人の女が入つて来た、するそ其後から色の襪めた黒い着物に身を包んだ男が入つて来た。女二人がお互に顔を合せあつさばかり驚愕したと同様に、男は女達を見てこれはさばかり仰天した。しばらくの間はたいただあきれてどきまぎするばかり、パイプを嚙へた爺さんまで一しよになつて驚きあきれて居たが、やがて三人は一時に吹き出して大笑ひをした。

「第一に入つて来たんだからこの日傭女だけ先にしてくんあね！」最初入つた女が言つた。「この次に洗濯屋のおかみさんをひさり、それから葬儀屋のおんちをひさり第三番目つてわけにね。爺さん、まあ考へてごらんよ、ほんさにふしぎな機會ぢやねえか！三人が一しよにまるでそのつもりもなしにかうして面合わせるつてのあ！」

「何處で會はうたつておめえ俺んごごらぬいゝ處ありやしねえな、」と老爺さんは口からパイプを取つて言つた。「まあ客間へお通りよ。遠から遠慮のねえ仲ぢやねえか。ねえおい、それに他の二人だつ

て知らぬえ顔ぢやなしさ。あつさ店の戸を閉める迄待つてくんな。あーいやにぎくしやがるな！

この蝶番みてえに錆びくさつた金物あ店中搜したつてありやしねえ、ほんさにさ、ごころでこの店にや俺の骨ほど古い骨もれえからなあ。はーはー俺達はみんなこんな商賣に向いてら、いゝ取組さあれ、さあ客間へお通り。客間へお通り。」

客間さいふのは襪襦の仕切のうしろにある空所なのだ。爺は古い鐵棒で戸を搥き集め、それから、煙管の柄でくすぶつたランプ（夜だつたので）の心を直し、また煙管を口に嚙へた。

爺さんがこんな事をやつて居る間に、その包を已に三個程床の上に投下した女は、いやに容態振つた様子をして腰掛にしなくなさ掛けた、そして兩肘を膝の上にあづちがいにして、他の二人を恃ぢず臆せず喧嘩面で睨め廻はす。

「その位のこと、何いふことがあるもんかね？何つてこそもないぢないかね、デイルバアのおかみさん？」その女は言つた。「誰だつて自分様の都合のいゝやうに取計らつていゝんでさあ。あの爺さんなんかいつだつてその通りぢやありませんかい！」

「その通り、それに違はありやせんともれ！」洗濯屋の女は言つた。「あの爺さんより上手はありやしませんさ。」

「おや、そんなられ、そんなにじろくしながら立つてぬないがいゝさ、まるでびくく怖がつてる

つて言はないばかりに、おまへさん！誰だつて同じこささ！お互ひに弱點を探しつこはしないんだらうね、まさか？」

「そりやさうさ、まつたく！」デイルバアのおかみさんも男も合槌を打つ。「そんなこさはしたくないものさね。」

「そんなら結構、ねえ！」女は叫んだ。

「それで充分だわね。こんな下らないもんを二つや三つ失くしたつて誰が困るもんかね。死人が困るつてこさもあるまいしね、まさか？」

「さんでもない、ほんまに！」デイルバア夫人はわらひながら言つた。

「死んだ後で、こんなものを利がれずして持つてたいつていふのなら、あの實地悪のしわんぼ爺奴、女はなほ言葉を續けて、「生きてる間に何故人並なこさしれえんでえ？相當にさへしておきやあ、いざお佗佛つて時、面倒を見てくれる筈さあれ、たつた一人で、呼吸を引き取つてしまふなんてこさはありやしれえさ。」

「さうその通り、それより眞實はありやしない！」デイルバアおかみさんは言ふ。「これがあの男の受ける天罰つていふやつだあれ。」

「も少し重い天罰だつたさい、と思ふけれど、」女は答へた。「何か他の品に手をかけるこさができる

んなら、全くの話がさ、そりやもつと重罰になつたわけなんだけれどねえ。その包を開けなよ、爺さん、その値段を聞きてえもんだ。むきだしに言つてくん。あたしやいの一番になるのを怖がりやしない、それに見られたつて怖いこさありやしない。こゝで會はれえ前からお互ひに腹を肥やして來たのは、御承知だもの、ねえ。ちよつとも罪なこさちやありやしれえさ。包を開けて爺さん。けれども他の二人の圖々しい意氣込がなか／＼それをさせはしない、するさ羊羹色に身を包んだ男が、眞先に隙を乗り越越え、自分の分捕品を展げた。大した量のものではない。印章一つ二つ、鉛筆差し一つ、袖口釦子が一組、それさあまり價のいゝものでない胸針が一個、みんなでこれだけである。爺さんは品々を一つ／＼驗べては値踏みをする、そして各個に拂はうとする金高を白墨で壁に記し。いよくそれ以上に何もないのを見るさ總、高を書き添えた。

「これがおめえさんへのお勘定、」シヨオ爺さんは言ふ、「これでかつきりだぜ、煮られたつて俺これよか一文も出しやしれえんだぜ。次は誰だい？」

デイルバアのおかみさんがお次の番だ。敷布と手拭、ちよつとした衣服が一枚、舊式な銀の茶匙が二本、砂糖箸が一組それに長靴が二三足。おかみさんの勘定も前同様に壁に記し付けられた。

「俺はどうもいつも御婦人の方を高く買ひ過ぎていけねえ。それが俺の弱點だよ、これで俺は身代を潰しちまふのさ、」シヨオ爺さん言ふ。「それがあんだの勘定だ。もう一錢でもこの上くれなんか

言つて、取極めの濟まぬ勘定にしこくもんなら、俺は大まか過ぎたのを後悔して、一兩ぐらゐ減らしてしまふぜ。」

「まあこんどそあたしの包をお解き、お爺さん、第一の女は言ふ。」

シヨオは開けるのに具合がいゝやうに、兩膝を折つて立膝になつた、そして澤山の結び目を解いて、何か黒つばい反物の大きい重い巻を引つぱり出した。

「こりや何てもんだね？」シヨオ爺さんは言ふ。「寢臺の帷かね？」

「あゝ！」女は笑ひながら組んだ腕の上へ乗り出すやうにして答へた。「寢臺の帷だよ！」

「死人が轉つて居るここを、輪も何も一しよくたに、外して來たつてんぢやあるめえな？」爺さんは言ふ。

「さう、さうなんさ、」女は言ふ。「何もふしぎやないぢやないか？」

「おまへさんは財産を貯めに生れて來たんだなあ、爺さんはいふ「きつこ金持になるに違ひれえ。」

「あの男みてえな奴のためさありや、手を伸ばして何か取れるものがあるなら、手を引込めて居るもんかね、まつたくさ、お爺さん、」女は冷然と答へた。「油なんぞ毛布へ垂らしてくれちやいけないよこれさ。」

「あの男の毛布かい？」お爺さんは訊れた。

「あいつのぢやなくて誰のものかね、」女は答へた。「死んでしまつたんだから毛布がなくても風邪は引きつこはありあしないや、れえ。」

「まさか傳染する病氣でくたばつたのぢやあるまいね？えゝ？」爺さんはその手を止めて上を見上げながら言つた。

「そんな心配は無用さ、」女は答へた。「傳染病で死んだんなら、こんな物を手に入れるために、あいつのあたりをうるゝする程あたしやあの爺さんに思ひをかけては居やしないさ。あゝその襯衣なら眼の痛む程見透かして見るがいゝ、孔だの磨れたさこだのは一つだつてありやしないから。こいつはあいつの持つてたのぢや一番の上等なのだよ、さにかく立派なもんさね。あたしつてもものが行つたからいゝやうなものゝ、あたしが居なかつたら、みんなしてつまらないここに使つちやつたらうよ。」

「つまらないここに使つちまうつて一體何のこを言つてるんだい？」シヨオ爺さんは聞いた。

「こいつを着せて埋めてしまふだらうつてこささ、きつこさうだよ、」女は笑ひながら答へた。「誰だか、阿呆にもう着せて埋めにかゝつたんさ、けれどもあたしやまた脱がせてやつたのよ。着せて埋めるつてなこさにや、金巾で澤山、それがいけなきや金巾の用ひどこがないやね。肌に着けるにや金巾が柄に合つて結構さ。金巾の肌着を着た時より彼奴が悪態に見えるこさはないかられ。」

スクルーシは恐れ戦きながらこの對話に耳を傾けた。これらの人々が、老翁のラムプの薄ら暗い光を受けて、その分捕品のまはりに寄つ聚つて居る様を見るに、その面憎さ無氣味さ、彼等が淫らな悪魔で、死骸を賣捌いて居るさしてもこれほどではあるまいと思はれるのだつた。

「は、は！」爺さんがフランネルの財布を引出して、各自の勘定を地べたへ並べ敷へるに、例の女は笑つた。「これがあいつの身の終り方さ、れえ！生きてる間にやたら他を脅かして近寄せなかつたもんだから、死んだ時にはこつちと等が金儲けをするこゝになつたんさ！は、は！」

「幽霊さん！」スクルーシは頭から足までふるふるさ慄えながら言つた。「なるほど、なるほど。このふしやばせな男の様態が、私自身のこゝかも知れませんか。わしの命はもう死ぬ方へさ向つさるのです。南無々々、これは一體何事だ？」

彼はびつくりして飛び退つた、光景ががらりと變つてしまつたのだ、今や彼は殆ど寢臺に觸りさうなのだ、むきだしの帷もない寢床で、その上には、ぼろ／＼な布一枚の下になつて、何ものか、包まれて横はつて居る、押黙つて居るがその何物であるかは鬼氣迫る言葉で告てるやうなものだ。

室は非常に暗く、何物もはつきりは見えない程に暗い、而もスクルーシは、それがいかなる部屋かを知りたさのあまり、見ろ／＼さばかりそつと衝かれるやうな氣がして見廻はした。蒼靄めた光が外面からすつと差し込んで、寢床の上をまともに照らした、するこその上には、剥ぎ取られ奪ひ去られ

介抱られもせず、泣いても貰へず、構つても貰はれずに、この男の死骸がころがつて居た。スクルーシは幽霊の方を見た。こそその緊かとした手が屍の頭を指差して居る。掛布はまるで無頓着に安排されて居るので、ちよいと揚げるか、スクルーシがちよいと指を附けるかすれば、顔が

こり／＼出るであらう。彼はさう思つた、手を出せばほんに容易いと思つた、して見たいと思つたが傍の幽霊を退けるも引くもできないやうに、掛布を引張るこゝもできなかつた。

お、冷たき冷たき、嚴しくも怖ろしき死よ、汝の祭壇を此處に立てよ、汝が意のままなる恐怖もてその裝飾せよ、此處こそ汝の領域なのだ！然しながら愛敬せられ、尊敬せられ、尊重せられる人の頭よりは、汝はその怖ろしき目的のために、一本の髪の毛たりも自由にすることにはならぬ

のだ、目鼻の一つをも厭はしくすることにはならぬのだ。手が重いといふのではない、離せば垂れ下るさといふのではない、動悸や脈搏が靜かだといふのではない、その手が大量で、寛大で、誠實で、情が勇敢で、溫良で、優雅なのだ、そして脈搏が男らしいのだ。切つて見よ、死よ、突て見よ！そして善行がその傷口から芽生えて、不朽の生命を世界に蒔くのを見よ！

いかなる聲もこれらの言葉をスクルーシの耳へ述べ立てて居るのではない、而も彼は寢床を見る時その言葉が聞えるのだ。彼は考へた、若しこの男が今甦らされたなら、眞先に胸に浮べるこゝ

は何だらう？貪慾、酷悪な取引、金錢虚取算段、こんなこゝろか？これらの悪徳が此男を立派

な最後に連れて来たさいふものだ、まつたくー

この男は、暗い空虚の家の中にひそり轉がつて居るのだ、この男はこれこれの事で親切だつたと言つたり、かくかくの親切な言葉をかけて呉れたのだから親切にしてやらうと言つたりするやうな、男も居なければ、女も居ない、子供さへも居ないのだ。一疋の猫が戸をがりくま引掻く、暖爐石の下では鼠共が物を噛む音がする、猫や鼠は死の部屋に何を欲しがらうのだらう、彼等は何故にかくもそはくま落着かないのだらう、スクルーシはこれらの事を考へやうまじなかつた。

「幽霊さんー」スクルーシは言つた、「こりや恐ろしい處ですれ。此處を去つたところで、わしはこの場の教訓を忘れやしませんよ、まつたくだ。さあ他處へまゐらうではありませんかー」
なほも幽霊は手を移さず死人の頭に指を向けて居る。

「あなたのお志はわかりました、」スクルーシは答へた、「出来ることならそりや致しませう。けれども力がありませんよ、幽霊さん。とても力がありませんよ。」

幽霊はまたもスクルーシを睨んで居るらしい。

「この男の死んだことに對して、嬉しいさか悲しいさか、感じた人が、この倫敦の市中で一人でもあるならば、」スクルーシは非常に悶え苦しみながら言つた。「その人をわしに會はせて下さい、お願いですかられえー」

幽霊はやゝしばしスクルーシの前にその墨染の衣を翼のやうに擴げた、そしてそれを引込めると日中の光に照らされた一室が現はれた、それに母親と子供達が居るさいふ光景。

母親は誰かを待つて居るのだつた、而も氣懸りでたまらぬさいふやうな本氣の色を見せて待つて居るのだつた、彼女は部屋をあちらこちらま歩き廻つた、ここんさいふ物音にもぎくりとした、窓から外を覗いたり、時計をちよいと見たりした、針を運ばさうと努めるがそれも意のままにならなかつたとして遊び耽つて居る子供達の聲すらも耳障りになつてなかくに我慢がでないのであつた。やまつのこゝで待ちに待ち詫びた戸槌の音が聞えた。母親は玄関へ飛でん行つて、その亭主を迎へた、亭主さいふのは、まだ齡も若いのに、顔が苦勞で蹙れ、元氣の挫けたすがたである。こゝろが今はその顔に常に似ない異様な顔色が見えて居る、まじめな歡びさいふやうなものであるが、外へ現はすのを耻ぢて、抑へやう制へやうとして居るやうに見える。

彼は爐の傍に用意されてる、御馳走を喫べにかゝつた、そして、女房が聲もおろく聞えぬほどに、どんな事になつたか訊れるさへ（それもやゝしばらくの沈黙がついた後のこゝろ）、亭主はどう答へていゝものかと當惑した様子である。

「いゝ方なの、」女房は言つた、「それとも悪い方なの？」答を促すつもり。

「悪い方だよ、」亭主は答へた。

「ちやあたし達はいよくすつかり潰れてしまふのれ？」

「いや。まだ望があるんだよ、カロリン。」

「あの奴が佛心を出してくれたら、女房はあきれたといふやうに、」そりやありますさ！どんなことだつて望が絶れてしまつたつてことはありません、そんな奇蹟が起るなられえ。」

「佛心を起すどころか、もうその先へ行つてるんだれ、亭主は言ふ。「あの男は死んだんだよ。」

女房はやさしい我慢強い女である、その顔立が眞實を語るものとすれば、さはいへその死を聞いては心中有難いと思はざるを得ず、手を握り合せてつい有難いさ叫んでしまつた。が次の瞬間には悪いことをしたと神の怒しを乞ひ、氣の毒なことをしたと思つた、然し最初の有難いさといふ心持が心の底の情緒であつたのだ。

「あの生酔の女、それ、昨夜おまへに話した女さ、俺があの男に會つて一週間の猶豫を貰はうとした時にあの女が言つたこと、俺に會はせまいための單なる口實に過ぎんと思つたことが、全く眞實のこゝろになつてしまつたんだ。その時已にあの男は大へん悪かつたばかりでなく、もう蟲の息だつたんだよ。」

「して見るさあたし達の借金に誰に拂ふことになるのでせう？」

「わからんれ。けれども、それが決まるまでには、俺等だつて金が出來らあれ、よしまた出來ないに

したこゝろで、あの男よりも無慈悲な債權者がその後釜に座はるなんてことは、よつほどな悪い風の吹き廻しでなきああるまいで。俺達は今夜安心して眠れるといふものさ、カロリン！」

げに然り。喜んでではならぬと心を制へて見ても、彼等の心は晴々々々浮々した。何事か解からぬまでも静かになつて周圍に集つて話を聽いて居た子供達の顔までが牙々しくなつた、だからこの家はこの男の死んだために幸福になつたのだ！この事件のために起る感情で、幽霊の示し得る唯一のものは、歡喜のそれであつた。

「死といふものに繋がる愛情といふものを見せて下さらんかえ、」スクルーツは言つた、「でないさあの眞暗な部屋が幽霊さん、それ、わし達が今出て來た、あいつが一生わしの眼に映つていけませんや。」

幽霊はスクルーツが歩き慣れて居る街々を通つて彼を連れて行つた、そして過ぎ行くまゝに、スクルーツは自分の姿を見出さうとそこち見廻はした、が何處にも自分は居なかつた。やがて兩人はポツプ・クラチット書記の家へ入つた、その家は前にも一遍訪れたことだ、そして母子子供達が爐の傍にぐるり座つて居るのを見た。

静寂。極めて静寂。例の騒々しい子供等も一隅に像のやうに静かにして居る、そして書物を前に擴げて居るピーターを見上げてゐる。母親と娘達は縫物をして居る。さはいへまゝこゝに彼等は極め

て静肅にして居るのだ!

「イエスは一人の幼児を手にしたまひて、これを數ある徒弟の間におきたまへり。」

これらの言葉をスクルーツは何處で聞いたか? 夢にこれらを見たのではない。彼が幽靈が闘を跨いだ時に、ピーターが讀んだに違ひない。何故に彼は續けて讀まぬのだらう?

母は卓子の上に仕事をおいて、顔に手を當てた。

「灯の光のおかげに眼が痛いのだよ」母親はいふ。

灯の色? あゝ、あはれちびのタイムよ!

「もう大分癒りかけたよ、」母親は言つた。

「蠟燭の光は大さう眼を悪くしますよ、それにしても母さんは泣顔を父さんに見せるのはいやだよ、

何事あつても、父さんのお歸りだつてのに。さういへばもう間もなくお歸りの時刻だね。」

「もう時刻が過ぎて居る位ですよ、」ピーターは書物を閉ぢて答へた。「父さんはこの頃二三日さういふもの

平常より遅くお歩きのやうですれ、母さん。」

彼等はまたしめやかになつてしまつた。やつこの思ひで母親は言つた、しつかさした愉快さうな聲で、たゞ一度聲は消えさうだつたが。

「母さんは、父さんがちびのタイムを——ちびのタイムを肩に載せてほんまに大さう迅速く歩くの

を見ましたよ。」

「え、僕も見ましたよ、」ピーターは叫んだ。「何遍も見ましたよ。」

「けれどもあの子はほんまに輕かつたから、」仕事に熱心を填めながら母親はいふ。「それに父さんはそれはあの子を可愛がつてゐらしたつたから、何の苦にもならなかつたのだね、少しの苦にもならなかつたのだね。おやお父さんがお歸りだよ!」

母親はそゞろさき走り迎へた、小柄のポツプは襟巻にくるまつて——彼は襟巻がなくてはかなはぬのだ、かわいさうに——入つて來た。茶は爐の上に用意ができて居た、で子供達は誰が一番よく注いで上げるかさみんな先を争ふ。するさ二人の子供達は父親の膝の上にあがつて、いづれも、小さな頬を顔に當て、「力を落してはいや、父さん。悲しがつてはいや!」と言つてるやうだ。

ポツプも子供等のために非常に元氣が出て、家の誰彼なしにこゝろよく話しかけるのだつた。彼は卓子の上の仕事を見て、女房と娘達のよく精が出るこゝ腕の達者なこゝを讚めそやした。日曜に

ならない中にもつさ早く出來上るだらう、と彼は言つた。

「日曜ですつて、ちやあなた今日いらしたのですれ、ロバート?」と女房は言つた。

「行つて來たよ、おまへ、」ポツプは答へた。「おまへ達も行けたんならよかつたと思ふよ。草が青々さ生えて、いゝ場處になつたのを見たらおまへ達にも慰めになつたらうと思ふがな。けれどこれから度々行

くことだらうけど。俺は日曜毎に行つてやる約束をあの子にして来たよ。かわいさうな、かわいさうな子供だなあ！」ポツプは叫んだ。「かわいさうな子供だ！」

彼は一時にぐったり萎れかへつてしまった。彼はとてもこの子の死を耐へることができないのだ。若し彼にしてそれが我慢できるのだつたら、彼はこの子供さはおそらく、實際よりもすつと離れ離れになつて居たであらう。

父親はその部屋を去つて、階段を上つて二階の部屋へ入つて行つた、其處は華々しく燈火に輝いて、クリスマスの裝飾がつけてあつた。亡見タイムの傍には一つの椅子があつて、しばしの前まで誰やらその椅子に居たやうな形跡がどこかに見えて居る。あはれポツプはそれに掛けて、ちよつと考へ込んで心を鎮めた擧句、小さい顔に接吻をした。彼はやがてかうなつた成行に斷念をつけたと見え、すつかり氣を取直して再び梯子を下りて行つた。

それから一家の人々は爐の周圍を取圍んで話をした、娘達と母親はなほも仕事を續けて居る。ポツプはスクールジの甥の驚くばかりに親切なことを語つた、その甥に彼はたゞの一遍しか會つたことのないのであるのに、今日、往來で邂逅うと、自分が少しばかり——「ほんの少しばかり元氣がないのさ、おまへも知つてるがね、」とポツプは念を押して——自分の元氣のないのを見るさ、彼は何がまあそんな心に惱ますことが起つたのか訊いた。「さう訊はれて見るさ、」ポツプは言つた、「あの方がそ

りや世にも稀な氣持のいゝ話し振の人なので、つい話してしまつた。するさ「ほんまに心から私は氣の毒に思ひますよ、クラチットさん、」かう言ふのだ、「心持のお優しくてゐらつしやる奥様にはんまに心からお氣の毒ですよ。」つてれ。そりやさうさ、あの方は俺が自分で氣のつかなかつたことをよく御存知なものぢやないか？」

「何を御存知ださおつしやるの、あなた？」

「なあに、おまへのやさしい女房だつたつてことをさ、」とポツプは答へた。

「それは誰だつて知つて居るんです、」とピーターと言つた。

「およく言つた、坊や！」ポツプは叫んだ。「みんなに知つて貰ひたいよ。」心からお氣の毒に思ひます、その方がかういふのだ、「あなたのお優しい奥様に。もし何に拘らず私で役に足りますなら、」名刺を呉れてかういふのさ、「此處が私の住んで居る處ですから、どうぞいらしつて下さい。」

「何もあの方が、」ポツプを聲を張上げて、「俺達に何かして下さるだらうつてんでさう悦しがるのぢやないさ、あの方の親切なやり方が耐らなくありがたんだよ。まるであの方がちびのタイムを御存知で、俺達と一緒に悲しんで下さるやうさ。」

「さぞお心の、優しい方でせうねえ！」とクラチットのおかみさんは言ふ。

「それはもうさうだとも、おまへ、」ポツプは答へた、「おまへも一度會つて話して見りやすさう思ふ

だらうぜ。あんな方だらう——俺の言ふことをよく聞きな——ピーターをいゝ地位へ引上げて下さるつてこそ、ちつとも不思議なことはないやれ。」

「まあお聞きつたら、ピーター、ミクラチツトのおかみさんは言つた。」

「さうにでもなつたら、娘の一人は叫んだ、『ピーターさんは誰かに結婚を申し込んで、獨り立ちになつて世帯を張ることでせうねえ。』」

「何とでも勝手におつしやい——ピーターはひゝゝ齒を露出して笑ひながらシツペイ返しに答へた。」

「今が今といつては、『ポツアはいふ、』さうならうともなるまいとまるで見當がつかんよ、兎に角それまでには可成時日があるさ、おまへ。さば言ふものゝ、どのやうにして、また何時、お互に離れ離れになつても、あのかわいさうなちびのタイムを忘れるやうな人は誰もあるまいと俺は信じるよ——どうだれ——またはかうして俺達の間についた最初の離別を忘れる人はあるまいと思ふよ。」

「決してそんなことがあるものですか、父さん！」と一同は叫んだ。

「それから俺は知つて居る、」ポツアは言つた。「あの小さい小さい子僧でありながら、あのやうに我慢強くて温良しかつたことを思ひ出したなら、さう矢鱈無性にお互に喧嘩をすることはしやすまい、そんなことを爲てかわいさうなちびのタイムを忘れるつてなことはしやすまい、さういふことを俺は心得てるぞ。」

「するもんですか、決してそんなことするもんですか、父さん！」と彼等はみんなしてまた叫んだ。

「俺は非常にうれしいぞ、」小柄のポツアは言ふ、「俺はほんさうにうれしいぞ——」

クラチツトのおかみさんが先づ父親を接吻した、次に娘達が接吻した、二人の子供達が接吻した、するさピーターと父さんは互に手を握つた。ちびのタイムが靈よ、汝が子供らしい心髓こそ神から別れ出たものである——

「幽霊さん、」スクルーシは言つて、「虫の知らせか何の知らせか知りませんが、どうやらわし達のお別れの時刻が近いやうに思はれます。どうもさう思はれるのです、然しどうしてさう思ふのだからそればかりませんが。さういふ譯ですから、あの死んで轉つて居た男が何者だか、知らせて下さいまし。」

クリスマス未来の幽霊は前の通り——さういつても何だか時日が違つて居るやうに思はれたが——スクルーシを連れて行つた、げにも、結果に近くなつての幻影には何等秩序さいふものがなく、たゞそれが未来の事だといふだけが解つてゐるのみであつた——今度連れて行つたのは商人の出入する街々なのだが、而も相變らずスリルーシ自身の姿は見せてくれない。まことや、幽霊は何物にぶつつかつても足を留めては居ないでぐんぐんと驚らに進んで行く、今欲せられる究極の場に向うやうである、かくして遂にスクルーシはしばらく足を休めてくれと頼み入るやうな始末である。

「わし等が今通つて行く路次は、」スクルーシは言つた、「こりやわしの事務所のあるところで、而も長

い歲月住んで居たところですよ。その家が見えますよ。さこれから先わしがどうなるか見せて下さらんかい。」

幽霊は足を佇めた、手は外の方を指して居る。

「わしの家は、それ、その向ふにあるんですよ。」スクルーシは叫んだ。「どうしてまあそんな途方もないさ指差してぬらつしやるんで？」

頑として動かぬその指は依然として何の變化をも示さない。

スクルーシはあたふた自分の事務所の窓に走り寄つて、中を覗いて見た。從然の通りに事務所には違ひないが、さて自分の事務所でない。家具装具は同じものではなくて、椅子に掛けて居る人物も自分ではない。幽霊はさいふに相も變らず他方を指して居る。

彼は再び幽霊さ一しよになつた、そして一體どうして何處へ自分は行つてしまつたのだらうと怪しみながら、幽霊の後に踵いて行くさ、さうく彼等は一つの鐵の門へさ辿り着いた。スクルーシは入らぬ前に足を佇めてあたりをきよく見廻した。

墓場だ。して見るさ、此處に、自分が今こそ其名を知らなければならぬあの哀れな男は土の下に埋められて居るのだ。こはまことに素的に結構な場所だ。四面は家屋に取巻かれ、植物の育生に非ずしてその枯死から生えたものなる雑草惡草に茂り掩はれ、而も埋める死骸があまりに多過ぎて隙だに

なく、食欲満々土壤は肥えて居る。有難い場所だ！

幽霊は墓の間に立つて、その一個を指差し示すのだ。スクルーシはわななくと慄えながらその墓に近寄つた。幽霊はすつかり元の姿のまゝであるのだから、その嚴肅な姿の中になにか新しい意味がありさうに思へてしきりに無氣味になつて来る。

「あなたのお指しになるあの墓石へ近寄つて行く前に、」スクルーシは言つた、「只一つ答へて頂きたいんですがね。これらのものは未來必ず起る事柄の幻影なんですか、それとも或は起るかも知れないさいふに止まる事柄のすがたなんですか？」

かう言はれても幽霊は依然として墓の傍に立つてその墓を指差して居るのだ。

「人間の行爲つてもものは行末の如何を前以て見越すもんです、もし相不變その行爲を續けて行けばその行爲は必ずそれ相應の行末の禍福へ人間を導いて行くもんです、」スクルーシは言つた。「けれども行爲が變つてしまへば、行末もまた變るでせう。あなたのお見えなさるさころも、やはりその通りださおつしやつて下さいませんか！」

幽霊は相不變びくとも動かいのである。

スクルーシはその方へ爬ふやうにして進み、進みつゝもぶるゝと慄えた、そして、指の差して居る方向を辿つて、顧みる人もなく荒れるに任せた墓石の上に、彼は自分の名を讀んだのである、エブ

ネザア、スクルーシ。

「するさわしが寢床の上に轉がつて居たあの男なのですねえ？」彼はべたりと膝を地に下して叫んだ。指は墓から離れて彼の方を差した、そしてまた元の通り墓の方へ戻つて行つた。

「いや飛んでもない、幽霊さん！お、飛んでもない、そんなことが！」
指はなほもそのまゝ其處に止まつて居るのだ。

「幽霊さん！」彼はしつかり幽霊の衣裳にしがみついて叫んだ。「聽いて下さいませーわたしはもう前のやうな人間ではありませんよ。あなたとこのお交際がなかつたらきつさうであつたに違ひないといふやうな男には決してなりはしませんよ。もしわしがもうすつかり望がないといふのなら、何故まあこんなものをわたしに見せなさるか？」

こゝに始めて幽霊の手は動くやうに見えた。

「御親切な幽霊さん、」スクルーシは幽霊の前につたり身を投げ倒してしまつて、前の言葉をつらけて言つた。「あなたの御氣質としてこのわたしのためにお執成しをして下さいませ、そして此を可哀相な奴だと思つて下さいませ。どうかお願いですから、これまであなたがお見せ下さつたこれらの幻影といふものは、わたしの改心しましたこれからの生涯でまったく變へることができると確かしておつしやつて下さいませませんか？」

御親切な幽霊の手は打ちふるえた。

「わたしは心の中でクリスマスといふお祭を決しておろそかにいたさず、年が年中お祝ひいたすことにいたさせようよ。わたしはこの後、過去、現在、未來に生き長らへませう。過去現在未來の三つの幽霊さん達はわたしの一身の中で張合ひ勵み合ひなさるでせう。そんなわけ故わたしは幽霊さん方の教へなさる御教訓は閉出しにするこゝなく肝に銘して守りませう。お、この石の上に書いてある姓名を消してしまつていゝさ、どうぞおつしやつて下さいませー」

狂はしくも悶えながらスクルーシは幽霊の手を掴まへた。幽霊の方ではそれを振り放さうとする、けれどもスクルーシは願望して止まず、幽霊をぎつと捉へて居る。幽霊の力には然しながら彼も敵し難く、彼は反れ飛ばされてしまつた。

自分の運命を裏返しにしてやらうと、これを最後の祈禱に心を舉げて手をさし上げるさ彼は幽霊の頭巾や衣裳に何か變化の起るのを見た。さそのすがたは縮み、潰れ、衰へて遂に一本の寢草柱となつてしまつた。

五 その終結

さうだ！そして寢臺の柱はスクルージ自身の寢臺の柱なのだ。その寢臺もまた彼自身のものだ。部屋もまた同様に自分のものだ。就中最も結構に最も幸福なることは、彼の前に横はる「時」がまた彼自身のものであることだ、その来らむ時に於て、彼は大いに罪亡ぼしをするのだ！

「俺は過去、現在、未來に生きるのだぞ！」スクルージは寢床から轉げ出ながら先の言葉を繰返した。

「かの三人の幽霊は皆々俺の身内に於て相競ひ相勵むに違ひない。お、ジャコブ、マアレエーかういふことになつたのを、俺は天にまたクリスマス節にお禮をいふぞ！俺は跪いてお禮を述べるのだ。ジャコブの爺さん、俺は跪いてお禮をいふのだよ！」

スクルージはそれから善を行はうといふ心掛ができたので、そのために大いに得意の鼻うごめき心はいや熱して、その潰れたかすれ聲は、到底彼の祈願にふさふさふさなかつた。スクルージは今が今まで幽霊と闘争格闘して劇しく泣きじやくつて居たので、その顔は涙に濡れて切つて居た。

「こいつらばもぎこられては居やしないぞ、スクルージは床帷の一枚をその兩腕に摺み込みながら大きな聲でいつた」「こいつらあ持つて行かれやしないぞ、輪と丸を持つてかれやしないぞ。みんな

なこゝにあらあーわが輩もこゝに居らあー未來に起るぞ見せつけられた様々な事の幻影は遂拂はれるかも知れんぞ。遂拂はれるとも。遂拂はれるに違ひないぞー」

かう喋り立てる間にも彼の手は衣服をひれくりまはして大忙、裏返しにするやら、上下を取違へて着てしまふやら、びりゝ引裂いたかと思ふと、今度は置忘れて見たり、着物をあらゆる無法亂暴な頓珍漢の相手にして居るのだ。

「こりやまあどうしていゝのやらさつぱり譯がわからないぞー」スクルーシは一息の中に或は泣き或は笑ひながら吐鳴り散らす、そして靴足袋を穿かうとして動きが取れず、まるでかのラオコーンのやうに悶えながら。「俺様はまるで鳥の羽毛のやうに身も心も軽いわい、天の御使の女のやうに心は晴れてうれしく、小學校の小兒みたいに面白可笑しいわいーわが輩は酔漢のやうに眼がぐるぐる廻るんだいー滿天下の皆々様、新年お芽出度お祝ひ申し上げますーホーイーオーイーー」

スクルーシは居間へ跳ねたり飛んだりしながら入つて行つたが、今や彼はそこに突立つて居る、あまりにはづんで息をせかく切らして居る。

「おやくお粥の入つたお鍋がこゝにごさるぞー」スクルーシは叫んでまたも跳ね出し、爐の周圍をびよんゝ周り歩いた。「ジャコブ、マアレエの幽霊がお入りござつた戸がこちらにごさるなーそのな隅つこは「現在のクリスマス」の幽霊さんがお坐りなつたぞ、そなたにはうるゝ彷徨く

幽霊さんたちを見た窓だなー何から何まですつかりその通り、すつかり眞實だ、みんなあつた事共だは、は、は、は、はー」

げにもげにも、長年の間笑ひの練習をしなかつた人間にさつては、すてきな立派な笑ひだつた。滅相天晴れな笑だつた。晴々しい笑ひの長い家系の御先祖様だ！

「それにしても今日は一たい何月の何日なのか俺は御存知なしだ、」スクルーシは言つて、「俺は一たいどれほど長い間幽霊さーしよになつて居たのやらそれわからないんだ。俺は何にも御存知なし。俺はまるつきり赤ん坊だ。構はないさ。構ふもんか。俺は赤兒になつて居た方が結構だ。おーいーほーいーおーいーこらー」

有頂天になつて居たところへ俄かに教會堂の鐘が鳴り出したのでふさ我にかへつた、その轟きさいつたら彼が生れてから聞いた例もないほどに陽氣なものであつた。カツチンカツチン鐘槌の音ーザンドンザンと鐘の響ー鐘の音がドン、ジャン、槌の音がカツチン、カツチヤンーお、すてきたぞ、すてきたぞー

窓のまごころへ走り寄つて、スクルーシはそれを明け放ち、頭を突出した。霞もなければ霧もないからりと晴れ亘つて牙々しい陽氣なびりゝ冷たい天氣、血が躍るやうに寒くて太平な天氣、金色繁たる旭日の光、朗々天國の如き空、芳美清新の大氣、嬉々として響きわたる鐘の音。お、す

てきだ！天晴れ見事な！

「今日は一たい何の日だね？」スクルーシは日曜の晴着を着飾つた窓の下の一人の子供に呼びか付く叫んだ、この子は恐らく自分の身装を注意して見やうとしてぶら／＼立ち寄つたのであらう。

「え何です？」少年はありつたけの驚愕を加減で訊ね返した。

「今日は一たい何の日だね、え、君？」スクルーシは言った。

「今日！少年は答へた。」なーんですれ、今日はクリスマスのお祭りぢやありませんか。」

「は、あクリスマスのお祭だつたぞー」スクルーシは獨言をする。「俺はクリスマスを祝ひ損ねはしなかつたのだな。幽霊さん等は一晚の中にあらゆる事を一から十まですつかりやつてくれたのだ。幽霊つてものは何事でもし、いと思ふことができるんだな。勿論出来るさもさ。勿論出来なくつてさおい、君々！」

「おーい！少年は折返しに叫ひかへした。

「おまへさんは次の次の通の、角のさこの鳥屋さんを御存知かい？」スクルーシは訊ねた。

「知つてさうなもんだと思ふけど、少年は答へる。

「伶俐な坊ちやんだ！」スクルーシは言ふ。「すてきもれえ坊ちやんだ！おまへさんはあのお店にぶら下つて居た御進物の七面鳥が賣てしまつたかどうか御存知ないかい？——小ぢやい方の七面鳥ぢや

ないよ、あの大きい方のだよ？」

「あたいぐらぬ大きいかい？」小兒はまた訊きかへした。

「何さいふ氣持のい、坊ちやんだらう！」スクルーシは言った。「こんな子と話をするのはほんに愉快だわい。さうだよ、おしやれさん！」

「まだお店に下つてるよ、」子供は答へた。

「お店に下つて居るつて？」スクルーシは言った。「それなら行つて買つて来ておくれな。」

「うそだい、ばか／＼しい！」子供は答へた。

「うそなもんか、うそなもんか。」スクルーシは言った。「わしは眞面目でいふんだよ。行つて買つて来てくんね、そして店の者にこゝへ持つて来るやうに言つてくれな、そしたら送り届けるさころを教へてやるからね。おまへさんも店の者さ一しよに来るんだぜ、そうすると五十錢やるからね。五分間以内に戻つて来るならね、わしは一圓遣るつもりだぜ！」

こどもは弾丸さながらに飛んで行つた。こんなにも速く弾丸を撃ち出すことができる人は、余程の射撃に熟達した人でなければならぬ。

「わしはその七面鳥をホツプ、クラザットのさころへ送つてやるのだ、」スクルーシは、両手を磨り合せ、腹をか／＼へての大笑ひをしながら、誰か送つたさいふことは先方で知らないやうにしておいて

彼の紳士であつた。この老紳士、ふたりかうして出會つたら、自分のことを如何思ふだらうと考へるに、彼の胸には劇しい苦痛が襲つて來た、然しながら彼は將に取るべき方針を明確に心得て居たので、直ちにその心得に従つて行動した。

「これはく、」スクルーシはさくく足を早めて、老紳士の兩手を把り、「御機嫌いかがでございませう？ 昨日は寄附金の方も旨く行つたことでせう。實に御殊勝なお心掛だご感服いたしますよ。クリスマスおめでたうございませう、へえー」

「スクルーシさんでしたな？」

「さやうで、」スクルーシは言つた。「いか様わしはそのスクルーシでござります、してその名を耳にして御不快にお思ひぢやないかさはや氣遣はれますで。どうぞ一つ御寛恕を願ひたいものです。そこで誠に御手数でもござりませうが——」スクルーシはそこで老紳士の耳に口を寄せて呶いた。

「おやく、これはく——」老紳士は息も断れてしまひはしないかと思はれる程に驚いて叫んだ。「スクルーシさん、そりやあなた眞面目でおつしやるんですか？」

「そりやおつしやるまでもありませんさ、」スクルーシは言つた。「唯今申し上げた金高よりたゞの一二錢だつて少ないことはないのですよ。勿論其中には後日拂のも澤山ありまするがな。それではさういふことに願はれませうか？」

「それはもうあなた、」老紳士は言つてスクルーシと握手をする。「わたしはもう何と申していゝやらわかりませんが、そのあなたの御厚——」

「何もお禮などおつしやつて下さいますなよ、どうぞ、」スクルーシは答へた。「どうぞ手前共へおいで下さるやうに。おいで下さるでせうな？」

「お邪魔いたしますの位ぢやありません！」老紳士は叫んだ。まんざら遁辭でもないらしく、來るつもりでいつて居るのは明かであつた。

「それはどうも有難う、」スクルーシは言つた。「それは何とも忝けない。幾重にもお禮を申し上げます。ちや御機嫌よろしう！」

彼は教會堂へ行つたり、街々をほつゝき廻つたり、あちらこちらさいそがしく奔走する人々を見たり、小供等の頭を撫でゝやつたり、乞食共に言葉をかけたり、家々の臺所を覗いて見たり、窓を見上げたりした、そして何から彼まで何に愉快を與へないものはないのであつた。彼はこれまで散歩さいふものが——いや何事によらず——こんなに幸福を自分に與へてくれるものは夢にも思ひ及ばなかつた。午後になるさスクルーシは甥の家の方へ歩みを移すのであつた。

さてその家の前に行くに、十何返も往つたり來たり玄関の前を通つて見て、やつと思ひ切つて歩み寄つて戸を叩く勇氣が出た。

「御主人は御在宅かな、もし？」とスクルーツは少女に言つた。きれいな少女一實に綺麗な！
「宅でございますよ。」

「何處においでだね、え？」スクルーツは訊ねた。

「食堂においで、ございますの、奥様と御一緒に。お二階へお案内いたしませう、さどうぞ。」

「これはどうもありがたう。御主人はわしをよう御存知だよ、」スクルーツはかういふさもう其手を食堂の把手にかけて居た。「わしはこゝへすぐ入つて行かう、ね。」

スクルーツはしづかに把手をぐるり廻し、その顔を横にして戸に寄せて覗き込んだ。ふたりはちやうど食卓（大さう立派に併べ立てゝある）を眺めて居るころであつた、一體若い世帯持の人々といふものに他を招じて御馳走するさいふやうな時にはいつも神経過敏になりがちなもので、何も彼もすつかり大丈夫さいふまで見極めたがるものなのだ。

「フレッド！」スクルーツは呼んだ。

かわいさうなこつたらない、スクルーツの姪はびつくりしてしまつた、何しろスクルーツは室の隅に姪が足置臺に足をかけて座つて居るのを其時ばかりは忘れてしまつて居たのだ、さもなけりやかやうのこゝがあらうこも甥の名を呼ぶなんかいふこゝはできるものではなかつた。

「おや、一たいこりやどうしたのだ？」フレッドは叫んだ、「ありや誰だらうな？」

「わじぢやよ。伯父さんのスクルーツさ。御馳走のおよばれに來ましたのさ。入つていゝかれ、フレッド？」

入つてもいゝかこゝ有難いお慈悲にも、甥はスクルーツを拒斥けはしなかつた。五分間も経つ中にスクルーツはすつかり遠慮が除れてしまつた。いかなるものさ雖もこれより心から面白いこゝはありやしない。姪はまるで幽霊の示してくれた通り。トツパア君も入つて來るのを見るさまるで同じ。丸ぼちやの妹も入つて來るさるをみるさまるで瓜二つ。どの人もどの人も入つて來るさこゝを見るさ全然同じである。ふしぎな宴會。ふしぎな遊戯、すてきな和合、す——て——きな幸福！
が、スクルーツは登くる朝早く事務所へやつて行つた。おゝ、彼は夙くも其處へやつて行つたのだ！それは先づ自ら其處へ詰めて、ホツプ・クラチットが遅くやつて來るのを待ち受けて捉まいてやらうさいふのだ！これこそ彼が渴望して止まぬさるの物であつた。

而も彼の思ふ壺に餓つた、さうだ、思ふ壺に餓つたのだ！時計は九時を報じた。ホツプは來ない。十五分経つた。ホツプは來ない。定刻を後れるこゝが正に十八分三十分にして、ホツプはやつて來た。スクルーツは戸を開け放しておいて椅子に掛けて居た、書記の槽のやうな部屋へ入つて來るのを見やうさ——いふのだ。

ホツプの帽子はホツプが戸を開けない前に已に脱かれた、襟巻もその通り。彼は瞬く間に椅子に

掛けた、そしてペンをさつて大急行に書き出した、まるで九時に追ひ附かうさするかのやうに。

「おいー」出来るだけ平常の聲に近く作り聲をしてスクルーシは突慥に唸つた。「こんなに遅くやつて来るつてのは何のこまぢやい？」

「どうも誠にはや済みません、へえ。」ポツプは言つた。「つい遅くなつてしまひましひな。」

「遅くなつたさもさー」スクルーシは同じ事を繰返して、「さうさ、遅くなつたやうだぜ。これへやつて来て貰ひたいですな、え、どうしたもんですえ？」

「一年にたつた一度のことでございますで、へえ。」ポツプは槽から出て来て辯解した。「もう二度さは決して致しませんから。何しろ昨夜少々遊び過ぎたやうなわけなので、へえ。」

「さて、わしはおまへさんに話すことがあるから聽いて下さいよ、親友。」スクルーシは言つた。「わしはね、もう今までのやうなこまはこても一刻だつて我慢がならんぢや。それだから、彼は椅子から飛び下りて、ポツプの胴着に穴が明きやしないかと思はれる程うんご突掛け、ポツプをよろここまた槽の中へよろけ込ませながら言葉をつづけた。「それだからな、わしはおまへさんの月給を上げてやらうと思ふんだ。」

ポツプはぶろくさふるへた。そして簿記棒の方へちよつさばかり寄つて行つた。スクルーシをそいつで殴り付け、ふん擲へて、路次の人々を加勢に呼び集め、動けぬやうにする胴着を着せてやらう

こいふ考が閃めくやうに彼の頭をかすめたのだ。

「クリスマスおめでたう、ポツプー」スクルーシは言つた、ポツプの背をポンと叩いてかう言つた風がいかにも熱心眞面目で、きちがひの沙汰さはどうしても思はれない。「クリスマスおめでたう、ポツプ、これまで長年おまへさんに申し述べたクリスマスよりすつこおめでたいのぢやー！わしはおまへさんい月給を上げるよ、そしておまへの困つて居る家計を助けてやるよ、この事に就いちや今日の午後湯氣の立つ甘葡萄酒 クリスマスの祝盃を擧げながらよく相談しやうな、ポツプ！火を作れよ。そして一つの字を書かない中に石炭入れを買つておいでな、ポツプ、クラチットー！」

スクルーシは實行に至つてその言葉以上であつた。彼は以上口に言つたこまをすつかり行つた、その上いくらでも漙なく行つた、そして實は死なないちびのタイムに對しては第二の父となつた。彼は友さし、主人さし、はたまた人間さして、この善い古い市、いやこの善いなつかしい世界中の善い古い市、町、村に匹ひのない程立派になつた。ある人々はスクルーシの變りやうを見て嘲笑した。が彼は笑ふ人には笑はせておいて、そんなこまにはあまり頓着しなかつた、こいふのもこの世の中ではどのやうな善い事でもその出發點では必らず存分に笑はれないでは居ないこまを彼は充分承知して居たのである、そしてかゝる輩は何の道盲目だらうと思つて居たので、こんな手あひが齒をむきたし眼を

くちやくにして笑ふのは、病氣がもつと目立たない風に笑ひ皺を寄せらるも同様だと考へた。スク
ルーシ其人の心情が笑ふのだ、そこでそれが彼にさつてはまるきり満足なのだ。

爾來スクルーシはスピリット（幽霊酒）と交際を絶ち、其後はすつと禁酒主義を守つて暮して來
たのだ、もし生きてる人にしてその事を知るさいふものがあるさすれば、スクルーシこそいかにせば
クリスマスを充分祝はれるかに就いて知つて居る御當人ださいふ評判が常に立てられた。われくりに
於てもかゝる評判を眞に立て、貰ひたい、われく一同が！さあそこで、ちびのタイムの言に倣はう、
神よわれくを祝福し給へ、誰も彼も一人残さず！

—終—

大正四年四月十九日印刷
大正四年四月廿二日發行

—定價五十錢—

著者 矢口 達

發行者 植竹喜四郎
東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地

印刷者 成田 滿
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷所 公木 社
東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地



發行所

電話 下谷三九一
振替東京 二九五三

植竹書院

—本製神福—

■ 庫 文 竹 植 ■

アルツイバシエウ作
無想庵譯

武林三編
第一版

原稿紙九百數十枚の大作
全六號四百二十頁に縮刷
四六判總布製美本
定價九拾錢
送費八錢

解題 アルツイバシエウの代表的傑作として衆評の一致してゐる本書は彼が二十四才の作
で(一九〇〇年の出版)過渡期の思想小説を銘を打たれて公にされた。讀書界の歡迎は露都の作
紙價を一時に高からしめた概があつて、實に空前の賣行だと云はれてゐる。而して主人公サ
ニンの思想は忽ちにして露國青年男女の思想界を席捲しサニン主義を奉ずる男女の秘密結
社に至る處に出現した。その社會的影響の甚大なのに驚いた露國官憲は遂に本書の發賣を禁
止し、然し雜誌現代の主筆クラニフエリド氏は本書を發行したる廉により八ヶ月の刑に處せられ
た。然しそれは露西亞の國情が然らしめたので公平な眼で見て是は立派な高級藝術品である。

ロングオゾオ原著
第二版
潤先生譯

總布製裝幀極優美
全六號三百四十餘頁縮刷
定價九拾五錢
送費八錢

天論
譯全
天才論

期待せられたる天才研究の最大權威現はる。凡そ天才を論じてかくまで該博精緻なる科學的
研究の根據たる天才研究の詩歌文章また一種獨得の文學を構成す。この書の基調たる天才も言は
ず引照せられたる幾多の關係は狂者、癡病者等の辛辣なる心理的解剖となり兼て精神病
者の複雑なる奇抜なる關係は狂者、癡病者等の辛辣なる心理的解剖となり兼て精神病
院の文藝者、癡病者等の辛辣なる心理的解剖となり兼て精神病
に於ける非ざる心理學藝術の例證となつて現はる。科學書にして科學書に非ず、文學書
より解する人々は先づ此の書を読め！

植竹文庫

生田長江 著
生田長江 共譯
第三編 新刊

罪と罰

定價壹圓四拾錢
送費 八錢

原稿紙千五百餘枚の大作全六號
六百餘頁に縮刷一頁一千餘字詰

フリスドリのツヒ・ニイチエその「偶像の微光」に於て曰く「ドストエフスキイは我が生涯の最美なる幸福の事等かの事を學ばざるを得ざりし唯一の心理學者なりとす。彼は我が生涯の最美なる幸福の事件に屬す。此偉大なるドストエフスキイの代表傑作「罪と罰」は唯徒に名のみ吾人の耳に熟して未だ其實を見る事能ざりしは常に吾人の遺憾とせし處。然るに今や兩生田先生の苦心の下に全譯成り空前の廉價を以て近く市場に現れんとす敢て讀書界の慶事たるを信せん

ト馬御ス
相馬泰三
第四編 新刊

復活

定價壹圓八拾錢
送費 十二錢

原稿紙千六百枚四六版
全六號活字八百頁の大作

背皮總布製美本

近世文學に於ける世界の驚異、人道の聖者トルストイ翁の作品は悉く之れ人間の苦惱と幸福と愛の模倣者なうちにも此「復活」こそ彼の藝術座が昨年來非常の盛況を以て各地に興行し或は數の名著のうちにも此「復活」こそ彼の藝術座が昨年來非常の盛況を以て各地に興行し或は愛の模倣者なうちにも此「復活」こそ彼の藝術座が昨年來非常の盛況を以て各地に興行し或は問題の最も痛烈なる第一の見解である。譯文は相馬御風、相馬泰三兩氏の手になり能く原書の趣きを傳へて遺憾なし。

現代代表作叢書

第一篇 第十版

森田草平 著

縮刷

煤煙

(本合卷四)

傑作煤煙を知らざるものは未だ現代文藝を語るに足らず、唯この名著の出版者があまりに發賣禁止の厄を恐れたる爲め前後二卷の合冊となして徒らに價格の増漲を來し、完成に數年を費したる等讀者をして購讀に多大の不便を與へたるは實に我が文界の恨事なり。今や合本縮刷成る。即ち價格に於て從來の三分の一の廉價となり裝幀に於て會心の美本となる。乞ふ一本をそなへよ

新形總布極美本
全六號活字
定價九十錢
送費 八錢
特製定價
壹圓六十錢
送費 八錢

第二篇 第五版

鈴木三重吉 著

縮刷

珊瑚樹

(集選作傑吉重三)

内容

櫛の雨 一枚の瓦
桐の雨 小三津さん
赤い鳥 黒血
穴

今迄著はした十數冊の小説集の中から著者自身に最も氣に入つた作物ばかりを選び集めて縮刷したものです。讀者は本書一冊を讀みて、赤門派隨一の作家三重吉氏の精粹を會得するを得べし

縮半截四百十餘頁
總クローヌ木版
手刷十數度刷
全六號一頁七百餘字
定價九十五錢
送費 八錢

■ 現代代表作叢書 ■

第三篇 第五版
谷崎潤一郎著

縮刷
麒麟
(集作傑郎一潤)

●著者が自ら會心の作として撰集せられたるもので實に氏が代表作であることが同時に殆んどその全集と見ることが出来る

小説 The affair
麒麟 Two wat hoes
刺青 恐怖
少年 惡魔(前編) 象
秘密 惡魔(後編) 戀を知る頃
封間 捨てられるまで 春の海邊
太郎

◎戲曲
西生

結城素明装幀
横山、長野四大
安田、平福家畫
羽二重表紙
箱入頗美本
五百五十餘頁
定價壹圓廿錢
送費八錢

第四篇 第三版
田山花袋著

縮刷
小春傘
(集選袋花)

●我が純客觀派の文學は著者によりて完成されたり、實に著者の創作は明鏡の如し、本書は其精を蒐めて遺漏なきに信す真に萬代に傳ふべき傑作集なり

内容
別れてから 幼死 幼兒
別る、まで 町山へ 蒲團
幼きもの 椿の花
おし 家の 不庖安
土手の卒

箱入絹布表紙
極美製本
全一冊四百頁
定價壹圓
送費八錢

■ 現代代表作叢書 ■

第五篇 第三版
正宗白鳥著

縮刷
まぼろし
毒

縮刷
泥人形
微妙光

縮刷
二家族
挿話

長田幹彦著

裝幀頗優美
箱入美本全一冊
全六號縮刷

定價九拾五錢

送費八錢

第六篇 再版

内容
舞

▲▲▲
零落
尼僧
雛勇

▲▲▲
扇昇の話
お鳥邊
山鶴

▲▲▲
滂尼僧光珠
送り火

深刻なる藝術は著者の創作に求むべし、本書收むる處の作品は著者の自ら許すもの、悉く讀書界を風靡せる傑作にして、何人も一讀すべき著者獨特の傑作集なり

京の舞姫を描いては妖艶無比、漂泊の藝術家を拉しては凄絶無比、或は雪深き北の國に思を密め、或は紅燈のものを美妓と語る、實に著者は我が文壇唯一の抒情佳人なり

■ 現 代 代 表 作 叢 書 ■

田村俊子著

あきらめ

第七編 再版 内容

あきらめ 生血 魔女 作者

木伊乃の口紅 憂鬱の句 炮烙の刑

「あきらめ」は、大阪朝日新聞で金二千圓の懸賞小説募集に第一等に當選した長篇の傑作であつて、他は其れから後の最も苦心した而して評判のあつたもので、著者自身が選擇した即ち會心の作のみである。

菊半截四百頁 箱入絹表装 高雅なる美本

定價 九拾五錢

送費 八錢

現代文壇大家代表作選集！

續刊

小山内 薫 上 司 小 劍 泉 鏡 花

德田 秋聲 國木田 獨步 中村 星湖

内容！ 著者自ら選擇中

■ 薔 薇 叢 書 ■

第一編 デューマ作 福永挽歌譯 全譯 椿 姫

總クローズ製極美本 菊半截畫入四百頁

定價 八十錢

送料 八錢

第二編 メエテルリンク作 若月紫蘭譯 全譯 青 い 鳥

菊半截箱入 總布製美本

定價 五十錢

郵税 六錢

第三編 モウパッサン作 吉江孤雁譯 全譯 縮刷 水 の 上

菊半截箱入 總布表紙頗美本

定價 五十錢

郵税 六錢

第四編 シルレル作 船木葉之助譯 全譯 ウ井ルヘルム・テル

菊半截箱入 總布製美本

定價 五十錢

郵税 六錢

モウパッサン作
廣津和郎譯

四六版五百餘頁
總布箱入極美本

五全
版譯

女の一生

發賣禁止

定價金壹圓參拾錢

モウパッサン作
廣津和郎譯

全一冊六號四百頁
袖珍形羽二重製美本

改訂全
縮刷譯

女の一生

定價五十錢

送料六錢

美しくしき處女の眼に憧れ深く映じたる人生の姿は戀と情慾との涙と微笑とを知りし時如何に惱ましく悲しく意味深く戀り行きしか。モオパッサンの精緻なる描寫と犀利なる觀察とは彼女の生涯に捧げたる此の一篇を得て始めて生く。

アナトール・フランス作
谷崎精二譯

袖珍形羽二重製美本
全一冊六號二百數十餘頁

全女
譯優タイス

定價四十錢

送料六錢

タイスは古代エジプトに住んだ妖艶無比な一舞妓の名である。墮落と罪惡との裡に燦然として輝いてゐた芳麗な一肉體の名である。一代の聖僧の非凡なる信仰と離行とに打ち勝つた否か、難い人生の偉なる力であつた。——タイスの生涯は我々に何を物語つてゐるか。

イブセン原作
長田幹彦譯

袖珍形羽二重製美本
全一冊六號百八十餘頁

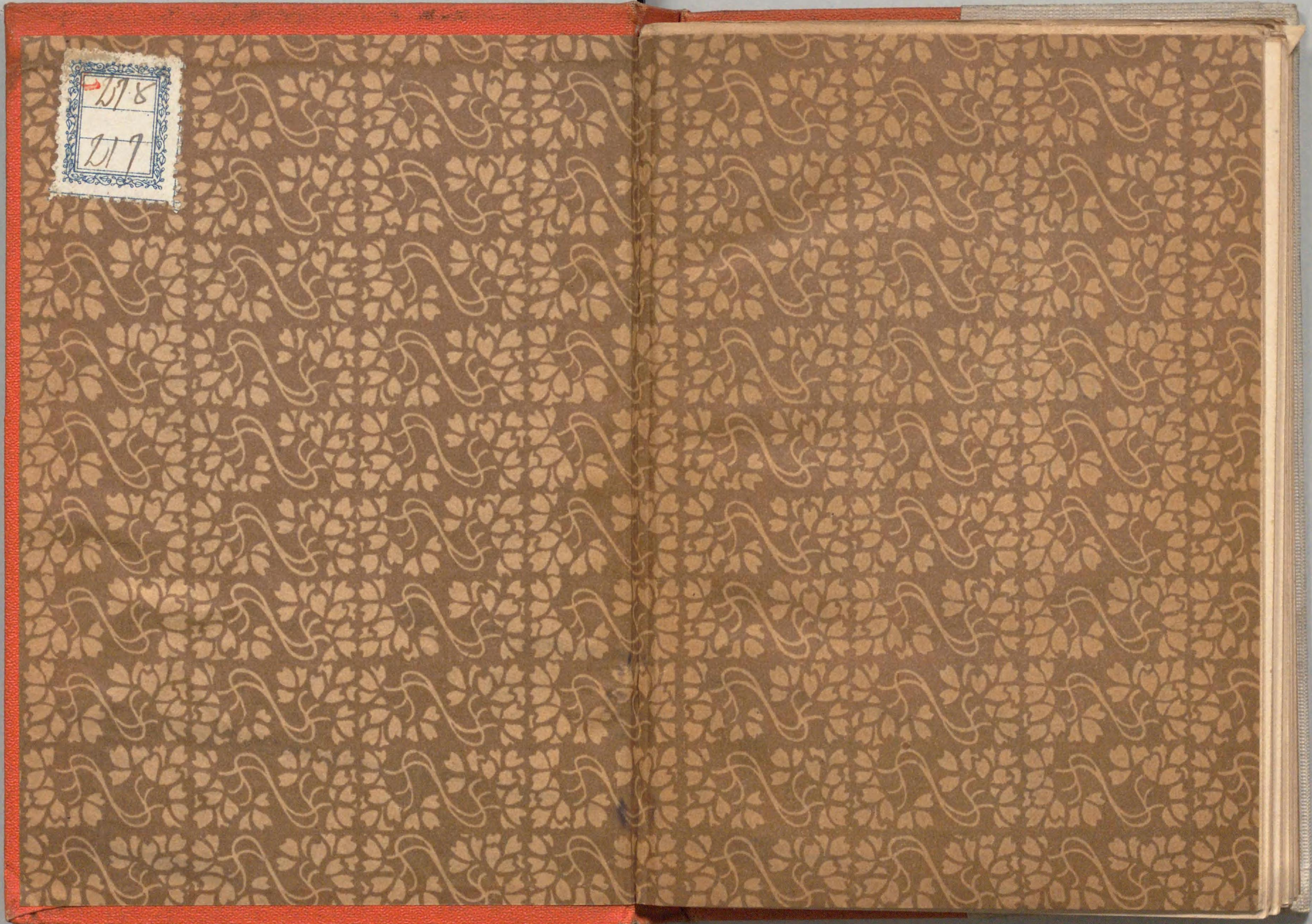
全
譯人形の家

定價三十錢

送料六錢

本書はイブセンが傑作中の傑作、總ゆる婦人問題の出發點と稱せらる。現代にあつて女主人公ノラの名を知らざるは恥辱なり。名を知つて内容を知らざる者は更らに愧死すべし。新劇壇の明星松井須磨子はノラに扮して初めて今日あるを得たり。

218
217



児乙部15-Y



1200600482933